

独立行政法人国立文化財機構 東京文化財研究所

第4回無形民俗文化財研究協議会報告書

—無形の民俗の伝承と子どもの関わり—

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所

無形文化遺産部

序にかえて

皆様おはようございます。無形文化遺産部長の宮田でございます。今回の第4回の無形民俗文化財研究協議会、急に今朝から冷え込んだ中、皆様、朝早くからたくさんお集まりいただきまして、ありがとうございます。今回は非常にたくさんの方々から申し込みいただきまして、申し込んでいただいた方が全員来るとここはほぼ満席で埋まるという形ですので、若干遅れていらっしゃる方もいるかと思います。その際は、席のお詰め合わせをよろしくお願いいたします。

今年の協議テーマは「無形の民俗の伝承と子どもの関わり」というのをテーマに設定させていただきました。その趣旨等につきましては、このあと俵木から趣旨説明がでございます。思い起こしますと、この無形民俗文化財研究協議会は第4回でございますが、その前に、民俗芸能研究協議会という形で、私どもの前身であります芸能部時代に8回の研究協議を行ってまいりました。ちょうど10年前、1999年の12月に、やはり子どもに関わるテーマを設定いたしました。その際は「学校教育と民俗芸能」というテーマで、第2回の民俗芸能研究協議会として行いました。今回は、学校教育という限定よりももう少し広く、それから民俗芸能だけではなくて、無形の民俗全般にという形でやや広げた形でまたご報告いただきます。

今回に先立ちまして、第2回のときの報告書を読み返したりしていたんですが、この10年間で、日本のおかれている状況というのは非常に大きく、特に政治的な状況は変わってまいりました。今年に限定して申しまして、夏に政権交代があり、さまざまな形で今までの枠組みの見直しが行われている段階でございます。それが良い方向に行くのか、悪い方向に行くのかということがまだ見極められないという現状でございます。そうした中で、今回はさまざまな子どもたちへのプロジェクトといいますか、さまざまな取り組みをなさっている現場の方から事例を報告いただいて、午後にその事例を踏まえた形で、コメンテーターを交えた総合討議を行っていききたいと思います。

本日夕刻5時半までを予定しておりますので、非常に長丁場でございますけれども、ぜひ最後までご参会いただきまして、活発にご議論いただければと思います。簡単ではございますが、私の挨拶とさせていただきます。よろしくお願いいたします。

(平成21年度「第4回無形民俗文化財研究協議会」挨拶より)

東京文化財研究所無形文化遺産部長 宮田繁幸

目 次

| | | |
|------|--|-----|
| I. | 序にかえて | |
| II. | 趣旨説明 | 1 |
| III. | 報告 | 5 |
| 1. | 「大磯の七夕行事の継承の取り組み」 | 7 |
| | 大磯町郷土資料館学芸員 佐川和裕 | |
| 2. | 「大鹿歌舞伎の継承の取り組み」 | 17 |
| | 大鹿村教育委員会社会教育係長 北村尚幸 | |
| 3. | 「伝統文化こども教室事業の現状と課題について」 | 23 |
| | 財団法人伝統文化活性化国民協会事務局次長 松本保之 | |
| 4. | 「直根小学校における民俗芸能への取り組み」 | 31 |
| | 由利本荘市立直根小学校長 金 利紀 | |
| 5. | 「餅・団子を通した様々な「発見」 ～東北歴史博物館が小学生と行った民俗調査から～」 | 37 |
| | 宮城県教育庁文化財保護課技術主査 小谷竜介 | |
| IV. | 総合討議 | 47 |
| V. | 参考資料 | 73 |
| VI. | アンケート結果 | 113 |
| VII. | あとがき | 126 |

趣旨説明

東京文化財研究所無形文化遺産部 俵木 悟

続きまして、今回のこの協議テーマ「無形の民俗の伝承と子どもの関わり」についてご説明させていただきますと思います。

はじめに、これだけたくさんの方にお集まりいただいて、本当にありがたく思っております。特に無形民俗文化財研究協議会になってからは、毎回、それまで以上にたくさんの方にお越しいただいているということで、この協議会もそれなりに定着をしてきたのかなということで喜んでおります。

先ほど部長の話にもありましたとおり、それまで民俗芸能研究協議会という形で8回開催させていただきましたが、それを平成18年に現在の無形民俗文化財研究協議会に改めまして、今回はその4回目の開催になります。今回の協議テーマは「無形の民俗の伝承と子どもの関わり」とさせていただきました。言うまでもないことですが、無形の民俗文化というのは、人から人へ世代を超えて受け継がれてきたものです。従って、後継者などという言葉を私たちはよく使いますが、若い世代の人たちという、その潜在的な受け皿があってはじめてこれから先にも伝えて残していくことができるわけです。民俗の伝承にとってこの若い世代の人々というのは、言ってみれば絶対的な必要条件になっているわけです。しかし現在、それが非常に困難な状況にあるということと言うまでもないことだと思います。

例えば、私もここ何年か青年団が伝えている民俗芸能とおつきあいをさせていただいていますが、かつて民俗の伝承を中心的に担っていた主体の1つというのは、いわゆる若者という世代の集団です。私がそこに調査に行ったりすると、今では人が少なくて、「お兄さんみたいな若い人がいてくれればねえ」なんて長老の方から冗談を言われたりもするんですけれども、これが冗談としてもちょっと寂しいのは、本来であればもう私などは、若者とか青年団と呼ばれるような年齢では全くないわけですね。40近く、いわゆるアラフォーという世代ですので、もう若者なんて言われる世代ではないんですが、「あなたみたいな若いのがもっとたくさんいてくれればねえ」なんて言われる。逆に言うとそれだけ若い人たちが少なくなっているということなんだろうと思います。そんなところにもこの深刻さというのは表われているわけで、これがさらにその下の世代、つまりこれからその主体となってほしいと願う子どもたちとなりますと、その深刻さの度合いというのはさらに増してくるだろうと思います。

ただ、そうした困難さというのにも大きく2つの局面があると思っておりまして、1つはもうこれはどうしようもない絶対的な人の数の不足という問題があります。少子高齢化というようなことが盛んに言われるようになってどれだけたつのか分かりませんが、ここ数年は、その少子化対策というのが国家政策の最重要課題になるというほど緊急の問題となっているわけです。とりわけ、今でも民俗伝承の重要な現場である農山漁村地域での少子高齢化というのは非常に著しくて、場合によっては1つの集落の中に中学生以下のいわゆる学齢期の子ども

さんが一人もいないというようなことすらあるわけです。

こうした状況について言えば、正直に言うと、もうこれは民俗文化の伝承という問題の範囲の中だけで考えるということはほとんど不可能でして、そういった地域の社会生活をいかに維持するのか、あるいはもっと突き詰めて言うと、そもそも維持する必要があるのかというようなとても大きな問題です。こういう状況に関して言うと、そこでその民俗の伝承が残るとか残らない云々というようなことを言うのは二の次の問題になってくるのではないかというふうに感じています。

もう1つは、現代の子どもたちを取り巻く環境の変化によって、民俗の伝承が困難になっている状況もあるということです。そしてこうした状況こそ、私たちがいかに対処すべきかということを経ひとも考えなければいけない問題なのだろうと思います。現代の子どもたちを取り巻く、例えば社会制度とか、情報とか、物質的環境とか、そうしたもののすべてによって育まれるさまざまな価値観、こういったものは前の時代から大きく変化しているというだけでなく、それぞれ一人ひとりの事情によって非常に多様化しています。例えば、学校か家庭か地域社会かというような、それぞれの生活の単位にどのように関わっていくかというのは、一人ひとりの子どもであるとか、その家族がそれぞれ考えて選択するような時代になっているわけです。そんな中で、かつてはある地域に住んでいれば深く理由を考えることもなく、当たり前に参加して担っていくようなものであった地域の民俗事象というのが、多くの人にとって今や当たり前のもものではなくなっているような状況があるように思います。

このような時代に、子どもたちに民俗の伝承に親しんでもらうためにはどうしたらいいのかを考える、あるいはそのきっかけとなるような実践を行っていくというのが今回のテーマの目論見ということになります。

民俗と一口に言っても、さまざまな対象といえますか、さまざまな事象の性格、あるいはさまざまな地域の事情などがありますから、必ずこうしたらいいという1つの答えが得られるとは初めから思っていないのですけれども、しかし、そういった取り組みのヒントであるとか、そのために利用できる制度にどんなものがあるとか、あるいは学校と、教育委員会のような行政と、現地の実践者の間にどういう関係をつくっていけばいいのかというような、そういった意味ではそれぞれ特徴のある有意義な事例を、本日ご報告いただけるのではないかと思います。

また今、宮田からも話がありましたが、このテーマを考えるに当たって、1つ外せないのが、やはり学校との関わりであろうと思います。子どもの世界というのは今や、その是非は置いておくにせよ、学校というのが中心になっております。その学校では、少し前までは地域の文化に対する体験的な取り組みというのを、かなり積極的に推し進めていました。これが例えば民俗芸能とか民俗音楽なんかの分野では、これからは学校こそがその民俗芸能の伝承母体になるんだと思われるくらいの盛り上がり方があって、実際に非常にうまくその取り組みを進めていた例というのもあったとは思いますが。ところが、ごく最近になって、そうした声あまり聞かなくなった。そうした取り組みもどうも下火になってきているのではないかというような雰囲気を感じられます。それは1つには当然国の教育のあり方というのが、一時期の方針への反動からなんでしょうけれども、教科学習の重視という方向に舵を切り直しているということが、おそらく背景にあるのだろうと思います。

本日も学校との関係の深い取り組みの事例というのをたくさん紹介していただけたと思いますが、今言ったような状況があるなかで、そういった地道な努力をどれだけ継続的にやって

いけるか、それがどのような効果を持っているのかということを考えていかなければいけない。そのためには学校教育の都合に合わせて学校教育の側から発言するだけではなくて、例えばこういった民俗であるとか、それにまつわる文化財というようなものを考える側からも検討して発言していく必要があるかというふうに思っております。今回の協議会がそうした機会になればいいなと思ひまして、このようなテーマを設定させていただきました。

ちなみに、先ほど宮田のほうから紹介がありました第2回の民俗芸能研究協議会の報告書は、これは私もまだここに入っていない時代に開催した会でしたので、まだ手付かずでありましたが、あらためて今回の協議会に合わせて報告書を PDF 版にして、私ども東京文化財研究所無形文化遺産部のウェブサイトから皆さんにダウンロードをしてもらえるようにいたしましたので、ご関心のある方はそちらのほうもあわせてお読みいただければと思います。

報 告

報告 1

大磯の七夕行事の継承の取り組み

大磯町郷土資料館学芸員 佐川和裕

司会 俵木悟（東京文化財研究所無形文化遺産部） それでは早速、事例報告に入っていきたいと思います。まず初めは、「大磯の七夕行事の継承の取り組み」です。どうしてもこうした子どもの民俗の取り組みというと、民俗芸能とかそういったものが多くなるんですが、せっかくの機会ですのでこういった行事的なもの、民俗行事の事例の1つとしてご報告をいただこうと思ひまして、このたびお願いをいたしました。大磯町郷土資料館学芸員の佐川和裕さんです。どうぞよろしくお願いいたします。

佐川和裕（大磯町郷土資料館学芸員） 神奈川県の大磯町からまいりました、佐川と申します。どうぞよろしくお願いいたします。ただ今の趣旨説明の話を聞いておりまして、あらためてさまざまな大きな問題があるんだなと認識をしましたが、私の話が果たしてその趣旨に沿うものなのかどうかというのは大変自信がございません。1つの事例報告としてお聞きいただければ幸いに存じます。どうぞよろしくお願いいたします。

今日ご報告いたします七夕行事を伝承している大磯町ですが、狭い神奈川県の中であって大変行政範囲の小さな町です。しかし、深い歴史のある町だというふうに自負しています。例えば古代には相模国府があった場所と想定されておりますし、最近では中世の大変良好なご神像が十数体も見つかりまして、おそらく彫刻史をされている方の中では話題に上ったかもしれません。近世には東海道の宿場町として発達したところで、近代以降は別荘地として政財界人の名立たる方々が別荘や本邸を構えた場所でもあります。ある一定の年齢の方以上になりますと、初代総理大臣の伊藤博文、あるいは戦後最初の総理大臣である吉田茂が住んだ町ということで名前のご存じの方もいらっしゃるかもしれません。それよりちょっと下の世代になりますと、大磯ロングビーチで、一時期、一世を風靡しました芸能人水泳大会があつたりして、かなり名前としては知られているだろうと思います。ただ、最近の若い方に対しては、あまりアピールするだけのものがないのが現状です。既に皆さんもご承知かもしれませんが、今年の春に旧吉田邸が火災で全焼してしまいました。現在、再建に向けて進めており、多くの方にご寄付をいただいている状況です。

前置きが長くなりましたけれども、お手元に資料がございますので、それを見ながらお聞きいただきたいと思います。今までちょっと町のご紹介もしましたが、いわゆる民俗行事というものもたくさん残っている町でもあります。国指定、あるいは県指定クラスの行事も多く、例えば「大磯の左義長」という行事が国指定になっておりますし、これからご報告する七夕行事は国の選択という形になっております。それから県指定の中では国府祭（こうのまち）というのがございます。それからこの七夕も県指定にさせていただきました。そのほかにも、町指定と

なっているような行事がたくさん残っております。

私は大磯町出身ではなく、隣の平塚市の出身ですけれども、私からしても非常に保守的な町に見えます。二十数年前に大磯町で仕事をするようになってから感じたことですが、七夕が伝承されている西小磯という地域は特に保守的であって、30年、40年住んでいてもまだ地元民として認めてくれない、他所者扱いされるというような話をよく聞きました。まして区長さん、要するに地域の自治会長などは、他所者が就くということはありません。そのような土地柄でした。ただ、ここ二十数年たちまして随分変わってきております。区長さんも、新しくできたマンションの住人の方になっており、かつては考えられない状況になってきております。そういう変化が、おそらく地域のお祭りにも影響してきているだろうと考えております。そのような土地柄であるということをまずご認識いただけると幸いです。

2 ページ目のところに、大磯の地図を掲げておきました。地図を見ていただいてもお分かりになりますように、大変小さな町です。人口は3万2千人ほどです。それから学校数では、幼稚園が6園、小中学校がそれぞれ3校ずつ、さらに自治会数が24、子ども会数が21団体です。後ほど子ども会の話も出てきますが、そのような小さな町を実感していただける数値ではないかと思います。

今回ご紹介する七夕が伝承されている地域は、西小磯という地域です。西小磯は、大磯町のほぼ中央部ということでご承知いただければよろしいかと思います。南に相模湾が広がっておりまして、すぐ背後に大磯丘陵が広がっています。

江戸時代の天保12年に成立した『新編相模国風土記稿』の中には次のように書かれております。「往古は大磯宿、及加宿東小磯共に一区たり、後大小二区に分れ、後又小磯の地、東西二区に分割せし」と書いてあります。要するに、もともと大磯宿という1つの集落でしたが、それが大磯と小磯に分かれ、さらに小磯の地が東小磯と西小磯に分かれたというような経緯になっております。地図では中央に西小磯、右側に東小磯、さらに右側が大磯というような地理的な関係になっております。近世では西小磯村という1つの村でした。ところが、実生活レベルでの西小磯村というのは、さらに西小磯西と西小磯東という2つに分かれています。なぜこういうことをお話しするかというと、村の構造をまず理解しておかないと、七夕行事が少々理解しにくい部分もあるためです。

かつての西小磯村の範囲は、今では西小磯東と西小磯西という2つの自治会に分かれているわけですが、現在でもかつての西小磯村という1つのくくりの名残もあります。例えば村の鎮守である神社のお祭りでは、西小磯西、西小磯東それぞれの会計とは別に、大部落費という言葉を使っておりますけれども、西小磯全体で会計をするような会計システムがあります。若干、外から見ると分かりにくい構造になっております。

西小磯西と西小磯東の中には、さらに小さなまとまりがあります。西小磯西では本郷、田中、西、中、高砂（たかすな）に分かれています。西小磯東では西分、中分、東分と分かっていたようですが、中分というのは今はほとんど行事においても顕在化せず、通常は西分と東分という2つに分かれています。実はこの小さなまとまりごとに、それぞれ七夕行事がありました。

そして、それぞれに「子ども連」という呼び方をしておりますけれども、子どもたちだけの集まり、子ども組と言ったらいいいでしょうか、そういった集まりがありまして、子ども連ごとに七夕の行事が進められていたわけです。現在は西小磯東で1カ所、西小磯西で1カ所という状況になっております。これは後ほど経緯もお話をしていきたいと思います。

次のページに、昭和30年ごろの七夕行事の写真がありましたので参考のために載せておき

ました。カラスライドで、それ自体貴重ですけれども、当時の様子が分かります。七夕行事はもう皆さんもよくご存じだと思いますけれども、大きく2つの源流があるというふうに言われております。1つは中国の牽牛織女の伝説に伴う星祭り。それが日本や朝鮮半島に広がって、日本では貴族の乞巧奠（きっこうてん）というものに伝わっていったという流れがある。もう1つは、水浴びをして、笹飾りや人形を川や海に流して、お盆を迎える、先祖を迎える、その準備をするための行事です。これからご報告する西小磯の七夕行事は後者の行事といえます。実際に地元のご年輩の方々も、お盆のオショウロサン、ご先祖さんを迎えるために村の中を祓い浄めてきれいにするんだというようなことは、明らかに言葉として伝えてもいらっしゃいますので、後者の内容であるということが分かります。

それでは写真を見ながら内容の説明をしたいと思います。

まず、写真は大きく2つに分けました。1つは西小磯東地区、それから後から出てくるのが西小磯西地区です。若干の行事の違いなどもありますので、分けたほうが説明もしやすいということで分けました。8月の6・7日、いわゆる月遅れの日が七夕ということでもともと決まっておりました。この写真は西小磯東で、8月6日に子どもたちが竹飾りを持って集まったところです。実際には8月1日に宿というものを決めまして、一番の年長者がその宿を受け持つのですが、そこで子どもたちが集まって、ごはんを食べたりする、そういう宿という制度があります。そして5日になると竹を採って飾り、そして6日の当日を迎えるというような手順です。もともとは東分、西分と、西小磯東の中でも分かれていたんですけれども、今は1つに統合されております。ですから人数は昔と比べると逆に多くなっています。そういう状況がこの写真からもお分かりいただけると思います。

これからこの竹飾りを担いで、所々でお祓いをしながら村の中を回ります。宿は今、個人のお宅ではなくなりました。地域の集会所ができて、そこを利用するようになりました。ただ昔と同様に、宿の前に万灯（まんどう）という、写真の手前左側に灯籠のようなものが写っていますが、これを立てております。これが宿の目印ということになっております。宿の左手にあるセエノカミサンに向かって子どもたちが竹を祓って唱えごとを言いながらお祓いをしているところです。そして竹飾りを担いで、町内を歩いて回ります。途中で神社なども通ります。もちろんその場所場所でお祓いをするわけです。この写真はたまたま壁に向かってやっていますけれども、実はここは神社のかつての大通り、入り口だったところです。今は東海道線が通っていて遮断されてしまっているんですけれど、その先の神社に向けてやっているところです。神社ですとか、あるいは道祖神であるとか、あるいは昔は井戸であるとか、あるいは辻ですね、そういったところにお祓いをして回るといった内容です。

この写真は川の橋のところですね。1つは橋、それからすぐ隣に道祖神があるため、ここでは2回お祓いを行います。

宿に戻ると、おやつになります。写真では手前に女の子が写っていますが、西小磯東では女の子は参加しておりません。おやつのときだけ一緒にお茶を飲んでいるだけであって、実際の行事はもともと男の子だけの行事でしたので、西小磯東ではまだ従来の形を残しております。本来はおやつとして出すものも大体決まっています。スイカや安倍川餅。必ず安倍川餅というのを出します。きな粉をまぶしたお餅ですね。場合によってはあんころ餅。それからサツマイモを蒸かしたものが、通常の今までのスタイルでした。しかし、最近ではだいぶ内容が変わってきております。

明治生まれのご年輩の方のお話によると、6回回って次の日に7回目を回るとおっしゃって

いましたけれども、今では2回しか回りません。2回回り終わりますと、今度は子どもたちが持っている竹飾りを束ねまして、竹神輿を作ります。写真には一人だけ高校生がここに写っていますが、あとはみんな親ですね。本来は子どもたちだけで作る行事です。ただ、子ども連というのは、宿をやらないと抜けられない。最年長者が何人もいると、宿が回ってくるまで時間がかかる。例えば5人、だいたい小学6年生とか中学生ぐらいが一番年上にいたとします。そうすると順番に宿が回ってくるわけですから、最初の子は6年生で抜けられますが、一番最後の子は高校生ぐらいでないと抜けられないというようなことが実際にあったようです。西小磯東では、昔は兵隊検査の20歳ぐらいまでに抜けられればいいほうだと言われていましたので、青年、いわゆる年長者も多く入っていました。したがって、実際に子ども連だけで竹神輿を作れたのでしょう。今は大人が手伝っています。この写真が完成した竹神輿です。子どもたちが担いだ竹飾りがみんなこの中に巻き込まれています。

次の写真はたまたま子どもたちを撮ったものです。最近はいさい子と大きい子、その縦のつながりが希薄になりましたが、こういう行事になると小さい子から大きい子までが一緒になって遊んでいる。年長者が小さい子どもを指導しながらみんなで一緒に遊んでいるというのが、実にいいなと思って写しておきました。

夜になりますと、竹神輿を担いで集落の中を練り歩きます。そして、やはり唱えごとをしながら、竹神輿を上下に揺すってお祓いをする。年輩の方は波を表わせと言っていました。波を表わすように後ろから前下竹神輿を動かすのだと年輩の方は言っておられました。竹はまだ生木ですので非常に重たいです。

この写真は次の朝、8月7日の早朝です。昔は早朝にまた集落の中を一度回ったそうですが、今は集落を回らないで、すぐに海へ竹神輿を流しに行きます。子どもたちがみんなで泳いで流します。かなり沖のほうまで泳いで行きます。大磯は丘陵地で山が背後にありまして、相当沖に行かないとその後ろの山が見えてきません。地曳網などは相模の大山を見ながら漁場を見定めるといようなことをしていますが、大山が見えるところまでは行くには、700~800メートル、1キロぐらい沖まで行かないと見えないんですね。かつてはそういうところまで泳いで流した。ここは海水浴場ではなくて、急に深くなっており現在は遊泳禁止ですが、地元の子どもたちはここで泳ぎを覚えたといひます。

次の写真は西小磯西の七夕行事です。やはり宿の前に万灯を立てます。同じように子どもたちが竹飾りを担いで回っています。道祖神のところでお祓いをしているわけですが、唱えごととは西小磯西はすでに半分失われておりまして、非常に短い唱えごとになっております。ただちょっと違うのは、七夕踊りという、子どもたちがお面を被って1軒1軒回るといふ行事があります。これは西小磯西だけしかありません。かつては張り子のお面を被って1軒1軒回っていました。それも小さな集落ごとの子ども連でしたので、それぞれの子ども連が自分たちの小さな集落を回って、民俗では門付けという言い方をしますけれども、いわゆる門付けをしてお賽銭をもらっていました。今でも七夕踊りと称してやっております。子どもたちが太鼓を叩きながら、本当にたわいない踊りをしながら回ります。後でよく調べてみましたら、この踊りにもどうもルーツがありました。神社のお祭りの中に小磯囃子というのがありますが、どうもその中の1つの踊りのようです。子どもたちはここで踊りを習いながら、やがて青年になったときに神社のお囃子の中で踊っていく。多分そういう意味合いがあったんだろうと思ひます。

この写真も宿です。ちなみに西小磯西では、現在、子ども会単位でやっております。という

ことは当然女の子が入っているということになります。そして、西小磯西では、竹神輿を子どもたちだけで作らせているのが特徴です。だいたい5年生と6年生が中心になって自分たちで作っています。これは非常にいいことだと思います。地元の人たちが、何とか子どもたちで作らせようと指導しています。実は大人は大人でもう1基、隣で作っているんですけども、子どもたちだけで作らせることで、充実感が得られる。5年生の子どもたちも、来年は自分たちが中心になってやらなければいけないということで、かなり目を輝かしながらやっております。この写真が完成したところです。

続いて、同じように竹神輿を担ぎます。竹の数を見ていただくとかなりの本数がありますので、これは非常に重たいです。今は2基で、高学年用、低学年用と2つに分かれて町内を練り歩いて、村はずれの身代わり地蔵でお参りをしてお札をもらって帰ります。ちょっと面白いのは、途中で電柱に竹神輿をぶつけるというような行為をするんですね。これはもともとは神輿の前の竹を揃えるためにぶつかったりしたのが始まりのようですが、他にも隣の町内と会うと竹神輿どうしがケンカになったということもあります。そういうことが入り組んで、電柱にぶつけるという行為が生まれたようです。大正生まれの経験者に聞くと、電柱にぶつけることはやっていなかったというので、おそらく途中からできた習慣なんだろうと思います。最近では新しい、かつては家がなかったような地域へも回っていくというふうに、竹神輿のコースも随分変わってきています。

最後に鎮守のところに行ってお参りをします。最近では昔のようにちょっとケンカをしようじゃないかということで、2基で争いをする。それがまた子どもたちにとって面白いということで、新しい魅力が生まれてきております。

翌朝、竹神輿を海に流します。この写真を見ていただきますと、小学生が3人、それから高校生が1人、実際に泳いで沖まで行っております。

この写真は昭和30年代の状況ですけども、かつては非常に竹も長くて、昔の人が言うにはもっとでかい竹を競争で採ったんだよというようなことを言っておりました。手前の道は東海道なんですけど、当時の七夕踊りの様子です。次は20年ぐらい前の写真ですが、まだ個人のお宅で宿をやっていた頃です。食べ物もスイカと、それからちょっと見えにくいのですが、安倍川餅が見えます。当時は、まだ伝統的な食事をしていました。

写真は以上です。時間もだいぶ少なくなってきましたので、課題とまとめをしないといけません。

ご覧いただいたように、いわゆる星祭りとは若干違った、やはり水に関係するような、あるいは豊作豊漁に関係するような行事であるということはお分かりいただけるのではないかと思います。この行事を伝えていくにあたって根本的な大きな問題は、一言で言うと、伝承している母体が既に変わってきているということです。かつては、先ほど言いましたように非常に小さな集落ごとに子ども連という組があったわけです。ご承知のように、村の中には一定の年齢階級の集団がかつてはありました。この西小磯にも、子ども連、それから青年会、青年会が終わるといわゆる年寄りということで、1つの年齢のまとまりがありました。子どもたちは子ども連を卒業すると青年会に入るんですが、宿をやらないと抜けられないという関係から、子ども連と青年会に入る年齢が重複をします。そのあたりがほかの地域と違うところかもしれません。青年というのは村の中での発言力が大きくて、やはり村を左右する中心的な運営をする年齢層ですから、青年会に入るために子ども連の役をやり、あるいは非常に暑い、一番暑いときに七夕行事をやり遂げる。そして、社会的なルールだとか、いわゆる村の中での必要な体力

的な試練を子ども連の中で経験して、そして青年会に入る。おそらくそういうような意味合いがあったんだろうと思います。

ところが、昭和40年代に入りますと、これがガラッと変わります。子どもが単純に少なくなりまして、子ども連が結成できなくなる。西小磯東では昭和50年のときに4人ぐらいしかいませんでした。それで翌年は実施しませんでした。西小磯西でも昭和40年から50年ごろにかけて相次いで実施できなくなってしまった。ところが昭和51年に、ある1人の有志が立ち上がりました。何とか復活させようということで、自ら1軒1軒訪ね歩いて子どもの参加を取り付けて、翌年に西・東ともに両方とも復活を果たします。

ただ、復活をしたときに大きく運営方法が変わりました。西小磯東は保存会として立ち上げました。西小磯西は子ども会として立ち上げました。保存会というのは、いわゆる子ども連の要素を残しております。男の子だけの参加しか許しませんし、実際にその子どもたちの面倒をみるのは一番年長者の宿当番の子ども、そして親です。一方、西小磯西は子ども会行事として行いました。子ども会行事ですから女の子も参加しておりますので、そこでスタイルがガラッと変わってきております。ただ、子ども会の役員も1年交代ですから、七夕行事にかかわる親御さんも1年交代となります。まあ、考え方によっては子ども連の一番上の年長者も1年ごとに順番に抜けていくわけですから、実質的な負担はそれほど変わらないことになります。

一方、保存会のほうは個人的に非常に熱意のある方が中心になって引っ張ってききました。しかし、その方もだんだん高齢になり、つい最近90歳を過ぎました。保存会というのはいわば名前だけで、実際には会長さんといいますか、その方の熱意によって引っ張ってきたような状況ですので、今度は逆に継続が危うくなっていきます。しかし、幸いそれを見ていた何人かの比較的若い方が何とか保存会を継承しようと動きました。一度話し合いをもちました。私も同席させていただいたのですが、やはりこれまでと同じように子ども連の形式を残していこう、女の子は参加させないでやっていこうという形で決まりました。とりあえずは当面は大丈夫だろうと思います。

子ども会での執行は、行事内容や質が変わってきていますが、子ども会組織がしっかりしていますので、次の役員への引き継ぎさえ確実にできれば、おそらく子ども会のほうが行事の継承は非常にやりやすいだろうと当初から思っておりました。確かに資料でもお渡ししましたように、例えば行事予定表などをしっかりと作っておられます。子ども会行事の一環としてその行事を担当しますので、そういう意味では非常にしっかりとしているのです。ですからこれはいいだろうと思ったんですが、近年、皆さんもご承知と思いますが、子ども会の組織、子ども会自体の活動が非常に危うくなってきております。

資料をご覧ください。「大磯の子ども会および会員数の推移」とあります。24地区あるうち、今子ども会があるのは17地区。ただ、規模の大きな地区がありますので、団体としては23団体あるのですが、子ども会のない地区が7地区あります。そのうち、2地区は今年、解散しました。さらに、来年の3月に1団体解散する予定です。子ども会の活動が停滞し、あるいはできなくなっていくという状況がここに出てきております。ただし、人数が多くても解散するという事例もあるんですね。だから必ずしも少子化だけではなくて、ほかの要因が考えられます。それはまた時間があれば触れたいと思います。そういうような現状ですので、むしろ子ども会での執行というのも楽観できない状況になりつつあります。

子ども会自体でも対策をとっています。1つは新住民の方が随分入ってきていますので、昔の行事のことを知らないんですね。手伝おうと思っても、竹神輿の作り方も分からないという

ことで、竹神輿を1基、郷土資料館に入れて1年間保存展示して、次の年にそれを出して、見本にしながら作るというようなことを考え出しました。1年ごとに交代して、古い竹神輿は流さなくてお焚き上げをすることになりました。

それからもう1つは、別に同じ地域の子どもだけでなくでもいいじゃないかという話なのです。要するに地元の子どもだけでなく、他の地域の友達が興味を持ってやりたいと言ったら、声をかければいいじゃないかということです。違う地域の子どもを呼び込んでいるんですね。これから子ども会自体の活動が停滞しつつある中で、ある意味では新しい試みなのかなという感じはいたします。

それから、もう1つ、ちょっと感じていることがあります。それは、私自身その行事を執行している当事者ではありません。行政あるいは博物館の立場からずっと関わりを持ってきましたが、果たして我々に何ができるのか。1つは正しい評価をしてあげる、あるいは歴史的な経緯や意味を正しく伝えてあげる。そういうことで子どもたちも何をやっている行事なのか、何のためにやっている行事なのかを理解する。子どもたちだけではなくて、実は子どもの行事は親がとても大事です。親が賛同しないとなかなか子どもは参加できません。だから、親御さんにそういうことを十分理解をしていただく。自分たちがやっている行事がこれだけ価値があるものだということを理解していただけると、非常にやりがいを感じてやっていただける。そういう評価といいますか、価値といいますか、そういうものを与える役目が行政であったり博物館であるのかなと思います。その上で、経済的な、あるいは物質的な支援をしてあげる、そういうことが必要だと思います。

もう1つ感じていることがあります。実は博物館のようなところに長くおりますと、ずっと継続的に行事を見ております。単なる傍観者ではなくて、何らかの形でずっと関わってきていますので、例えば継続が危うくなったときに何とかそれをつなげる役目をしてほしい、伝承者になってほしいというような気持ちを、当事者から感じるがあります。これは七夕行事だけではありません。例えば学校の出前授業へ行ったときに、昔話をしてほしい、あるいは米づくりの話をしてほしいと頼まれます。そういうときにあらかじめ伝承者から聞いていた話を伝えるわけですが、体験をしていないと実感的なことを話せない。実は子どもたちは、伝承者としての話を博物館の学芸員に期待しているようなところを最近感じております。このあたりをもう少し細かくお話ししたかったんですが、時間がなくなってしまいました。

決して目新しい事例ではないですけれども、ご意見をいただければと思います。どうも失礼いたしました。

司会 ありがとうございます。非常に興味深いお話でしたけれども、せっかくですので、少しだけですが、佐川さんのご発表に対してに限りませんが、質問があれば1、2受け付けますがいかがでしょうか。

伊藤優（仙台市教育委員会文化財課） 仙台市からまいりました伊藤と申します。よろしくお願ひします。とてもありがとうございました。1点だけ、親の賛同が非常に大切だというお話をいただいたり、子どもたちに対しての正しい評価を何らかの形でというお話がありましたが、それは具体的にはどのようにされたのでしょうか。

佐川 細かい話になってきてしまうのですが、行事自体のもともとの目的というのがご

ぎいました。これは年輩の方が言うには、この七夕行事というのはお盆を迎え、ご先祖様を迎えるにあたって、村の中をきれいにする、それと同時に、農業の豊作だとか、あるいは漁業の豊漁とか、そういうものを子どもたちが村の人たちに代わってお祓いをしながらやってくれているんだという。そういうような認識をかつては皆さんが持っていたんですね。そういう認識もだんだん生業が変わって、村の人たちも持てなくなってきました。

子どもたちにとっても、非常に暑い過酷な時期なんですね、我々が一緒に後をついていっても倒れるような本当に炎天下の一番暑い時期に、子どもたちは汗をかきながら、何でこんなことをしなければいけないんだろうというような考えを持つ子ども当然出てくるでしょう。そういった状況のときに、もともとこの行事はこのような意味があったんだと説明してあげると、子どもたちは、ああ、そういう流れで我々はやっているんだ、だから大事なことなんだというような認識を持ってくれる。もちろん、本当ならば、なぜ今やることが大事なのかという部分までも考えなければいけないのですが、少なくとも過去にこれだけの意味があったんだということを認識してもらっただけで、子どもたちのやる気といいますか、そういうものが違ってくるように感じました。

それから、子どもさんの参加するような行事というのは、やはり親の理解を得ないとなかなか子どもさんの参加を許してくれない。子どもたちだけで勝手にというようなことはやはりできませんので、どうしても親が理解して、親の許可をいただかないといけません。あるいは、高学年の親がいわゆる役員という形で参加します。実際に私も感じますが、子ども会とかPTAの役員を務めることは大きな負担です。役員をやるのが嫌で子ども会をやめてしまうという人もいます。だからそういう人たちの理解を少しでもいただく、役員として親御さんがこういう行事にも関わってもらえる、そういう環境づくりの1つとして、行事の評価を与えてあげるのは良いことだろうということです。答えになっていますかどうか。

司会 よろしいでしょうか。

伊藤 例えば、その親御さんとか子どもさん向けに何かのイベントとか、ワークショップみたいなものとか講座みたいなものを開くとかということではなくて、その都度、実際にその場にいた学芸員の方とかがご説明をするということでしょうか。

佐川 特に私は深く関わろうとは思っているわけではなく、後方支援みたいな形の立場のほうがいいかないつも思っているわけです。やはり実際の執行者の方が自ら考えて進めていったほうが長続きしますし、そういう意味で私どものほうから行事を持ちかけたことはございません。ただ、逆に役員さんのほうから七夕の話をしてくれとか、資料のデータを欲しいというようなことに対しては積極的に提示します。それから各メディアですね、新聞とかタウン誌などに、例えば町の広報でもいいんですけど、そういうところに積極的に知らせるだけでも、地域の中で行動しやすくなるようです。要するに、七夕踊りをしながら1軒1軒回っても、不審に思われず、あ、そういう広報に載っていた行事なんだなということで協力していただけるとか、そういう環境づくりといいますか、そういう面でございます。

司会 ありがとうございます。ちょっと時間が押しておりますので、ご質問はこれでいったん打ち切らせていただきます。ちなみに、皆様の資料袋の中に質問用紙が入っております。

これに記入して、午後の総合討議の前までに出していただければ、質問の数によってはすべて取り上げられるという確約はできませんけれども、最後の総合討議の間に、できるだけお答えいただけるようにしますので、以降、質問のある方はそちらもご利用ください。では佐川さん、どうもありがとうございました。

報告 2

大鹿歌舞伎の継承の取り組み

大鹿村教育委員会社会教育係長 北村尚幸

司会 では続きまして2件目の事例報告をいただきます。2件目は長野県の大鹿村教育委員会社会教育係長の北村尚幸さまより、「大鹿歌舞伎の継承の取り組み」ということでお話をいただきます。北村さん、どうぞよろしくお願いします。

北村尚幸（大鹿村教育委員会社会教育係長） ただ今ご紹介いただきました、長野県の大鹿村教育委員会の北村と申します。私は村の職員ですが、大鹿歌舞伎という芸能がありまして、その歌舞伎の弾き語りの太夫の芸を今習っています。平成2年に教育委員会に配属になったのですが、師匠の片桐登さんが当時は教育長をやっておりまして、当時の村長さんが、「お前さんは早く片桐さんところに行って歌舞伎を覚えろ、事務なんかは誰でもできるんで、早く歌舞伎を覚えろ」ということで、大鹿歌舞伎の保存に関わる仕事をさせていただいております。

それでは初めに、この大鹿歌舞伎が伝承されております大鹿村というのは一体どんな村であるかということをごっと触れておきたいと思います。

大鹿村は長野県の南部に位置しまして、南アルプスの麓にございます。南アルプスは3,000メートル級の非常に険しい山脈に囲まれた典型的な山村です。江戸時代は天領地でございます。年貢は樽木（くれぎ）という屋根材に使う材木を江戸表に出して生活を立てていた林業の村であります。平成21年10月末現在、人口は1224人ということで、昭和20年代ごろまでには5千人以上を数えましたが、典型的な過疎ということで、よく少子化、高齢化、過疎化ということ言いますが、もはや「化」ではなくて、「化」というのはそうなりつつあるということなんですが、大鹿の場合は少子、高齢、過疎の地域の中で、この大鹿歌舞伎という芸能が伝承されております。主な産業は農業とか観光業とか、あるいは公共土木の建設業が主な産業となっております。

また、平成17年、大鹿村は「日本で最も美しい村連合」というところに加盟しております。これは北海道の美瑛町という非常に美しい風景写真で有名なところでもありますけれども、そこが事務局になっておりまして、現在は33町村が加盟しています。大鹿村の場合は南アルプスの大自然の景観もさることながら、大鹿歌舞伎に代表されるような文化を大事にしている村であるということが評価されて、この日本で最も美しい村連合というものに加盟しております。

最近、糸魚川が世界ジオパークにユネスコから認定をされておりますけれども、この大鹿村も南アルプスと中央構造線エリアというジオパークになっておりまして、この写真の谷にあるように、この大きな谷が1つの中央構造線という日本で一番大きな断層が南北に走っている様子がよく分かる写真かと思います。こういった地域資源にも非常に恵まれた村ということであり

ます。

人口が1,200人ということでもありますので、よく最近、マスコミ等で言われていますが、限界集落なんぞという集落もいくつもありまして、子どもはおろか、もう高齢者しかいない世帯のみで存在する集落がいくつも出てきておるといふそういう中で、大鹿歌舞伎という芸能が残っているといふことはなぜだといふ方が非常に多くおられます。考えてみれば、歌舞伎といふ芸能は江戸の大変に賑やかな都市型の芸能でありまして、消費文化の頂点になるような芸能なんです、そういう華やかな芸能がなぜこの信州の山の中の、しかも単なる山の中ではなくて、非常に険しい秘境のようなところに残っているのか不思議だといふことをよく問われることがございます。

その大鹿歌舞伎なんです、ざっと歴史を紹介したいと思っておりますけれども、皆さんのお手元に「大鹿歌舞伎編年表」といふものが付けてありますので、またゆくりご覧いただきたいと思っております。大鹿歌舞伎が文献上に登場しますのは明和4年でありまして、これは西暦で言いますと1767年といふしますので、今からおおよそ240年ほど前に、当時すでに「鹿塩狂言さわぎ」といふ記述が村の名主の日記帳の中に出てまいりまして、鹿塩狂言の鹿塩といふのは鹿塩地区の地名です。江戸時代は、大鹿村は鹿塩村と大河原村の2つの村で存在しておりました。それが明治22年になって、両方の頭文字をとって大鹿村ということになりましたので、決して大きな鹿がいるという村ではなくて、合併によってできた名称でございます。その鹿塩村の人たちが上演をした歌舞伎が非常に盛り上がりまして賑やかに上演がされていたといふ、そういう記述が明和4年の記述であります。ですので、240年ほど前にはすでに、村の人たちが人の前で歌舞伎を披露するほどの芸を持っていたといふことでもありますので、さらにその一番発端となる伝承、いつごろから大鹿歌舞伎が始まったのかといふのは、もっと遡れるのではないかといふふうに推察されます。ですので、今、非常に乱暴かもしれませんが、四捨五入して約300年ほどの歴史がございます。ということで紹介をしております。

そういった大鹿歌舞伎ですけれど、この写真にあるような舞台が、今現在4カ所、村の中に残っております。最盛期にはこういった舞台、これは間口が6間、奥行きが4間、総2階で、2階が楽屋になっておりまして、下の舞台で歌舞伎を上演するといふ、これは回り舞台が付いた舞台であります。こういった舞台が、最盛期には13カ所あったという記録があります。

その1点をとっても、いかに歌舞伎が盛んに行われていた村であるかということがうかがわれるわけでもありますけれど、その歌舞伎の形態といふのは奉納歌舞伎という形で、この舞台のあるところも神社の境内の中にごございます。単なる娯楽ではなくて、神事の一環として神に奉納する歌舞伎で、ずっと継承されてきております。

その奉納歌舞伎を担ってきたグループといふのがありまして、それは昔は若連とか、あるいはお祭り青年といった青年のグループです。村の若者たちは、ある一定の年になりますと、この若連といったようなグループに入りまして、この奉納歌舞伎の一切の運営を任されました。これは1つの通過儀礼でもあり、最近、古老の口からもよく聞かれるのですけれど、若連に入ってから歌舞伎をやることで、あの息子も一人前になったんだと、社会的に認知をされる。逆に歌舞伎もできんようでは一人前ではない、というような空気が村の中を占めていたといふくらいの勢いであつたようでもあります。地芝居の豊饒な土壌といふのは、そういう歌舞伎が村の中に隅々まで行き渡っておりまして、老若男女、すべての人たちが歌舞伎に関わっていた。また、奉納歌舞伎という形でも、生活のサイクルの中に歌舞伎が組み込まれていた。そういった大鹿歌舞伎の歴史がございます。

そういった大鹿歌舞伎ですが、平成 8 年に国選択の無形民俗文化財ということで選択を受けておりまして、もう皆様ご存じだと思いますが、これは重要文化財指定の一步手前の文化財でありまして、選択するのは文化庁長官が、これは国の文化財として価値がありますよということで選択を受けたわけでありまして。

実はこの選択を受けたのは、芝居の分野では大鹿歌舞伎が初めてということで、この翌年に、今日も酒田市の方が見えておりますけれど、山形県の酒田市に黒森歌舞伎という歌舞伎が選択されていますけれど、この大鹿歌舞伎と黒森歌舞伎のみが、今現在、国選択文化財ということになっています。

ざっとですけれど、大鹿歌舞伎の歴史に触れさせていただきました。

ではその大鹿歌舞伎はどのように継承してきたのか、保存伝承活動をやってきたのかということをごつくりと触れたいと思います。お手元の資料のところに継承の取り組みということで、①から⑦まで挙げてありますけれど、これが主な大鹿歌舞伎が取り組んできた事例でございまして、まずは昭和 50 年から中学校に歌舞伎クラブというものを立ち上げまして、これも後継者育成の一環という形で、中学生に歌舞伎を教えてまいりました。そして秋の学校祭に歌舞伎を 1 幕、子どもたちだけで上演するというをずっと継続してまいりました。これを立ち上げたのは、この真ん中で指導されております片桐登さんという私の師匠でありますけれど、この立ち上げには大変なドラマがありまして、教育長というか、村の職員が昼間から歌舞伎を教えに行つとるということはけしからんということで、議会から非常に突き上げられたりして、村長からは辞令を書いてくれなんて言われたりして、片桐師匠はもう歌舞伎ができないようでは大鹿村を離れようと思いつめたこともあったそうです。そういう大変な思いをして、中学校の歌舞伎クラブを立ち上げてきております。

おかげさまで、現在、大鹿歌舞伎の役者の中の若者たち、20 代、30 代の若者たち、この歌舞伎クラブの OB たちが村に戻ってまいりまして、一生懸命芸を継承しております。これは見事にその成果が発揮されたということだと思います。

昭和 58 年に大鹿歌舞伎の定期公演が始まりました。前年の昭和 57 年に東京のヤクルトホールで大鹿歌舞伎公演を、当時実践女子大学の先生をされておりました三隅治雄先生にいろいろご尽力いただきまして、ヤクルトホールで公演をしたら大変な好評をいただきまして、こういう芸能はきちんと定期的にやったほうがいいよというアドバイスを方々からいただき、昭和 58 年から春と秋に年 2 回の定期公演が始まりました。大鹿村には舞台が 4 か所残っておりますので、そのうち駐車場等の便宜のよい会場ということで、春は大碩神社の舞台、秋は市場神社の舞台でそれぞれ定期公演を行っております。この定期公演が 1 つの大鹿歌舞伎の伝承の軸になっておるわけでございます。

その後、平成 2 年ですけれど、第 1 回の全国地芝居サミットを大鹿村で開催しております。今年は小豆島で盛大に開催されています。当時文化庁におられました主任文化財調査官の高橋秀雄さんに大変ご尽力いただきまして、大鹿村で第 1 回の地芝居サミットを開催しております。これには全日本郷土芸能協会との共催という形でやったんですけれど、これは本当に第 1 回ということでしたので、こちらは何をやっていいのか全然分からず、とにかく高橋先生が俺に任せろと言って一切やっていただきました。ところが、任せろと言ったんですけれど、ご本人は 1 カ月前までどこか海外に行っていて音信不通になってしまいまして、この準備にあたるのは確か 2 週間ぐらいで準備にあたったような記憶がございます。こういったことを開催しました。

また、三遠南信ふるさと歌舞伎交流大会というものも、開催しております。三遠南信という

のは何かと言いますと、愛知、静岡、長野の境を接するところを三遠南信地域というのですが、この地域は非常に民俗芸能が盛んなところでございまして、地芝居もご多分に漏れずいくつも残っております。この歌舞伎を平成6年からずっと継続をしております、大鹿では平成8年に当番村ということで、この3県をぐるぐる回ってやっているわけなんですけれど、そういった広域的な取り組みもやっております。

続いて平成9年から、地芝居伝習塾というものを始めました。平成8年に国選択を受けますと、いろんな補助事業ができるよということで、今日もご挨拶されました宮田部長さんのほうから細かいことをいろいろ教えていただきまして、3年継続の事業を行いました。これは先ほど言いました地芝居サミットに似たような形で、基調講演やシンポジウムをやったり、あるいはワークショップをやったりといった、外に向けて広く情報発信する内容の事業をやりました。

間を置いて、また平成13年から3年継続で、今度はもうちょっと自分のところの足元を見つめ直してみようということで、今定期公演という形でやっておりますけれど、本来の奉納歌舞伎というのは村のお祭りに合わせてやったわけでありまして、そういった昔の村芝居の形を復活させようという試みをやりました。また昔は歌舞伎は夜にやっておりましたので、地域のお祭りに合わせて夜に歌舞伎をやりました。薪の炎が見えますけれど、そういった試みをやっておりました。

続いてこの地芝居伝習塾の第3期という感じでありますけれど、平成17年から19年度にかけて歌舞伎教室というのを開催しました。この歌舞伎教室が対象にしたのは、中学校歌舞伎のOBと小学生であります。中学校は歌舞伎クラブというのが昭和50年からありましたけれど、平成17年からは小学生にも直接歌舞伎を伝承しようということで、これも補助事業を活用して行っております。

これは当初は小学校で、ふるさと学習の時間、今いろいろ問題になっていきますけれど、ゆとり教育の時間が週に1回ありまして、その時間を使って子どもに歌舞伎を教えてほしいということで、小学校のほうから要望がございまして、教育委員会のほうから保存会のほうへお話をしまして、こういう形で指導してほしいという形で子どもたちに三味線とかあるいは義太夫とかを教えたわけでございます。

お手元の資料にありますけれども、こういう補助事業でやる場合は、保存会からこういう形でやりたいということで、教育委員会のほうに依頼が来まして、また教育委員会から学校に協力を求めて、子どもたちに歌舞伎を一幕やっていただきます。だいたい2学期の後半から3学期にかけて、週1回2時間の授業で稽古をしまして、3月の年度末に発表会を持ちました。これが平成18年から4年間継続して、また今年もやりますのでちょうど5年目に今突入をしているという状況であります。

あまり時間がありませんので、まとめていきたいと思います。小学生に歌舞伎指導を始めてまだ5年目ということでありまして、これからどのようにやっていくかということなんですけれど、一番心配をしているのは児童数の減少ということでありまして、今年生まれた子どもが村の中で今3名ということでありまして、今年は中学生の全生徒が20名、小学生は48名ということで、次第に物理的に子どもがいなくなってしまうのではないかとということを非常に心配しております。またもう1つは、ゆとり教育というのが今文部科学省のほうで見直しをされておるようですけれど、こういう時間が取れなくなるのではないかとことを危惧しております。

いずれにしても、過疎化とか、少子化という、これも社会構造の問題でありますので、これ

は1地域とか、あるいは1自治体で早速解決できるということは非常に困難だというふうに感じております。これはもっと広域的に地域を超えて、対策を考えていかなければいけないのではないかというふうに強く感じております。そういう意味では、三遠南信ふるさと歌舞伎というのはありますけれど、県境を超えて広域で何らかの手を打っていく、あるいはそれが駄目なら、もっと国のほうで何らかの措置をしていくということをやっていないと、これは無形でありますので、形がなくていいんだと言えればそれまでなんですけれど、民俗芸能そのものが消滅してしまうという危機感を持っております。

私どもが小学生まで広げたというのは、かつての大鹿村の非常に歌舞伎が盛んであった子どもからお年寄りまでが歌舞伎に親しんだ、そういう環境に少しでも近づけたらいいのではないかなという思いで、小学生から中学生から、また若者から、一切を取り込んで、村中歌舞伎一色にして伝承していくのが当面できることではないかなと考えております。

非常に雑駁な事例発表になってしまいましたけれど、時間がまいりましたので発表のほうを以上とさせていただきます。ありがとうございました。

司会 ありがとうございます。そうしましたら、今の北村さんのお話に対して何かご質問等がございましたら、1つ2つ受け付けますがいかがでしょうか。はい、どうぞ。初めにお名前とご所属をよろしくお願いいたします。

赤澤明（堺市市長公室国際部） どうもありがとうございました。堺市から来ました赤澤と申します。2つございまして、1つはこの年表の中に平成20年に財団法人を解散されていきますが、その理由といいますか、なぜなのかなというのがちょっと分からなかったので教えていただきたいのと、それから北村さんのように現場でやっておられる行政の方と、それから現場からちょっと離れている部分の財政とか、そういった部分の行政の方と見方がちょっと違うと思うのですが、村としての支援と言いますか、こういう歌舞伎の継承への支援というのはやはり温度差があるものなのかどうなのかというのを、ちょっとお聞かせ願いたいと、その2点でございます。ありがとうございます。

北村 はい。財団法人化したのは昭和61年ということで、当時村の一般会計のほうから2,000万円、あと賛助寄付を募りまして、それを1,500万円、合わせて3,500万円の基金を積み立てまして、その利子で事業をやっているということで法人化をして、大体民俗芸能の財団法人なんていうのは非常に珍しくて立ち上げが大変だったと、片桐師匠がいまだにこぼしております。ところが皆さんがご存じのようにバブルが弾けまして、ゼロ金利の状態がもう何年も続いております。3,500万の金利ですと、とても本来の基金の利子で事業を運営していくということはもう不可能でありまして、そういう状態が何年も続いておりまして、ちょうど昨年はその公益法人の見直しというタイミングがありましたので、この際もう財団ということではなくて任意の団体ということで、純粋に大鹿歌舞伎の保存伝承のために保存会をやっているということで、解散になった次第であります。

またその保存会長は、村長が保存会長でございます。従いまして、大鹿村ではこの大鹿歌舞伎の保存伝承というのが村の命題でございます。そういう職員間のギャップ、温度差というものは無いというふうに私は思っております。

司会 よろしいでしょうか。ほかにあと1件ほどでしたら受け付けられますが。はい。

山下祐樹（熊谷市教育委員会社会教育課） 埼玉県熊谷市の山下といいます。すばらしい発表をありがとうございました。先ほどのお話の中にありました、継承に関して文化財保護担当者がその一角を担うということについてなんですが、例えば議会でも話があったということでございますけれども、北村さん本人としましては、文化財担当、行政としてその一角を担って自ら出ていくということについてどのように考えているかということをお伝えいただきたいと思います。

北村 私のような立場の人間というのは非常に稀なことだと思いますので、逆にこういう立場を利用してというか、活用して、どんどん小学校のほうに行ったり中学校のほうに行ったり、そういうことをやっておりますので、むしろこういう立場を保存伝承に活用していきたいなというふうに考えております。

司会 よろしいですか。はい、ありがとうございました。そうしましたら、北村さんの事例報告はこれで終わりとさせていただきますと思います。どうもありがとうございました。

報告 3

伝統文化こども教室事業の現状と課題について

財団法人伝統文化活性化国民協会事務局次長 松本保之

司会 では午後の部、都合3件目の報告になります。「伝統文化こども教室事業の現状と課題について」ということで、財団法人伝統文化活性化国民協会の事務局次長の松本保之さんにお話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

松本保之（財団法人伝統文化活性化国民協会事務局次長） ただいまご紹介いただきました、財団法人伝統文化活性化国民協会の松本でございます。

最初にこのような意義ある研究協議会に、発表の場を設けさせていただいたことに対してお礼を申し上げます。それと、ここに何人かご出席いただいておりますけれども、私どもの実施しております伝統文化こども教室やふるさと文化再興事業についていろんな面で、日ごろからご協力いただいておりますことについて、この場を借りてお礼を申し上げたいと思います。今後ともよろしくお願い申し上げます。

それでは30分のお時間をいただいておりますので、伝統文化こども教室事業についてその概略をご説明したいと思います。お手元に資料を3種類用意させていただきました。最初は、このグリーンの表紙のパンフレットがございますが、『「伝統文化こども教室」を盛んにしましょう』というパンフレットでございます。これは後ほどまた詳しく説明させていただきます。それから2つ目といたしまして、来週には皆さんのお手元にも届くかと思いますが、毎年こども教室の事例集というものを作成して配布しております。その平成20年度に実施した事例集を来週刊行するわけですが、その中で無形の民俗文化財から2つの事例をピックアップしまして抜き刷りをいたしました。それをお手元にお配りしております。1つは岩手県の花巻市の花巻囃子こども横笛教室の事例。2つ目は山口県の、これはちょっと難しい字でございますが、向峠（むかたお）こども神楽教室。この2つの事例をご紹介させていただくので用意させていただきました。

それから、3つ目の資料といたしまして、こども教室事業は平成15年度から今年で7年目を迎えておりますが、その7年間にどのような分野がどのように推移してきたかという横長の表を用意しております。それをご覧になりますと、どの分野がどのように伸びてきたか一目瞭然で分かると思います。今年度平成21年度では、全国から5,300件の申請がございました。選考委員会で選考していただき、5,232件を採択して、現在、全国で展開いただいているところでございます。ご覧になると分かりますが、一番多いのはお花でございます。1,000件ぐらいになっております。しかし獅子舞やお囃子、その他の民俗芸能につきましても順調に伸びてきております。大変喜ばしいことだと私どもは思っております。

それでは、最初にパンフレットのほうに戻ります。ご案内のとおり、私どもの財団法人伝統

文化活性化国民協会は、平成13年に、日本伝統文化活性化議員連盟が114名の議員を中心に発足いたしまして、議連の発意のもとに、伝統文化活性化事業は財団をつくって行うということが決議されまして、財団法人が平成13年の7月にできたわけでございます。13年からふるさと文化再興事業を実施してきたわけでございますが、平成15年度には伝統文化こども教室ができたわけでございます。

一番左側に、私どもの会長・理事長であります平山先生のメッセージが載っておりますが、この真ん中へんのところにこの事業を設けた趣旨が書いてあるわけでございます。ちょっと読ませていただきますと、「我が国では、それぞれの地域で、さまざまな特色ある伝統文化が受け継がれてきました。これらの伝統文化を次の世代に伝え、残していくには、こどものうちに触れさせ、理解させ、身につけさせていくことが、肝要であると考えます」。これは、ここにご出席の皆さんもご賛同いただけると思います。次に「しかし、社会や生活様式の変化でこのような機会が次第に少なくなってきました。日本の伝統文化をこども達に継承し活性化させていくことは、日本人としてのアイデンティティーを育てる重要なことです」ということがメッセージに述べられております。こういう背景を受けて、伝統文化こども教室事業というのが始まったわけでございます。

これは申すまでもなく、文化庁が予算措置をして私どものほうで委託を受けている事業でございますが、予算規模は平成15年のときは10億円でございました。それが21年度、今年度は20億をちょっと超えておりますので、7年間で約2倍の予算になった訳で、関係者のご支援も得ながら順調に数も拡大し、予算も拡充してきたという背景がございます。

そこに見開きでいろいろな写真が載っていますが、およそ日本の伝統文化と考えられるものについて対象になってございます。先ほど、歌舞伎の事例をご報告いただきましたが、歌舞伎も何件かこのこども教室事業でやっていただいております。

それで、『『伝統文化こども教室』とは』ということで、右端にその対象となる教室の内容が書いてございます。まず参加者の範囲といたしまして、原則として小・中学生でございます。それから開催場所といたしましては、原則として教室の行う目的・内容にふさわしい文化施設、学校、体育館等の公共施設ということでございまして、地方にまいますと公民館というのが結構多くございまして、学校も多くて、あるいは児童福祉センターでありますとか、あるいは文化センターでありますとか、そういう公共施設を使ってやっていらっしゃる場合が非常に多いわけでございます。

それから実施期間でございますが、以前は6月から3月までということでやっていたのですが、3月が終わってから最終的な決算処理が大変混雑するものですから、20年度から、20年の5月から21年の2月までということで5月から2月ということに1カ月早めたということでございます。期間といたしましては、土曜日、日曜日とか、夏休みなどを有効に使ってやっていただいております。また、これは学校の行事としてやるのは入っておりません。従って、クラブ活動とか部活動とかというものとは切り離しております、学校行事に関するものについてはこの対象ではないということにしております。

参加人数については、これも原則としてこどもを10人以上集めてください。それから、この期間に10回以上実施していただきたいというのが基本原則になっております。ただし、山間僻地でありますとか、そういうところではこどもを10人集めるというのはなかなか容易なことではございませんで、そのへんは申請の状況に応じまして柔軟に対応しているところでございます。

そういう基本的な内容を踏まえて、それではどういう経費が対象になるのかということですが、まず、こどもたちに教えてもらう講師に対する謝金ですね。それから教室なんかの借料、教材用具の借用でありますとか、あるいは講師の旅費でありますとか、それから消耗品であるとか、そういうふうなものが対象になっております。だからおよそ必要とされるものはほぼ対象になっておるわけですが、非常に特色があるのは、最近こういう世の中でございますので、こどもがケガをしたとか、あるいは事故を起こしたりすることがあってはなりませんので、大切なお子さんをお預かりするわけですから、保険料というものが対象になっております。私どもといたしましては、実施する団体に必ず保険はかけてくださいと、ただし、公民館等でやる場合に、公民館自体が公民館でやるあらゆる事業について保険がかけられているという場合がございまして、そういう場合はよろしいですけれども、実施団体がおやりになる場合は、必ず保険をかけてください、その保険料は経費の対象としますと、こういうことでございます。

申請のときには、最大 90 万まで申請していいということにしております。実際 90 万と書いて出される団体もございまして、先ほどご紹介しましたように、全国で 5,300 件も出てまいりますと、なかなかそういうわけにもまいりませんで、選考委員会で選考いたしました、21 年度の例で見ますと、36 万から 37 万ぐらいが平均的な支援額と、こういうことになってございます。従いまして、申請のときに例えば 7~80 万で出されていたものが、採択のときにはその半分あるいは 6 割ぐらいになるというケースはいっぱいあるのですが、そのときはもう一度計画を見直していただいて、それに相応しい内容に縮小していただいて、事業予算費を提出していただくということにしております。これがこども教室の概略でございます。

それで、私どもの 7 年間の経緯を見てみますと、やはり一番大変なのは、どこでもそうなんですけれども、先ほどの 2 つの事例にもありましたように、こどもの数が全国的に大変少なくなってきたております。それで少子高齢化ということ踏まえて、こどもに対する施策をいろんな省庁が立ち上げてやっているわけです。それで、ありていに言えばこどもの奪い合いというようなことになるわけですが、こどもの確保というのが一番大変だという話をよく団体の方からお聞きます。一応原則 10 人でございまして、東京あたりで言えば 10 人のこどもは簡単なようですが、必ずしもそうではない。最近のこどもは塾だお稽古だといって結構忙しいものですから、なかなか 10 人集めるのは容易ではないという声をよく聞きますが、それでも 5,000 件ぐらいの団体の方がやっていたいているわけですから、それなりの努力をされているというふうに考えております。

次に何が大変かと言いますと、学校との関係ですね。この教室をやるためにはこどもを集めなければなりませんので、ポスターやチラシをつくって学校に協力をお願いに行かれるのですが、対応する学校の校長先生の考え方に濃淡がありまして、非常に協力的である場合と、ない場合がある。ない場合は非常に困ると、そういうふうなときにどうするかというようなことを研究協議会なんかでよく話題になるわけでありまして。クチコミでやるとか、市内の広報紙に載せて募集するとか、いろいろな方法で努力されているのですが、学校との関係で非常に苦労するというふうにおっしゃっています。

そのほか、対象はこどもでございまして、例えばお花の学校なんかで言いますと、10 人なら 10 人予定して、お花を 10 人分予定していたところが、こどもがその日になって 2、3 人休んでしまったりとか、風邪引いたり何かしてやむを得ないこともあると思うのですが、そういうときに余ったお花をどうするのかとか、いろいろ細かいことがあるのでございますが、そうい

うこととか、あるいは、学校と同じように地方公共団体が非常に協力的で、教育委員会が積極的に協力してもらうというふうな市町村もあったり、あるいは全くノータッチであったりします。そのへんも大変苦労されるということを承っております。

あとはこのこども教室を実際に教える先生方というのは、3人から5人、あるいは多いところ10人ぐらいでやっていらっしゃるのですが、その人たちの力量といいますか、こどもたちに教える力量というものが千差万別であって、そういうことにこどもを預けた保護者のほうから不満が出るとかいうようなこともあるわけでございます。いろいろ課題を抱えてはおりますけれども、お手元にお配りしております岩手県や山口県のこういう教室の事例を見ますと、比較的成功と言いますか、大変良かったというふうな、いろんな成果があったということが書いてございます。去年の事例集から、できるだけこの事例には趣旨や内容や運営や成果、課題というようにものを書いていただいておりますけれども、できるだけ実際に教室に出たこどもたちの声、感想、あるいは指導者の感想でありますとか、保護者の感想でありますとか、そういうものを書いていただくようにしております。

花巻市の「花巻囃子こども横笛教室」なんかをちょっとご覧いただきますと、こどもたちの感想文を読み上げますと、最初は難しかったけれども、だんだん吹けるようになったとかですね、友達ができたとか、やはり練習することによってそういうことができるようになったとかというように書いてあります。指導者や保護者の声を聞いてみますと、こどもたちのマナーがよくなったとか、礼儀作法ができるようになったとか、いろんなことが書いてあります。

山口県の「向峠こども神楽教室」を見ましても、同じように、神楽はこども向きには大変難しい分野でございましてけれども、例えば須佐之男命を舞うのだから大変難しかったけれど舞うことができてよかったとか、保護者の声では家庭では見られないような真剣な姿勢で取り組んで、この1年間で素晴らしい成果を挙げたとか、指導者の声も地域で真剣に取り組んで神楽の後継者が少し芽生えつつあるとか、いろんなことが成果として挙がっております。

ただ、ご案内のとおり、国の事業も地方の事業もそうですが、7年もやりますと、評価というのが問われておりまして、来年度以降どうするかということにつきましては、ご出席の皆さんもご承知のとおり、この間の事業仕分けのワーキンググループの中で、伝統文化こども教室事業は、国の事業としては行わないという方向が示されました。ということは、地方公共団体かあるいは民間団体でやればいいではないかということのようですけれども、果たしてそれでいいのかということで、今、文部科学省では文部副大臣と政務官がメールアドレスを公開して、そこに国民一般から広く意見を求めるということで、今募集されておりますので、ここにご出席の皆さんも賛否両論、どちらでもいいですから、積極的にこのこども教室事業についてご意見を述べていただければと思います。私どものほうからは、その賛成の立場で述べてくれとは言えませんが、賛否両論どちらでも自由な立場で述べていただきたいと思います。

ただ、いろいろありますけれども、評価の問題は、こども教室のような、こういう伝統文化に取り組んだこども教室がどういう成果があったのかということを示す数字で示せと言われても、なかなか難しいところがございます。あとで総合討議の場で、何かいいお知恵がありましたらぜひ教えていただきたいのですが、学校教育みたいにテストをして点数で表わすことができれば大変楽なのですが、こういうのは大変難しいと思っております。先ほど歌舞伎の伝承の話が出ましたが、ああいうものも点数で表わす、数値化することはできるとは私はとても思えないのですが、そういうものではないというのが文化であり、伝統文化ではないかというふうに思っております。

それから一番大事なことは、こどもたちが興味と関心を持続させながら最後までついてきてくれるということであり、なおかつ、その安心・安全ということを確認しながら、ということをおどもは強くお願いしているところでございます。この教室をやると同時に、私どもは先ほども申しました事例集というものも出しておりますし、それからこども教室を実際やっていらっしゃる方に集まっていただきまして、そこでの運営上の難しさとかあるいは問題点でありますとか、というようなことについて幅広く議論していただく研究協議会を開催し、その成果を全市町村の教育委員会にもお配りし、参考にしていただいているところでございます。

こども教室の事業につきまして、パンフレットをもう一度見開きで中を開けていただきますと、開催の事例があります。こういうことをやっておりますし、Q&Aにもどういう内容のものならいいのかというような経費や支払いの方法とかが書いてあります。経費の支払いにつきましては一番大事なことでございますのでちょっと触れさせていただきますと、経費は50万ということで採択されますと、50万のうち、執行した額を、団体のほうで立て替え払いをしていただきます。そして、領収書のコピーを取って、毎月10日までに協会に請求していただきますと、その翌月の月末までにその分をお支払いするということでございまして、団体に短い期間ではありますけれども、立て替え払いをしていただくというのが1つの大きな特徴でございまして、それが何とかならないかということがよく言われるのと、それからこれは国の事業の執行でございまして、申すまでもなく大変こと細かく手続きがいろいろ煩雑といいますか、細かく規定しておりますので、これをもっと簡単にならないのかというようなことをよく言われるのですが、これは国の経費でございまして、現状は簡単には変えられないということです。ただ、事務手続きの流れからいうと、できるだけ簡素化するものについては簡素化したというふうに努力しております。

平成15年から21年度までの累計で申し上げますと、実施した団体が約2万3,600になります。1団体当たり10人を原則として集めてやってもらうことになっておりますので、おおよその数で申しますと、23万6千人ばかりのこどもたちが何らかの伝統文化に親しみ、あるいは体験していただいたということになっております。できれば今後ともこういう事業が何らかの形で残って、こどもたちが伝統文化に触れる機会が増えるといいなと思って、私どもは努力していきたいと思っております。

非常に簡単でございしますが、これで私の説明を終わらせていただきます。ありがとうございました。

司会 ありがとうございました、松本さん。少し時間がありますので、今の松本さんのご発表、もしくはこの事業そのものですね。伝統文化こども教室について何かご質問やご意見等がございましたら、どうぞ挙手をお願いします。どうぞ。

板垣時夫（白岡町教育委員会生涯学習課） 埼玉県の白岡町と申します。この事業で私どもの町でもいくつか予算をいただいて、大変効果が上がっていると思います。新たなお囃子教室が町内でいくつもできてきております。問題はですね、先ほどのお話の事業仕分けの関係で来年度以降の予算がだいぶ厳しいようなお話なんですけど、地域の中でこの事業を使って新たにまたお囃子の保存会が今できています。地方から言わせると、この事業は非常に効果があるし、地方自治体の予算の限られた中で、これは10割団体のほうに行くわけなんですけれども、非常に効果がある事業だと思いますので、ぜひ存続拡大の方向でお願いしたいと思っております。以上で

す。

松本 ありがとうございます。勇気あるお言葉をいただきまして、それを受けまして私ども努力したいと思っております。先ほど申し上げましたように、この事業は今おっしゃったように10割補助といいますか、都道府県や市町村の裏負担というのは必要なくて、私どものほうが全部出しているわけですので、ぜひ、先ほど申しましたように、文部科学省のメールにご意見をお寄せいただいて、地方の声を述べていただきたい。賛成でも反対でもどちらでもいいですけど、ぜひお願いしたいと思います。

司会 ほかにございますでしょうか。どうぞ。

入江清次 (新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課) 新潟市の入江と申します。私どももちょっと今正確な件数は覚えていないのですが、20、30件お世話になっているかと思います。非常に助かっています。時々、ちょっと疑問だなと思うような団体も全国的にもあるかと思うのですが、例えば、剣道教室の団体などというのがございますが、そういうところで申請してかなりの人数がいるので、高額の申請ということで、ある程度の額の採択を受けているわけなんですけれども、剣道教室などというものは、例えば市内にもかなりの教室があるということで、そうなってくるとこちらの団体の教室だけが、何というかですかね、こういう援助をいただいているということで、そういう情報を聞いた他団体がちょっとケンカというわけではないんですけど、ちょっと問題になることがあるんですけれども、そのような点についていかがお考えか、ちょっと漠然としているのですが、お考えをお伺いしたいと思います。

松本 ありがとうございます。ご質問がありましたのは、分野で言いますと武道の中に入るんですね。武道は今おっしゃったように剣道、柔道、相撲、古式泳法というようにいろんな要素が入っていろんなところでやっていただいているわけです。鹿児島県の示現流ですとかいろいろございます。今おっしゃったように、町の中に道場みたいなものがあるって、ある団体がこの事業に採択されてお金が出ている、ある団体は出ていないというようなことだと思うんですね。不公平ではないかと。それは申請していただければ、公平に審査して、金額の大小にかかわらず対象になると思いますので、大いに申請していただければと思います。

ただ、剣道や柔道というのは、こどもたちが多いと、例えば上限があるものですから、例えば30万なら30万、40万なら40万という金額で採択された場合に、おのずからその教室の内容、あるいは対象となる経費というものが限定されてくるのはやむを得ないということでございますね。その場合でもやはりこどもたちの安全・安心といいますか、保険とか、そういうものは重点的にやらせなければいけないのではないかと思いますけれども。よろしいでしょうか。

入江 ありがとうございます。基本的には大いに応募してよいという考えでよろしいでしょうか。

松本 はい結構でございます。剣道に限らず、柔道、相撲、その他いろいろ申請してください。

入江 はい、ありがとうございます。

司会 ほかによろしいでしょうか。先に後ろの方。はい。

懸田弘訓（福島県文化財保護審議会委員） 福島県の懸田と申します。うちの県でも補助を頂戴いたしまして、大変ありがとうございました。今、お話がございましたように、後継者の養成のためにこれは大変有意義であることはもちろん、大変でございますけれども、それに加えて子どもたちのしつけ、教育の場にもなっているのです。実際、私もつぶさに拝見しましたけれども、この教室に行きますと、指導者が、ちゃんと挨拶をなさいよと、靴は揃えて脱ぎなさいよと、終わったらお礼を言いなさいよときちんと教えてくれるんですね。それから小さい子どもの場合には保護者も一緒にまいります。そうすると、家で親子が断絶しておりまして、この場で親子が一緒にやれるのです。保護者からも、うちに帰って子どもと話題ができまして、食事が非常に楽しくなりましたという話を伺っております。ですから、ちょっと極論ですけども、単に芸能を伝承するでなくて、芸能を教えるということは家族の連帯感を強めたり、村づくりですね、さらには青少年教育の大きな場ではないかと思うのです。ですから単なる芸能の継承だけでなく、いわゆる町づくり、村づくりの大きな場になっているということをもう1回考えていただければ、間違っても国のほうで予算を削るなんてことをおっしゃらないと思うのでございますけれども、その点もぜひ強調していただきまして。大げさに言いますと、国づくりの基本だと私は思っております。よろしくどうかお願いしたいと思います。

松本 ありがとうございます。大変心強いお言葉をいただきました。今懸田先生のおっしゃったことは研究協議会なんかでもよく聞くのでございますが、先ほど示しました分野別の中に着物の着装礼法というのがございます。いわゆる着付けですね。こどもたちに浴衣の着付けをするわけでございますが、今のこどもを連れてくる母親というのは、むしろ着付けを知らないということが圧倒的に多い。大変お母様方は喜んでおられる。で、お母さん方が一緒になって着付けをやるというケースがいっぱいございます。大変心強いお言葉をいただき、ありがとうございます。

司会 最後にもうひと方だけ。今、挙手をされた方がいたので、その方で終わりにします。

原島知子（鳥取県教育委員会事務局文化財課） 鳥取県の原島と申します。県のほうも年間三十数団体だったと思いますが、お世話になっておりましてありがとうございます。たしか伝統文化こども教室さんでは、無形の民俗文化財以外のものは5年の年限でいったん切って、また再申請という形をとっておられたと思うのですけれども、県でも同様な後継者育成の補助金を持っているのですが、こうした後継者を育成する、子どもたちに教えていくという事業を、もちろん永久に続けていければいいのですけれども、なかなか今回の仕分け事業の1つにいつまで続けるのかというような観点もおそらくあったのではないかと思います。いいこととは分かっている、ずっと出していけるのかとかですね、そういった議論とかがこども教室の運営のほうでももしありましたら、参考までに教えていただければと思います。

松本 今おっしゃった5年で取りあえず切るとい、切るといいますか申請できないというこ

とにつきましては、おっしゃった通り、地域の特色ある文化は除いて5年たった団体はご遠慮願うということに去年からなったんですけど、この背景は、この予算を査定する財務省のほうで、この事業はいわゆるモデル事業なので、一応5年なら5年、10年なら10年でもう終わりだというふうに考えておられるようでして、だから永久にできるわけはもちろんないわけですけども、5年間やれば一応成果があがったと考えるべきではないかということのようです。ただし5年と言いましても、こどもたちは毎年毎年変わるわけですので、あんまり意味はないんじゃないかと私は思うのですが、それには文化庁ともよく協議しながら取り組んでまいりたいと思っております。それより何よりも、来年度こども教室がなくなるかどうかという大きな課題を抱えておりますので、ひとつよろしくお願いしたいと思います。

司会 はい、ありがとうございます。ちょっと時間が来ましたので、これで松本さんの話は終わりとさせていただきます。どうもありがとうございました。

報告 4

直根小学校における民俗芸能への取り組み

由利本荘市立直根小学校長 金 利紀

司会 続きまして、そうしましたら都合4件目の事例報告となります。由利本荘市の直根（ひたね）小学校長の金（こん）利紀先生から「直根小学校における民俗芸能への取り組み」ということで、学校での民俗芸能の体験学習、そして伝承の取り組みということでお話をいただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

金利紀（由利本荘市立直根小学校長） よろしくお願ひします。秋田県からまいりました直根小学校の金と申します。今日、東京も大変寒くて、私が秋田から寒さを持ってきてしまったかなと責任を感じておりましたが、今日のコメンテーターを見ると、伊野先生も新潟県からですし、橋本先生も岩手県からですので、私だけの責任ではないなと思ってちょっと安心しているところです。

今、俵木さんからお話があったように、学校関係では唯一の発表ですので、力が入るところでありますけれども、直根小学校の紹介からさせていただきます。今日はプレゼンで進めますので、何とか前のほうを見ていただきたいと思いますが、映っているのは鳥海山です。秋田県の南側にあります鳥海山、出羽の富士と地元では言っていますが、鳥海山の麓、この写真は直根小学校の学区の中から撮られた写真です。そこの中の直根小学校という学校ですが、なかなか「ひたね」と読めないと思います。うちの学校のテーマと言いましょか、スローガンと言いましょか、「山の学校」「そばの学校」「地域の学校」ということで進めております。山の学校というのは、先ほども言いましたように鳥海山の麓にありますので「山の学校」。それから全校児童でそば（蕎麦）の栽培を行っております。そばの栽培を行って、自分たちでそば打ち体験をやって、そしてそれを食べるということで、「そばの学校」ということで今有名であります。そして「地域の学校」ということで、このあと何回か「地域の学校」という言葉が出てきますが、よく学校関係では「地域とともに」というような言葉をよく耳にしますが、私は「地域とともに」というのは、地域と学校が別ものだというニュアンスがあるかなと思ってしますので、私は「地域とともに」よりももっと強い関係づくりをしたいということで、「地域の学校」なんだということを学校から地域の皆さんに発信しております。

本校の学校教育目標は、「ふるさとを愛し、楽しく学び合い、高まり合う山の子を育む」です。赤字にしてあるところが私は自分でもいいなと思っているところなんです、「ふるさと」、ふるさと鳥海、ふるさと直根なんです、そこをこよなく愛する子どもを育てたいということ。そして、「山の子」なんだということを自慢できる子ども、そしてもう1つ、「育む」ということは、今日こうしなさいよと言ったから明日変わるというようなものではなくて、目に見えないものなんだけれども、そういう教育風土というのでしょうか、地域の子どもの育てる風土で

子どもを育ててもらいたい。ということで、この赤い字の3つが私は気に入っているところなのであります。

学校経営の基本姿勢というのは、私は直根小学校に勤務するようになって4年目ですが、1年目からテーマをもって進めております。1年目は「おらほの学校」づくりということ、2年目には「オンリーワンの学校」をつくろう、3年目には「直根ワールド」ってどういうのだろうと追求しました。そして今年度は「絆（きずな）」というテーマをもって進めております。

実はうちの学校は残り3年で廃校になるわけです。廃校になって、その後統合されるということなのですが、残り3年で私はこの絆をテーマに、地域との絆、いろんな自然との絆、文化との絆、人との絆というものを子どもたちに学ばせたいと思っております。これを4つ見ていただくと分かると思いますが、私の基本姿勢の中には、「地域の学校」というテーマがずっと根強く続いてきているところであります。

やっとな今日の発表に入るわけですが、ご覧いただいているように、大きい柱が3つあります。1つは今なぜ学校で民俗芸能なのか。それから2つ目には、本校の実践です。そして3つ目には、学校教育の果たせる役割とは何だろうかといった、この大きい3つで発表を進めていきたいと思えます。本校の実践はさらにこのクラブ活動の取り組み、「新そば」まつりの取り組み、都市等体験事業の取り組みということで、3つほどあります。

それでは、1つ目の今なぜ学校で民俗芸能なのか、ということなんですが、これは資料のほうにも書かせてもらっていますが、地域と学校、あるいは地域と子どもの関係というのが最近とみに薄れてきている。もっと極端に言うと、分断されている。もっとひどく言うと、隔離されている。もしかすると、学校とか子どもは隔離されているんじゃないかと思ってしまうほど、地域との関わりがうすくなっていると思えます。

さらにもう1つは行政改革の点からなんですが、うちの学校も市町村合併などがあって、ほとんど行政改革が進められております。縦割り行政というのは変わらないのですが、その中で人員が削減されるときに、公民館主事の方々から削減されていっているように思います。私の住んでいるところの市でも、公民館主事が3人おったのが、今年2人減らされて、1人ということです。人数的にもこういう民俗芸能というか、そういうところを担当する公民館主事が不足になるというのは大変なことなんでないかなと、学校教育の立場でも考えております。

ですがそういう中の流れの中で、1つ、教育界の動向というのがありまして、それがプレゼンに書いてありますが、1つは2006年に行われた教育基本法の全面改定。これには「伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに」という文言が入ってまいりました。その後には、2008年に中央教育審議会答申、これにも「教育内容に関する主な改善事項」(3)として、「伝統や文化に関する教育の充実」とうたわれております。そして3つ目には、文部科学大臣、これは2009年2月ですので塩谷文部科学大臣のころなんですが、「心を育むための5つの提案」ということで、「先人の生き方や本物の文化・芸術から学ぶ」という目標が掲げられるようになりました。これで学校教育の中でもこういう伝統文化というか、民俗文化と言いましょるか、郷土芸能というものを重視する学校が今少しずつ増えてきているのではないかなと思われま。

2つ目の柱の「本校の実践」ですが、1つ目にはクラブ活動の取り組みということで、これは小学校にも中学校にもクラブ活動の時間というものがあります。私はそのクラブ活動の中に直根の郷土芸能を学ぶというものをテーマに位置づけました。獅子舞、それから前ノ沢太鼓、そして猿倉人形芝居、これは3つとも直根に伝わる郷土芸能、民俗芸能なわけです。これをク

クラブ活動に取り入れようと。おそらく、普通の学校ですと、クラブ活動は自主的な子どもの教育活動ですので、子どもがこういうのをやりたい、例えばスポーツクラブとかゲームクラブとか、あるいは手品クラブとか読書クラブとか、そういうのがオーソドックスなんですけど、うちの学校は私自らぜひクラブ活動に郷土芸能を取り入れようということに進めております。

2つ目には、そのクラブ活動の指導者は地域の指導者であるということ。そしてもう1つは、理屈でなくて、理論でなくて、体験させるのだということです。いろんな理論的な学習をさておいて、まずは体験してその面白さに気づいてもらおうと。体験してもらおうということです。

それから3つ目には、このクラブ活動というのは、学習指導要領では4年生以上となっているんですが、その特例の1つとして、小規模校であれば3年生から行う、実施するのも可能であるということが記載されております。それを受けて、うちの学校は全校児童が36人しかおりませんので、4年生以上だったものを今年度から3年生以上と、できれば全校でやりたいものだなというもっているのですが、3年生以上から実施しております。

1つには番楽、これは地域に伝わる伝統文化なのですが、それとクラブでやっている子ども獅子舞クラブというものを紹介したいと思います。これが獅子舞、番楽、祓い獅子、これは大人がやられているものなのですが、あるいはこのような祓い獅子、こういうものをクラブ活動に取り入れて、子どもたちはこのように体験学習をしております。真ん中にいる方が地域の指導者です。左下に女の方がいますが、この方が公民館の方です。学校のクラブ活動に積極的に来ていただいております。これが太鼓打ちの練習の様子ということで、クラブ発表をする場というのを毎年2月に設けてあります。2月には発表会をやるんだから、それに向けてそれぞれのクラブでいっぱい練習したものをきちんと出せるように、形として残そうということです。見ていただくと、ハッピーを着て太鼓を叩いておりますが、これが獅子舞を踊っている様子です。

先に書いたように、大人の場合、番楽あるいは獅子舞と呼んでいますが、直根小学校が子どもたちに指導する場合は子ども獅子舞クラブと、「子ども」というものを付けております。もうちょっと後にも、また「子ども」というのが付くクラブ名が出てくるのですが、どうして「子ども」を付けたかというのは後でちょっと説明したいと思います。

もう1つは、前ノ沢太鼓クラブ。太鼓も郷土芸能と言いましょうか、歴史は浅いんですが、ずっとやられております。それを子どものクラブ活動に取り入れました。これが大人の部分の太鼓のところなんですけど、これを受けて、子どもたちは神社の境内で練習をしております。と言いますのは、太鼓というのはやはり神のものということで、神社の境内の中にある会館にしまわれてありますので、それを毎回学校に持ち運びはちょっとできないということで、子どもたちが神社に出向いて、そこでクラブ活動を行っている。右側に青年がいますが、この方が太鼓クラブの指導者です。あるいは、この右側の子どもが着ているは野球のユニフォームなのですが、この後学校に戻ってきて野球の練習をやるということで、ユニフォームの形で参加している子どももいます。

これがクラブ発表の様子なのですが、このときには子どもだけでなく、地域の皆さんにも声をかけてたくさんの方が見に来ていております。この写真を見て分かるように、手前の頭がありますね。この頭の方々はおじいさんであったりおばあさんであったりということで、結構たくさんの方がこれを楽しみにして学校に来てくれるというところなんです。

3つ目には、猿倉人形芝居。これは直根の小学校の学区の中に猿倉地区というのがあるのですが、そこで生まれた人形芝居なのです。これを子どもたちで受け継ごうということで、クラブ活動に取り入れております。これは大人がやっている猿倉人形芝居なのですが、何と実はこ

の後継者が地元にはいなくなりまして、後継者不足で、県内、秋田県の中でも3人しかいない。地元にはそれを受け継ぐ大人がいなくなったということで、学校では復活させるのは難しいだろうという話があったんですが、何とかして猿倉人形芝居、直根に発祥した民俗文化をもう1回掘り起したいということで、これを子どもたちの前で見せて、これを自分たちで学ぶんだよということで、クラブ活動に取り入れました。

これがクラブの様子なのですが、創始者である池田与八さんのお墓に行くところから出発して、どうしてもお墓を見ると子どもたちは撫でたがるのですね。撫でて、字がきれいになるのか、頭が良くなるのかは分かりませんが、こういったものを見ると撫でたくなるのが人間の性なのかなと思います。それで学校では自作の人形づくりを行って、こうやって立ち稽古をします。その練習の成果が、先ほども言いましたが、何回か出てきますクラブ発表の時間であります。こうやって黒子になって、手には自分たちがつくった人形があります。人形そのものというのは、ちょっと今時間がないので詳しく説明できませんが、ちょっと普通とは若干違って、頭がスポッと取れるのです。それから手もスポッと抜けるんです。頭をここに挟んで、ということは、簡単にポンッとやると頭が抜けて、次の人形をかぶせることができるということで、早変わりができるという人形芝居なのですが、しかも両手でやります。そういったものをこの猿倉人形芝居クラブでやっているんですが、これが舞台裏のほうです。専門家に言わせると、舞台裏は見せるものではないということなのですが、まず教育的なところからということで、裏のほうも撮影したところでした。

「子ども」というのがついているクラブとつかないクラブがあるのですが、太鼓の場合は「子ども」がつきません。それは、前ノ沢太鼓というものをそのまま子どもたちが学ぼうということなんです。ただ、「子ども」がついている「子ども獅子舞」、それから「子ども猿倉人形芝居」というのは、本物ではないんです。獅子舞、番楽というの、地域にたくさん講中といますか、受け継ぐ団体がありまして、この団体のだけ受け継ぐとなると、よその団体からクレームがつきかねない。ですので、あえて学校教育で獅子舞を受け継ごうとなると、新しいものをつくらなければいけない。それからもう1つは、猿倉人形芝居も、さっきも言いましたように、後継者がいないものですから、地元ではやれる人がいないのです。で、それを学校で新しくもう1回つくろうとなったときに、これが猿倉人形芝居だとやったときに、いろんな専門家、歴史家の方から、それは本来の猿倉人形芝居ではないとクレームがつきかねない。そこで、苦肉の策と言いましょ、か、「子ども」をつけるだけで、本物でなくてもいいんだと。逃げ道なのですが、そういったもので、そのまんま受け継ぐものでない場合は「子ども何とか」と付けております。そのまま受ける場合は、そのままの名前で、「前ノ沢太鼓」という形で受け継いでいるのですが、そういった違いがあるということでした。

それから、「新そばまつり」ということで、うちの学校ではそばを栽培して、それを自分たちで打って、それを自分たちで食べるというお祭りがあるんですが、この中で郷土芸能、民俗芸能を大切にしているところがありますので、これも紹介したいと思います。

実はこの「新そばまつり」、先週の日曜日、この間11月15日に行ったばかりです。午前には学習発表、それからそば打ちというのをやりました。そして午後から、下直根番楽の観賞ということで、大人の獅子舞を舞ってもらいました。それから鳥舞という番楽もやっていただきました。それからもう1つには、三番叟という演目があるのですが、これは本校児童の6年生佐藤駿君が地域で頑張っていますので、その子が披露したということです。

そのときの様子がこれですが、これが鳥舞の様子です。もう1つ、これは獅子舞の様子です。

子どもが演じた三番叟というのがこんな感じで、黒いお面をしてこうやって踊るわけなんです。これは6年生ですので、小学校を卒業すると、その先その地域で頑張るかどうかというのはまだ決まっていないところなんです。で、ぜひ私はこの佐藤駿君のあとを継いで、誰か小学生でその民俗芸能、郷土芸能を受け継ぐ子がいてほしいなということで、全校児童にも訴えたところでした。

さらに3つ目には、今年度初めて実施したんですが、「都市等体験事業」というのがあります。秋田県独自でやっています。文部科学省、総務省、農林水産省のほうで農山漁村交流プロジェクトというのがありますが、それと似ているんですが、ちょっとまた違った部分があります。秋田発で、田舎の子を都市に行かせていろんな体験をさせようということなのです。テーマを持って学習してこなければいけないのですが、本校のテーマは「和文化・ふるさと・西小菅」というテーマを掲げております。

時間ありませんので「ふるさと・西小菅」のところは説明はしませんが、「和文化」というところは、地域の伝統文化を大切にしている直根小学校ですので、東京に来たときに、ぜひ日本の伝統文化、相撲を見せたいと思いました。そして、落語を体験させたい。それから浅草浅草寺ということで、和文化を学ばせようというふうに考えておりました。で、2つ目の「ふるさと」というところでは、相撲の中でもぜひ秋田出身の豪風のいる尾車部屋に行こうと。それからふるさと出身のふるさと直根会の人たちに会いましょうと。3つ目の「西小菅」というのは、今日来ていただいている方に葛飾区の方がおりましたが、葛飾区の西小菅小学校と直根小学校が交流しておりますので、その関係で秋には西小菅小学校の皆さんが直根小学校に来ていただきました。冬1月の6、7、8日なんです。そのときには直根小学校の3年生以上の子どもが葛飾区の西小菅に行って交流をするということを予定しております。

ぜひこの会場に来ておられる方で、もっとこういう和文化、日本の文化を学べるんでないの、というようなのがあったら私に教えていただければありがたいなと思いますが、例えば歌舞伎、あるいは茶道とか雅楽とか、いろんなことが考えられるかと思いますが、小学校3年生以上で体験学習ができて、そういう日本文化を学べるようなところがないものかどうか、ちょっと今探っているところですので、よろしくお願ひしたいなと思います。

3つ目の柱、最後になりますが、学校教育がやれることって何だろうということで、これまでやってきた成果ということになるわけですが、学校教育でできること、1つには子どもが地域に関心を持つようになる。もう1つは、地域の行事に出るようになる。実はこれは逆に地域の方が子どもを知るようになって、ぜひ子どもを地域の行事に出してもらえないか、という要請が学校に来るようになりました。そして、地域の大人を知るようになる。そして、子どもたちが自信を持って地域を自慢に思えるようになる。何よりも私がうれしいのは、地域が元気になること。これは具体的に言いますと、地域の人は何回も学校に訪れるということです。特に下直根地区の場合はお年寄りが多いですので、おじいちゃんおばあちゃんはどうしても家の中にずっといたり、なかなか外に出る機会がないということで、私は学校に無理にでも呼んでおります。するときれいに化粧して着飾って来るわけなんです。いやあ何か若返った、と言って帰ってもらうのが大変うれしいというふうに感じております。

ただ、課題もありまして、これから考えていかなければならないことということで、市町村合併などに伴ってどんどん地域性と言いましょか、地域の特色が薄れていく。さらには、これが一番問題なのですが、地域内のつながりが薄れるということが考えられます。そして3つ目には、民俗芸能の保存、文化保存というのは地域の活力とか地域の協力が絶対必要です。こ

れがなくなってからでは新しいものをもう 1 回つくろうというのは到底できませんので、まだ地域に少しでも元気があるうちに、地域の伝統文化をちょっとでも知っている人がいるうちでないと、これは継承という言葉もままなりませんし、保存ということもできませんので、まだ少しでもこの元気なうちにというところがあります。それから、前の松本先生のお話のところにもありましたが、校長の考え方 1 つだと思いますので、学校経営に校長がどう位置付けるかといったところが大きな問題になるのではないかなと思われまます。

「提言として」と、ちょっと大それたことを書きましたが、今、学校は公民館と連携して、地域文化保存のステーションとならなければならないのではないかなと思っています。第 2 回のときにも、その学校で民俗芸能という話はあったようなのですが、そのころと今とではまた時代が違います。何年かたつということは、これは恐ろしいことだと思うのですが、その第 2 回のときには、学校教育で民俗芸能というのは華やかなりし頃だったと思いますが、今は逆に、学校でもちょっと難しい時代です。だけれども、唯一、文部科学省のほうで伝統文化を重んじるんだよということをやっていますので、それを受けて、学校がどのように取り組んでいくか。そのときに公民館の主事が減らされている中、動けるのは学校だろうし、学校と公民館がタッグを組むと言いましょうか、縦割り行政を取り払って、健やかな子どもの健全育成のためには力を合わせなければいけないのではないかなと思って提言させていただきました。

ということで、直根小学校における民俗芸能への取り組みの発表を終わりますが、先ほどの意見交換の時に出了ましたが、実は私の狙いは民俗芸能を残す、続けるという狙いよりも、村おこしであったり、町おこしであったり、地域を元気にする、地域と学校を元気にするというのが一番の主の目的にあるわけなんです。そのためには、一番手を組みやすいのは民俗芸能ではないかなということで進めてきた実践でありました。本当にご清聴ありがとうございました。

司会 金先生、非常に熱い発表をありがとうございました。そうしましたら、またここで今回の金先生の発表に関しまして、1 つ 2 つちょっと質問を受けたいと思いますが、どうぞ挙手をお願いいたします。ご意見等でも結構ですので。よろしいですか。はい、ではこれで、金先生どうもありがとうございました。

私は最初の話の中で、最近少し学校での民俗芸能への取り組みというのを聞く機会が少なくなったという話をしたんですけども、まだこれだけ熱意を持ってやられている事例というのがあるということで、また認識を新たにしました。

報告 5

餅・団子を通した様々な「発見」

～東北歴史博物館が小学生と行った民俗調査から～

宮城県教育庁文化財保護課技術主査 小谷竜介

司会 そうしましたら、事例報告としては最後ですが、これは民俗の伝承という意味ではなかなか目に見えにくい部分である生活文化に関するもので、「餅・団子を通した様々な『発見』～東北歴史博物館が小学生と行った民俗調査から～」という題で、地域と博物館と学校との連携というような形で事業をされている例をご紹介します。宮城県教育庁文化財保護課技術主査の小谷竜介さんです。

小谷竜介（宮城県教育庁文化財保護課技術主査） 小谷でございます。どうぞよろしくお願いいたします。私、この春に転勤になりまして、現在文化財保護行政のほうにタッチしておりますが、もともと去年まで東北歴史博物館という宮城県立の博物館で学芸員をしておりまして。昨年度やった事業について話をしてくださいということで依頼されまして、今日お話をさせていただくので、ちょっとタイトルが長いなと思ったのですが、肩書きのからみがありまして、タイトルのほうに明記をさせていただきました。

先ほどの金先生がまさに小学校の取り組みの話だったのですが、この宮城県立博物館である東北歴史博物館でも、小学校と一緒に事業をやってきました。その取り組みについて報告をさせていただこうと思います。そういう意味では朝一番に初めにありました佐川さんの資料館と行事との関わり等々みたいなのも関わってくるかな、というふうに思っております。

お話をさせていただくのは2008年、昨年度にやった餅・団子の調査というもののなのですが、前史というものがあまして、2006年からこの手の活動を歴博では始めました。基本的には文化庁のほうで芸術拠点形成事業ということで、今名前が変わりまして、たしか美術館・博物館活動基盤整備支援事業という名前になっていると思いますけれども、その請負事業という形で行ってきました。はじめは2006年で「熊野信仰と東北」というタイトルの特別展の関連事業として、何か子どもを使った事業をやりたいという指示から始まったんです。このときは時間がなかったのもあって、必死になって考えた結論として、この「熊野信仰と東北」というタイトルなので、熊野信仰にゆかりの地の小学校同士の交流会を、特に芸能をやっているところがありましたので、そこの芸能の交流会というのでやったというものでした。

このときに想像以上に小学校の中で評価が高かったというのがありまして、この交流会そのものが博物館事業としてちょっと面白いんじゃないかと。2006年の場合は急ぎょ開いたというのもあって、特段これから何かを得ようというようなことは考えていなかったわけでした。

ども、ちょっと真面目に考えてみようとしてやったのが、2007年の事業になります。レジュメのほうに書いておきましたけれども、「博物館を核とした学校地域連携事業」ということで、ここでは単に小学校同士の交流ではなくて、地域も巻き込んだような事業としてやっていこうということで、いろいろやりました。

これについて話し出すとこれはこれで結構な事業で、これはこういう報告書を出してしまし、レジュメの最後には書いていますけれど、博物館のホームページのほうで公開しておりますので、ご興味ある方はご覧いただければと思います。この事業の1つの欠点はものすごく複雑に事業を組み過ぎて、やっているほうもよく分からなくなるくらいのもになってしまったことにあります。これの反省の1つがその2008年度の事業に行くわけですが、この2007年の事業をいくつかやっている中で、これは金先生の話に直接つながるなと思いつきながらさっき伺っていたんですけども、公民館というのが学校と地域をつなぐような仕事で非常に大きい役割をしているんだけれども、地域の文化みたいなもの、特に学校の先生が社会教育主事として来られたような公民館ですと、ある種転勤の1つとして公民館に来られているというのもあって、自分が赴任した公民館の管轄する市町村なり、そういう場所の地域の情報というのは実はよく分からない。そういうときに、博物館とか資料館というのが、その地域資源というのを掘り起しをしていく、そしてそのアドバイスをする、そういう役割が求められるものではないかということ。そして、それを通して交流を図っていくことで、教育的な効果を得られるのではないかという点が指摘されたわけです。

これを受けて、2008年度の事業として、成果の見える体験活動を行う。それからもう1つ、食育をテーマにする。前提としては先ほど申したような2007年からの一定の方向というものがあるわけですが、それプラス、これは2007年度にやっていって思ったことでもあり、それから博物館の中で、最近博物館はサービス、サービスと言うところがあって、お客さんに喜んでもらうというのを非常にやるわけですが、この事業そのものが博物館にとってどういうメリットがあったのだろうか、個別には体験の開発とかいろいろとあるわけなんですけれども、もうちょっと博物館自体の活動というほうにも何かこの事業そのもののメリット、今後展開できるようにするところというのはないだろうかということ考えたのが、そのタイトルにもありますように、調査を小学生と一緒にやってみる、ガチンコでやってみる。調査の体験ではなくて、真面目に小学生にもデータを出してもらう。そういう調査をやってみると、ちょっと僕らがプロとして民俗調査をやるのとはまた違ったようなデータの取り方みたいなものができるのではないかというのを考えて、この3つを一応柱に据えた活動をやりました。

対象となったのは博物館のすぐ隣、隣接しているのですが、城南小学校という小学校と、それから白石というのは宮城県が一番南のほうにあります、最近片倉小十郎で売り出していますけれども、その深谷小学校という2つの学校。そして餅食・粉食で、やるのは小学生の聞き書きの調査。それから稲作・畑作の体験をやり、そして小学生の調査を受けて、大学ともこの事業は連携しておりますけれども、それをやり、そして、現地報告会の開催と小学校の交流会、というような事業で行いました。

このへんを整理すると、レジュメのほうに載せておいたのでそちらを見てもらったほうが分かるかなと思いますけれども、基本的には博物館とそれから2つの小学校との間にだ円形で描いてあるところが関わる団体です。行政区であったり、PTAであったり、それから上のほうには多賀城市の埋蔵文化財調査センターというのが載っていますけれども、これは多賀城市のいわゆる資料館になります。そのほか大学、それから博物館のボランティアさんというような形

で、非常に多様な団体の方々にいろいろな関わりをしていただくというような事業というのを展開するということにいたしました。

この事業の要点としては、博物館のメリットになるということのも1つなのですが、それから後で気が付いたというところもありますが、大学生が参加したというのは結構ボディブローのように後々効いてきました。多賀城のほうは完全な新興住宅地で、それからご存じの方はご存じだと思いますが、古代の陸奥国府であった多賀城のある場所なのですから、まさに多賀城の政庁の真上に住んでいる、昔の遺跡の上に住んでいる部分と、その周りの田畑だったところがほとんど開発をされて、今ニュータウンになっているわけです。それとあとは大きいのは自衛隊の官舎があるんですけど、自衛隊ってすごい単位で転勤があるんですね。だいたい1年で100人ぐらいのオーダーで変わる。つまり、1学年まるまる児童が入れ替わるぐらいのペースで子どもが入れ替わるということで、多賀城のこの小学校というのは地域との関係が非常に薄いというイメージがあって、それに対して深谷というのは白石市なんですけれども、その一番農村地帯になります。比較的過疎が進みつつあるような場所ですが、深谷では地域との関係があるだろうと思っていたら、案外深谷もないということがここで分かったわけです。そのときに大学生、特に民俗学をやっている大学生が、地域との接着剤というのになってくれたのです。そうして小学生に答えのない調査をガチンコでやってみよう。一過性ではない体験というのが一応眼目になります。

まず、そのためにということで、何で餅と団子なのかということだけ1つ触れておこうと思うのですが、これは私は宮城の歴史博物館の学芸員を10年ほどやりましたけれども、その中でいろんな調査をやっていると、餅・団子に関するような話というのが結構ちょろちょろと出てきていた。何だろうなと思いながらも、なかなかそれを正面で調査をする機会がありませんでした。何か食であったり、それから行事の調査であったりというようなときに出てきていて気になっていたんです。それでいつか何か調査をしてみたいというふうに思っていたのですが、なかなかそれだけをテーマにしづらかったのでやってみたかった。それから、小学校のほうから食育というのが最近はやっているんで、そのへんをテーマに何かできないかというのが来たときに、これだということでやったということです。

詳細はレジメのほうにも書かせてもらいましたが、宮城では特に県の北のほうから、旧仙台藩というのは岩手県の南3分の1まで入るんですけど、岩手県の一関あたりぐらいまで餅というのが最近観光資源としても見直されているんです。北のほうではかなり餅、餅と言っているのですが、個人的な印象としてはそんなに県の北のほうだけかなというのは思っていたので、ちょっと真面目に調査をする。それから、それ以前に宮城そのものが、特に知られているような行事の調査というのは比較的されているんですけど、それに対してそうでもないような事例というのはあまり丁寧に調査をされていないのです。だから餅そのものというか、食文化というのは丁寧に調査というのはあまりされていないとか、そのへんがありましたので、今後のための基礎調査で、フィールドに、特に何か目立ったような行事がない場所にもフィールド調査で入ってみるということもありだろう、という点も含めての調査ということがあります。

事業として実際に何をやったのか。細かい事業スケジュールをレジメのほうに載せてありますが、今回の要点になるのは子どもたちと調査という活動をやったということになるかと思います。調査というのは具体的に何をやったかと言いますと、基本的に城南小は4年生が一緒に事業をやったということもありまして、主に城南小学校の4年生の間での調査ということに

なります。7月と9月と2回実施しました。単に1回だけではなくて、これは通常の調査でも何でもそうですけれども、調査で話を聞いて、それを持ち帰ってデータ整理をして再調査をする、というのがやはり鉄則だと思いますので、そのへんは子どもたちにも体験をしてもらいたい。そこからちゃんとデータをやってもらいたいということです。ただ、31人児童がいたわけですけど、それがズラズラとやっていくというのはなかなか大変だということもありますので、本当は話者の家に1軒1軒行って、何人かのグループごとにやっていくというのがいいんですけど、いろいろなことを考えると、話者に学校に来てもらって学校で調査を行うというスタイルにしました。

ちなみに深谷小学校のほうでは3年生だということがあって、城南小学校と全く同じようなことはちょっと厳しいだろうなということがありましたので、8月に大学生がやる調査というのに一応同行してもらってやりました。

いきなり民俗調査をやりましようと言われても、餅を調査しようと言っても無理だということで、レクチャーというのを都合3回行いました。パワーポイントでプレゼンをやって、45分授業で都合3回、ですから結構な時間をこのものに割いてもらったと思います。

レジュメのほうに資料2という形で「こんなしつもんをしてみよう!」というふうに書いてありますが、これは原版はA4の2ページ分。本当は3ページ分つづつたのですが、もう1ページあるんですが。こういう大きいテーマ、お正月に食べるお餅を調べようとか、お正月以外にお餅や団子を食べるのはいつだろうとかという大きいテーマを設定し、かつ、質問項目というのをつくり、そしてそれぞれがどういう意図でこういう質問なんだよという解説をついています。

一応、これはうちの職場に小学校から来ている職員がおりましたので、一緒に打ち合わせをしながら、そして当然その小学校の担任の先生と打ち合わせをしながら、これぐらいの内容だと子どもたちも理解できるだろうというのをつくった上で、このへんをプレゼンをしながらやったわけです。写真に出ているのがそのときの様子ですけども、これをもとに実際の調査を行いました。

2 回目の調査も先立ってレクチャーを、1 回目の調査の成果をもとに子どもたちに整理をさせて、子どもたちの質問項目というのを出示してもらって、それを受けて 2 回目のときも同じように質問をつくってレクチャーをするというのをやりました。

それで、実際の調査はこんな感じで、真ん中に椅子に座っているおじいちゃんとおばあちゃんがいて、おじいちゃんはやっと向こうを向いていますけれど、これが話者の方になります。地元の書道会の方をお願いをしたところですね。基本的に全員 80 から 88 歳というおじいちゃんが皆さん来ていただきました。送迎は博物館の職員が全部やりました。

隣にいる白い縞のシャツを着ている子が、これが大学院生ですが、1人ここに立っています。ちょうどおばあちゃんが話している内容、おばあちゃんは当然地元の農家のお嫁さんなんですけれども、方言がすごいんですね。多賀城の子どもたちというのは、自衛隊の基地の人が結構多かったりとか、転勤族が多かったりするので、普通のいわゆる宮城の言葉というのは聞き取れない子がほとんどですので、彼が今、半分通訳みたいな形でやっている。単純に通訳もそうなんですけれども、やはりおばあちゃんが言った答えに対して、子どもたちが理解するために解説がある程度必要になってくるわけです。また、この質問表というのは当然話者の人たちにも配ってあって、だいたいこういう質問が出ますよというのですけれども、そこから派生したような質問というのもだんだん出てくるようになるのですが、その過程ではいきなり子どもの

言葉で質問させても、またおじいちゃんおばあちゃんも分からないというのがあると、大学生がそれを通訳をしたり、そうやって結構間に入ること、それからこの話がどうも面白そうだと思うと、それを今度は膨らましをしたりとか、話がそれで想定していたのと違うような流れになったときに、それと関連のあるほかの質問の子に質問をさせるとか、そういう交通整理というのを大学生がかなり頑張ってくれました。

後側にいるのは明らかに大学生でないことはお分かりだと思いますが、これは多賀城市の職員の方。関連するこういう職員等は、私は基本的に撮影係だったんですけど、逆に後側にいて、子どもたちがノートをとったりしてよく分からなくなったりするときなんかは、フォローアップをしたりというような対応をここではやりました。

深谷は、先ほど述べた通り、基本的に一番奥に大学生と話者が、どっちがどっかはご覧になって分かると思いますけれど、話を聞くというのを聞いております。これに対して一応私はこのときは写真を撮っていましたが、あの5人の子どもたち、深谷小は小さい小学校なので3年生が5人なんですけれども、5人の子どもたちに対しては私のほうが後ろについてフォローしてあげました。一番手前はいろいろと地元の仲介役をやっていた公民館の館長さんなんですけれども、面白そうだから一緒に同席させてくれということで、ただ地元の公民館の館長で地元の方で、この館長さんが高校の先生を退職された方なので、結構理解いただいて、この方が大分間に入ってくれて、話者との間を取り持ってくれたり、大学生と同じような役割というのもやっていただきました。

そして成果の整理ということになるわけですが、最近の小学校ってこの事業のために私も30年ぶりぐらいに小学校に足を踏み入れたら、こうやって寝転んでやっても大丈夫なような教室というのが今どきあるんですねというのが分かったのですけれど、子どもたち、成果は壁新聞という形で出しましょうということで、紙を広げて、手前側のこのあたりのやつがノートになるわけです。自分たちがとったノートです。これは小学校の先生が驚いていたのですけれど、だいたい2時間授業をやって、聞き書きしたのがだいたい60分くらいなんですけれども、それで多い子だと10ページ以上、いわゆる自由帳なんですけれど、これに書き込みをしていて、こんなに子どもが話を書いているんだというのに驚かれていたのですけれども、どの子も熱心にデータをとっていました。

それで壁新聞をつくっていくわけですね。分かったこと、それからそこから出たよく分からなかった疑問点、そして最後に感想文ということで、新聞ですので最終的にそれは全部カラーコピーをとって、色鉛筆で最後に色を塗るわけですが、それは話者の方々には全員にお渡しをしたわけです。当然これをやっている、と、案外分かっているようでノートを見るとよく分からんというのが出てくるわけです。実際には話は聞いていたりする。そのへんは、このときは大体、30人に対して6人くらいの大学生に来てもらったのですけれども、それが横にいて、ほら、ノートのここに書いてあるよねと、これがそうなんじゃない？とかというような形でノートのアドバイスをしたり、あのときにどういう話があったっけ、というようなディスカッションを大学生がしてくれたというのがあります。それがかなり効果的で、ここから豆餅という、よくある餅の中に豆をつきこんでやる餅があるわけですが、この豆餅の豆って何色なんだろう。色を塗ろうとしたときに分からなくなったので、おじさん何て言っていたっけというと、豆って言っていた。豆って小豆かな大豆かな、何色なんだろうね、っていう話をここで大学生がふっていくと、そうすると豆餅として聞いた話では、豆を煮て、餅と一緒につきこむと出来上がると聞いて、これでできた気になっていたんだけど、実は色を塗ってみる

と、何豆か分からない。だから再現ができないということにそこで気づくわけです。そういうのが、この活動としてかなり意味がありましたし、単純に話を聞いて分かったような気になりつつ、分かっていないというのが子どもたちのある種の発見だったかなというふうに思っております。

こういうのを受けて、体験活動と交流会。調査の成果のあり方というのは、当然この設定をしないとイケない。博物館のメリットとしては調査だけだと言ってしまうかもしれませんが、子どもたちにモチベーションを持たせるという面も含めて、かつ目標をはっきりさせるという意味で、この体験活動および交流会というのは非常に重要になってきます。

設定したのは先ほど述べた通りで、農作業体験と、それからこれは触れていなかったですけど、事前交流会と小学校交流会。事前交流会というのは、小学校交流会というのをやって、これはこれでいいんだけどちょっと欠点があって、1日というか、白石などから来ると1時間以上バスでかかりますので、そうすると、大体正味一緒にいられる時間って3、4時間ぐらいなんですね。で、3、4時間でやると大体仲良くなったところにさようならで、あと2度と会いませんという形になる。これはこれで交流としてはかなり子どもたち同士は刺激になるんだけど、もうちょっとパンチがないとねということで、事前に1回会っておくという形ではないかということで、それは2007年のときに指摘があったんです。それがあって、今回この事前交流会というのを設けてみました。

畑作体験と言いつつも、畑作体験は基本的に博物館の隣の城南小学校と一緒にやりました。とは言え、博物館の中に田んぼがあるわけではないので、テンバコを使ってテンバコの稲作をやる。あと、畑はあるんですね。畑を使って小豆と大豆の栽培というのをやりました。そして、それを受けて、この事前交流会ではその城南小学校の子どもたちが実際につくった作物の、これは稲の脱穀、調整まで一応できるのですけれども、こうやって千歯こきとか、臼を使った粃摺りとか、箕を使って穀を飛ばすとか、そういうのは一通り体験できるようにしてあるので、そのへんで実際にやってもらったり、それから豆の収穫・脱穀作業と、そういうものを一通りやりました。このときには、やはり大学生にも来てもらい、それからちょうどこの映っているのがそうなんですけれど、稲の穂を持っている前のほうの子は城南小学校の子、後ろのほうの子は深谷小学校の子なんですけれども、一緒に作業を共同でやるということでお互いに知り合うという事前交流会というのを開催いたしました。

そして、これが最終的に小学校の交流会ということになろうかなというふうに思っています。交流会ではこういう研究発表でその年1年やったこと、それから特に調査を通じて得たような餅とか団子をテーマにした発表をしてもらおうということです。それと併せて、実際にいろいろな食べ物、調べてきた餅をつくるという体験。これは餅つきなんですけれど、これ以外に、深谷で二十何種類、多賀城で18種類ぐらいだったと思いましたが、それぐらい餅の食法、食べ方があったんですね。その食べ方について、再現できるやつを10種類ぐらい、当日は食べられるようにしました。このへんでは基本的にコシアンで小豆は食べるのですけれども、コシアンの小豆を濾す体験を、ザルを使って濾すとか、それから絡み餅ではショウガ餅なんていう餅があって、ショウガをかけて食べる餅なんですけれども、こういう餅を実際に子どもたちと一緒にショウガをすって食べたり、それから餅に醤油を垂らしてお湯をかけて食べるという湯餅という食べ方があって、これは宮城ならではの非常に簡易なおやつというか、いわゆるコビルみたいなときとかに食べたり、あと夜中に腹が減ったとき食べたりする間食なんですけれども、そういう餅の食べ方を実際に体験するというのをやりました。

一応発表なので、この事業をやったのだったのかということですが、大きく「発見」というのをテーマにしたのですが、基本的には小学生にいろいろと発見をしてもらうというのが主目的で開催をしたこの事業だったわけです。それは1つには、単純には、うちの地域に食の文化としてこれだけ多様な種類を、こういう多様な場で食べるという、今まで自分たちが知っているような、お正月に食べるような餅以外にも餅の文化があるんだということを知ってもらうというのが1つだったわけですが、それ以上に、地域の人との交流というのが想像以上に意味があった。それ以上にここでレジュメのほうにも書きましたが、多年代の人との交流ということで、一般的なおじいちゃんおばあちゃんが来るということですが、小学校の10歳の子どもが80代から88歳ですね、88歳というと78歳年上の方ですから、おじいちゃんよりもさらに1世代上の方というのと会話をするという行為の新鮮さ、それからそこから調べ学習、いわゆる最近の子どもたちは基本的にインターネットなんかを使って調べる、それから本を使って調べるという調べ学習をやるわけですが、そうではなくて、人の話を聞くとインターネットでは出てこない話が出てくるというような発見。そして、大学生という、大きいお兄ちゃんお姉ちゃんがいる子は別としても、自分の家族の中ではあまり付き合いのない、大学生のお兄ちゃんお姉ちゃんとの付き合い。そういう人からいろいろと教えてもらうというようなことで、レジュメのほうでは「世間の広がりを実感」という書き方をとりあえずしていますが、非常に多様な世代との付き合いで、それぞれからいろんなものが得られる。人との交流から情報が得られるということの発見。そして白石市との交流を通しての地理的な空間的な広がり、そういうものを身をもって知る。

そして地域の人にとっての発見というのが案外ありまして、これは当然調査を普通に我々が仕事としてやった後に現地報告会みたいなのを開いたときも同じような反応はあるんですけど、特に小学生を媒介に、ダシに使うという言葉が悪いかもしれませんが、小学生と一緒にやったということで、特に比較的若い世代のお母さんたちというのが、今回発表会なんかに来ていただいたんですね。これは我々が発表会をやると比較的上の世代が多いし、博物館の事業なんかでやるとやはり上の世代が多くて、いわゆる30代ぐらいの女性とかというのはほとんどこの博物館の中では交流が少ない世代になるかなというふうに思うわけですが、こういう人たちなんか、嫁に来て謎だった、何でこんな姑さんに餅つけ餅つけ言われるんだろうとかという疑問が、ああ、やはりここはこんなにこうあって、すごいんだとか変なんだというのを実感したとか、嫁に来てから不思議に思ったことがよく分かったとか、そういうような反応。これも我々にとってもちょっと意外な発見事だったかなと思います。

そして大学生にとっても、子どもたちにとって大学生が価値があったのと同様に、大学生にとっても、民俗学をやっていて、先ほど出ていた子も基本的に大学院生が何人かいるのですが、4年生の子なんかでは誰一人大学院に進学というわけではなく、単に何か小谷が面白そうなことをやっているから手伝いますと言って来てくれたわけですが、そういう学生たちが、この民俗というものがその地域の中でどういう意味を持つのだろうか、自分たちが実習で調査をしたり論文を書いたりしたことというのが、大上段に地域振興とか地域づくりとか、そういうことよりももうちょっと小さな下のレベルでも役に立つことがあるんだというのが分かったという点。それから自分たちが聞いて理解するのを、さらに子どもたちに伝えるという行為を通じて、調査というものをもうちょっと客観的に見るという点があった。

そして教員にとっても、必ずしも特別な技術を通しての地域との交流事業である必要はないという点。たいていの何か地域のネタというときに、特徴的な、深谷には深谷太鼓というのと

深谷神楽というのがあって、5年生と6年生はその深谷太鼓と深谷神楽というのがその事業としてそれぞれやっておられるわけですが、そういうものの以外にうちほうには特別なものというのはそんなにないんだというのを思っていたんだけれども、こういう餅とか、逆に言えば何か見込みがなくても地域の中に入って何か情報を得ようとする、結構地域ならではのものというのを見つけられて、それが結構子どもたちの刺激になるんだという意味で、結構、先生方にも評判だったのかなというふうに思いますし、発見だったかなと思います。

こうした事業で私自身にも、どのような発見があったかという、基本的には単発の事業で、例えば大学生と同じような場で1回だけの聞き書き調査をやる、それから稲作体験、脱穀体験をやるというのではなくて、これだけ反復的にかつ複合的にやったからこそ出てきた結果なのではないかというふうに思っています。

そして、予定調和ではない、つまりたいていは先生が答えを知っているという中でやるんだけれども、小谷も含めて、それから自分たちの担任の先生も含めて答えを知らない。答えを知らない中で調査をやって、子どもたちがまさに調べ学習とは違う結果というのが得られてきた。そして、最終的に結果が表れる。自分たちが先生たちも知らないような調査の成果がこういうものになるんだというような体験。そういうものが、この事業がある程度面白く、いろんな形で成果が表れる事業だったのかなというふうに思っております。

基本的にはこういう事業を通して、子どもたちに何かをやろうというのを主な眼目で始めた事業だったわけなんですけれども、この3年間通してやりながら、今日の話をする中でいろいろと思い返してみると、基本的に子どものためではなくて、ある種、子どもを媒介とすることで、多様な伝承をいろんな世代に対してつくり出していくというのが、こういった事業のいいところではないのかなという点ですね。なので、子どもの活動に対するようなサポーターとしての親とか地域社会とか、そういうのを育てていく。そこまで含めて博物館という場、それ以外の場というのも当然あると思うのですが、少なくとも私が主要な関心である博物館という場では、単純に子どもだけでなく、そういう地域のサポーターまで含めた、そしてその多様な世代に波及させるような事業というのが、1つ、今後博物館等が求められる事業ではないかというふうに思ったというのが、1つの感想になります。ということで、以上、発表を終えさせてもらおうと思います。

司会 どうもありがとうございました。そうしましたら、今の小谷さんのご発表に対しまして、また質問を1つ2つ受けたいと思いますが、いかがでしょうか。はい、どうぞ。

大山孝正 (福島県文化財センター白川館) 福島県文化財センターの大山です。たまたまうちの職場でも、年末にかけて餅つき大会というのを毎年イベントで入館者が少ないのでやれということで、担当を任されて今準備しているんですけども、やはり単なる餅つきではもったいないからということで、民俗行事にからめて、地域は白河なんですけれども、たまたま餅つきを行う行事がたくさんありまして、それで今調べていました。そういった中で、今日発表を聞かせていただいて大変参考になりました。

先ほど、最後に今後の長期的な展望みたいな話も少し出てきたのですが、事業として単年度で終わらないで、今後どういうふうに活用というのですか、展開させていくのかということで、今お立場もちょっと変わったということですが、今後の事業の成果というのをどのように活用させていこうと思われているのかということ、ちょっと具体的にお聞かせ

いただきたいと思います。

小谷 この餅のということですか。基本的には、継続的にやっていくのも、例えば餅をテーマに県内ずっと調査をしていくとかというのもありなのかもしれませんが、私としてはこういう種を蒔いていくというか、県内でいろんな地域があるわけですが、そういう場所で、その地域の中で民俗的なものとか、そういうものを探していくことはそんなに難しいことではないということ、県内の学校もそうですし、それから公民館だったり、資料館だったり、文化財だったりというような方々に知らしていくのをやっていくという方向が仕事とか、この事業から得たものを還元していく1つの流れかなというふうには思っております。

その意味で言うと、この事業でその中のいろんなテクニックとしてはこういう個別にやったことというのを使えるかなと思っているということなんですけども、それでよろしいですか。

大山 そうですね。今は県庁に異動されているということなんですけども、おそらく博物館で行った事業の成果というのですか、それを例えばいろんな民俗文化財の保護とか、そういった大きな枠の中でどのように活用されていくかというふうな、そういったお考えがもしあれば。

小谷 餅は文化財になるのはなかなか厳しいかなと思うのですけれど、というか、逆に言えば文化財云々という問題ではないからこそ、博物館という場でできるのかなとはちょっと思っているわけなんです。なので、これはあくまでも博物館という枠の中で地域の文化を考えていくという枠組の1つだとは思っております、というふうに回答させていただきます。

大山 はい、分かりました。ありがとうございました。

司会 よろしいでしょうか。少し時間が押しておりますので、そうしましたらここでいったん小谷さんへのご質問を切らせていただきまして、これからちょっと休憩を挟みまして、コメントと討議というふうに進めさせていただきたいと思いますが、まだご質問をいろいろお持ちの方がおられると思います。先ほども申しましたが、袋の中に質問用紙が入っておりますので、ご質問のある方はそちらに記入をいただいて、出たところに質問用紙の回収箱を置いておきますので、そちらに入れていただければと思います。あらかじめちょっとお断りしておきますのは、討議の時間も限られていますので、すべての質問に答える時間があるかどうかというのはちょっと保証できませんが、できるだけお答えしたいと思いますので、そのような形で質問を出していただければと思います。

そうしましたら、小谷さん、どうもありがとうございました。

総合討議

司会 俵木悟（東京文化財研究所無形文化遺産部） それでは定刻になりましたので、総合討議を始めたいと思います。まずはこれまで事例報告をしていただいた5名の報告者の方々と、今回はお二方のコメンテーターの方をお招きしております。新潟大学教育学部教授の伊野義博先生、それから盛岡大学文学部日本文学科教授の橋本裕之先生のお二方をお招きしておりますので、それぞれ報告者の方々、それからコメンテーターの方々、どうぞよろしくご登壇をお願いします。

そうしましたらここからの総合討議は、コーディネーターということで私ども無形文化遺産部長の宮田に任せます。どうぞよろしくお願いいたします。

コーディネーター 宮田繁幸（東京文化財研究所無形文化遺産部長） それでは総合討議に移りたいと思います。総合討議の進め方でございますけれども、まず今回コメンテーターをお願いしております新潟大学の伊野先生、それから盛岡大学の橋本先生から、午前中から今までの5名の方の事例発表をお聞きになって、それに対する総合的なコメントあるいは個々のコメント、あればご質問等も含めて、まず大体10分から15分程度で一人お話いただければと思います。ではまず伊野先生からお願いします。

伊野義博（新潟大学教育学部教授） こんにちは。伊野といいます。今日は初めての方ばかりでちょっと緊張しております。どうして私がここにいるかと自分なりに考えてみました。私は大学を卒業しましてから、12年ほど中学校の音楽の教員をしておりました。それからその後に大学の教育学部に入りまして、音楽教育を担当しております。自分の研究の対象としているのが、民俗音楽あるいは民俗芸能の音楽で、それらを通して日本の音楽科教育を考えていくことが自分のテーマです。それから今、附属学校の校長もやっております。このような立場から、今日ここに呼ばれたのかなと思っています。

その意味で、子どもあるいは子どもの活動、そして教育という立場から、今日いくつか自分なりに感じたこと、考えたことをお話いたします。

全体を通して感じましたのは、子どもをめぐる関係性が大きく変化している、ということです。民俗とか伝承というのをどうとらえるかによってさまざまな考えとか意見が出てくるでしょうが、それを前提としながら、私なりに6点ほど、考えを述べたり提案したりしたいと思います。

1点目です。たくさんの素晴らしい実践を聞きまして、子どもの学びの点と点がつながって、新たな学びの枠組みが生まれているということ、そしてそのような新たな枠組みの発想の必要性があることを感じました。

例えば、これまでは何々保存会が一生懸命伝承してきたけれども、それを学校に依頼をして、子どもたちを育成してくれないかという…。AとBが2つに分かれ、両者がつながって何とか

伝承するというよりも、むしろ A と B が新たに一緒になって、学校と保存会、あるいは地域と学校、あるいは保護者とか、そういう関係を、関係性の強さ、程度は別にしましても、つくろうという発想になってきていると思いました。新しい共同体と言ってしまうとちょっと語弊があるかもしれませんが、例えば直根小の「地域の学校」という発想はそういう事例だと思います。学びとか伝承を一つの全体系として考えて創り上げていくというような発想です。この点、ポイントになると思います。

2 点目は、そのための連携の構造あるいは組織、これをつくり上げる、あるいはつくり上げなければならないということです。今日あらためて強く思いましたのは、地域の中にさまざまな役割の人がいらっしゃるということです。学校側から見ると、学校と先生と子どもと保護者ぐらいかななんて思いますけれど、伝承者の方、学芸員の方、大学生の方、教育委員会の方、考えてみると、本当にさまざまな人たちがいて、さまざまな立場からいろんなことをやっていらっしゃる。こういう連携の財産がいっぱいあって、これをもっと探す必要があると。そして、その人たちとどういう連携の構造をつくるのかというのが極めて重要になってくるなというふうに思った次第です。

3 点目は、子どもの成長にとってどんな意義があるのかを、私たちはきちんと考えて相互に伝え合う必要があるということです。これまでですと、例えば後援会とか保存会のほうからは、まず継承という言葉がでてくる。ところが、学校のほうは継承とは言わないんですね。継承するために子どもを使うという発想だと、学校は反発をする点がいっぱいでてきます。なぜ継承され、なぜそこに無形の民俗というものが存在したのかということまでもう一度下げると、そこには必ず子どもの育ちとか、学びとかというのがあったということが見えてきます。そこに新たな現代的な意味を付与していったら、そこから子どもたちの成長にとって無形の民俗を学ぶことがどのような意義があるのかなということをもう一度学校に投げかける。あるいは学校が投げかける。あるいはさまざまな人たちが投げかける必要があると思います。

今日は親子の交流とか多世代の交流とかという、そういう意味も言われていましたし、私としては、例えば身体で思考するというのは今の子どもたちにとって重要なことだと思うわけです。なくてはならない思考の方法というものを、やはり伝えていく必要があるのではないかと。それには、やはり無形の民俗というのは重要な意味や価値があるのではないかと思います。

4 点目ですが、そのために私たちはカリキュラムの発想を持つ必要があるということです。カリキュラムは学校で用いられる言葉ですが、いわゆる何というか、固い意味でのカリキュラムではなくて、子どもたちをどう育てたいのかということ、何のためにどう育てて、どのような走路、走る路というか計画ですね、どういう育ちがあるのかということ、そういう発想をしていく必要があると思ったわけです。

餅とか団子の民俗調査の小谷さんの発表は、まさにそのカリキュラム的な発想として提案されています。そうなったときに、大人がある意味で自信を持って関わっていくことができるのです。伝承する子どもがいなくなっちゃうから、そのためにだけやっているということと違った発想が必要だと私は考えています。

5 点目ですが、そのために無形の民俗の性格に合わせた伝承の方法を考える必要があるということです。例えば体験できるものと体験できないものがあります。今日の歌舞伎というのは、伝承の組織とかが仮に変化しても伝わっていく。それは歌舞伎そのものが持っている性格だと思うのです。しかし、例えば神仏への奉納というものが重要な部分であって、そこに他の人は関われないとか、あるいは子どもの体験なんてとんでもないとかという、そういうものもある

と思うのです。そうした場合はやはり、学習をどうするかということを考えなければなりません。しかし、そうしたものの学びの体系の中に組み入れることは十分可能ですし、していかなければならないと思うのです。

すべて無形の民俗だからみんなで体験をする、それを何か実際にやってみるというような発想とはちょっと違う。どのような形で対象をとらえて、どのように学び合うかという、この考え方というのは非常に重要だと思います。

最後にこれは今日の出席名簿を見て感じたのですが、直根小の校長先生もご指摘されたように、学校の先生がいらないなと思いました、純粹に。直根小の校長先生お一人だけ。それにあえていえば僕が入るのか入らないのか…。こういう問題は、子どもに関わる全体のつながりの中で考えていけると、さらにもっと成果があがってくると思いました。

コーディネーター ありがとうございます。では引き続いて橋本先生、後でお配りになった資料にも触れながらお願いいたします。

橋本裕之（盛岡大学文学部日本文学科教授） はい。15分しゃべっていいんですよね。

橋本です。どうぞよろしくお願いいたします。プレゼンの数がちょっと多いので、うまくお話しできるかどうか分からないんですけど。先ほどの小谷さんの話の中で、多様な伝承のきっかけをつくることができる、というようなことが最後に書かれていましたよね。これって学芸員の1つの社会的な役割だと思うのですが、最初の佐川さんが伝承者としての学芸員の役割みたいなことをおっしゃっておられたと思うんです。こうしたときに、いま伊野先生がおっしゃったような多様なネットワークをつくる中で、アクターの1つとして、学芸員というものと見え直すことができるんだろうなと思いました。

というのは、私、今盛岡大学に勤めていますけれど、もともと国立歴史民俗博物館に勤めていましたから、やはり博物館の学芸員というのがどういう仕事をするのかというのをすごく考えていました。今日も八千代の、今は違うところにいらっしゃいますけれども、木原さんとか、東村山におられる久保田さんとかいらっしゃいます。学芸員としてある意味で伝承をつくっていくような場面に関わるようなお仕事をなさっておられる方が結構多いので、そのへんすごく大事だなと思いました。

今日、朝来まして急にお渡ししたのでちょっとご迷惑だったのですが、今日お配りしたこの2枚、説明をしろというお話なので説明しますと、1つ目のお助けガイドと書いてあるほうは、私が以前つくりました『心をそだてる子ども歳時記12か月』という絵本で、荒井良二さんという絵本作家と一緒につくった、年中行事とか歳事を子ども向けに体験的に勉強してもらおう、楽しみながら知ってもらおうというようなものなんですけれども、この中に載っているものです。

この中でも書いていることですし、その裏のほうは福井県立若狭歴史民俗資料館の特別展の内容なんですけれど、これを見ていただきますと、私は小学校の教員でも何でもありませんけれど、自分が25年ぐらい調査しているところで、小学校のいろいろな総合的な学習の時間の中での活動に関わるというような形で、10年近くいろいろとお手伝いをしてまいりました。これは私が千葉大学にいた当時の記事ですけど、今も継続してやっています。

こういったときに、やはり地元の、この場合には若狭歴史民俗資料館の学芸員の方とネットワークをつくりながらやっていくなんてことをしています。これは特に今日お話をしたいわけ

ではないのですが、事例としてお目にかけたいなと急に思ったものですから、ちょっと無理を申しまして配っていただきました。

今日私は、主に3点ほどお話をするのがいいのかなと思っています。私は今、早池峰神楽で大騒ぎになっている岩手から来ているんですが、早池峰神楽の活況の陰で、実はいろんな困難があります。つい数日前に、早池峰神楽の系統だといわれている幸田神楽の夜神楽があつて、本当に素晴らしかったんですけど、そこの神楽講中のメンバーが、もうあんまりできないかもしれないという。経済的にも大変だし、気分としてもあまりそう負担ができないとか、いろんな理由があるんですけど、どんどん抜けていく状況があつて、そうして抜けていくと、どんどん回ってくる回数が増えますので、負担がさらに激しくなるという悪循環ですね。もちろんこういったときに私たちが、頑張ってください、畳あげますからとか、訳の分からないことを言っても駄目なわけで。民俗芸能の伝承という問題ではなくて、社会的な構造の問題なので、それに対して私たちはどういうふうに対応したらいいのかというのは、一緒に行った人ともすぐく頭を抱えて話をしていたんですね。

今日の佐川さんのお話は、子ども連だったのが子ども会になって、それがとても危ういということでした。別に子どもがいないわけではないのだけれども、いろんな事情でやらなくなっていくというようなこと。今日の佐川さんのお話は、いわゆる学校教育とかそういう制度的なところに触れられなかったと思うのですが、このあたりに今日のお話の大きなヒントが、今日の最初のお話の中にあるのかなと思っています。

それで3点ということですが、1点目は、学校教育と民俗芸能の関係性の多様化という、伊野先生がおっしゃったことになるかと思います。実は金先生のなさっている活動に関しては、私は何度か伺ったことがあります。先生のご発表の中に出てきました和文文化のお話ですね、これは皆さんご存じのように新指導要領ができて、その中で伝統・文化教育というのが出てきている。これに関しては和文文化研究交流協会などもあつて、積極的にこういうものを生み出していこうというような活動があります。そういう文脈の中で、今日はお話をいただいたわけですね。

私も実際に何度か直根小学校のほうに行きましたが、結構ものすごい活動なのです。今日の先生の熱弁をお聞きになってもよくお分かりになったのではないかなと思うのですが、ただ私、今日伺っててなるほどと思ったことがあります。学校に行くと、現場の熱い先生たちという、そういう状況しか見えないところがあつたんですけど、今日のお話を聞いていて、公民館というのがネットワークの拠点としてすごく重要なんだということがよく分かりました。体験の面白さとかそういうことをおっしゃっておられたと思うんですけども、やはり学校だけでどれだけできるかという、いろんな難しい状況があります。そうしたときに、伊野先生のおっしゃったことの具体的な表現にすぎないかもしれませんが、中間的な組織というか、媒体的な組織のネットワークをどういうふうに組んでいくかというのがものすごく重要なんだなというようなことを思いました。

松本さんはタイミングが悪いというか、お話になるのにいろいろとご苦労なさったのかと思うのですが、こういう状況になってきて、やはり伝統文化こども教室という事業がいったん問い直されるみたいなことになっています。ところが、今のフロアからのお話を聞いていても、やはりすごくニーズがあるわけです。これはいろいろな人からも聞いたんですけど、そちらの組織が手がけている助成は非常に使いやすいということは定評がありますよね。そういうのをうまく使いながらネットワークをつくっていく重要性が、とつてもあるんだなと思いました。

この中にはご存じの方が多いと思うんですけども、おそらく情報提供的な意義としてもすごく面白かったと思います。

大鹿歌舞伎は、私は25年以上前に学生のときに見に行ったことを覚えています。北村さんのお話を伺っていて、1つの民俗芸能に財団法人って凄まじいなと思ったんですけど、ネットワークを自覚的につくっておられる。これは大鹿歌舞伎が極めて早い時期から注目されていたということの賜物だと思うんですが、早池峰神楽でこんな凄まじいことにはなっていないわけで、やはり個別的な事情の中で、こういうネットワークを生み出す環境というのがあったんだと思います。

そうしたときに、学校というのも、広い意味での民俗の再生産のための資源というか、リソースの1つにすぎないというか。全体的なネットワークの中のある一部を学校が担っていて、そのことで学校の持っているポテンシャルというのを引き上げていくという意味で、大変な先進例だと思いました。以前行ったときは、栈敷のところですごく早く酔っぱらって何かあまり覚えていないんですけども、今度伺うことがあったら、そういう全体的なコンテクトも拝見しないといけないですね。これもやはり、先ほどの伊野先生のお話の通り、学校教育と民俗芸能のネットワークが問い直される状況になってきていることや、金先生がおっしゃったように、地域文化保存のステーションというふうに学校を考えていくということともつながると思います。

このときに、先ほど伊野先生がおっしゃったことを受けて言うと、学校教育と民俗芸能という関係は、第2回民俗芸能研究協議会でも議論なされたわけですけども、図式的に言うと、2つのパターンがあると思うんです。教育現場の人は、あえて悪意をこめて言うと、学校のカリキュラムが豊かになればそれでいい。学校でいい教育ができればそれでいい。地域社会の民俗芸能がどうなるのが、あまり関係ない。責任ない。ごめんなさいね、これはわざと言っているだけですけど、学校の中にそういった地域のさまざまな文化的な資源を導入する、そのことで学校のカリキュラムを豊かにするという立ち位置です。

学校教育と民俗芸能の関係に関しては、わりとそういう議論が多いなという印象を持っているのです。教育の現場とか教育学的なところから出てきたときに、そういう議論が多い。そうすると、いつも思っていたのは、地元でやっている民俗芸能はどうでもいいんですかということで、ちょっと不満がありました。なので、お配りした私自身の実践なんかにもなるわけです。もちろん学校の中で豊かなカリキュラムをつくっていくことは重要ですが、そのことが結果的に学校を豊かにする以上に、地域社会の伝承の再生産に直接的に貢献する、未来の新しい主要なアクターとして振る舞ってもらえる可能性が学校にないだろうか。学校は忙しいし、時間もないのでそんなことに応えている暇はないよというのは実際あるんだと思うんですけど、そうしたときに、今回出てきたようなさまざまなネットワークを活用することによって、平たく言うと負担も減るでしょうし、みんなでネットワークをつくることで、学校が地域社会における民俗文化の再生産に貢献することが、多分できるんじゃないかとずっと思っていました。

それで、私もこういう活動をしていたりするわけですけども、一方、私自身も含めて、民俗学者とかここにおられるような方が考えているのは、民俗芸能とか民俗文化を保存して継承していくことが必要であるということです。そうしたときに、人もいないし、新しい伝承母体として学校に何とか働いてもらえないかと期待するところがある。そうしたときに、やはり学校の中の現場の状況がもっと知られていないといけないうのが、伊野先生がお感じになっていることでしょう。当然、学校といっても教員だけでつくられているわけではないですから。

例えば保護者はどう感じるでしょうか。保護者としては、いきなりうちの子どもが変な踊りをやらされて受験勉強ができないとか、それをどう責任とるかということやはり深刻な問題なわけで、そういう話し合いの場というのは、もしかしたら文化財研究所なんかで本当は考えるべきで、そろそろ学校教育 VS 民俗文化という対立の構図というのはやめたほうがいいんじゃないかというのが、今日のパネリストの皆さんがお話しになったことから敷衍される、1つのメタメッセージなのかなというような気がしました。

そのために松本さんの伝統文化の事業であるとか、大鹿歌舞伎の北村さんが携わっておられる事業なんかは非常に素晴らしい例をお示しになったと思いますし、金先生のものもそうかなと思います。もちろん、小谷さんがやっておられるのも、まさに博物館がどういうふうに働けるかということになると思うんですね。

2点目はですね、一番最後に小谷さんとどなたでしょうか、福島の方のコメントでやり取りがちょっとありましたよね。あれはすごく面白かったのですが、小谷さんがおっしゃった事例は、暴言ですけど、わりとつまらない事例というか、別にどうってことない事例だったよなと思うんです。すみません、私、暴言癖があるのでどうぞお許しいただきたいと思うんですけど。

つまり今日の発表の多くも、わりと大層なものが対象なんです。「どこどこ（地名）の何々（文化財名）」とか。それは国指定重要無形民俗文化財だったり、記録選択されたのでもうすぐ国指定ですみたいな、そういういわば大層な事例という感じがするんですね。それはもちろん大事なんですけれど、でも民俗と言ったときに、これは文化財研究所の事業ですから当然文化財としての民俗になっちゃうんでしょうけれど、民俗って要するに日常生活の普通のいろんなことなわけですよ。ごく普通の、今つまらないとあえて言いましたが、どこにでも転がっているような民俗みたいなことを考えたときに、民俗文化財の保存の問題としてどう考えるんですかということだと思うんです。多分、そこんところをちょっと外さないと駄目なんではないかなというのも正直、思っています。

ある意味で小谷さんは、もちろん文化財のシステムの中で動いておられるのですが、それを外すみたいなことをされているのではないかなと思ったのは、最後に餅は文化財ではないとおっしゃっておられたでしょう。これ、最後のやり取りとしては大変面白かったと思うんです。食べ物とかあんころ餅とか、そういう普通のものでやっていく。いわゆる文化財保護とか民俗文化財というカテゴリーの中に入るわけではないけれど、普通の私たちの生活習慣みたいなものを中核に据えていくということが、もう少し考えられてもいいんじゃないか。ここで考えられている学校教育と民俗文化という、すぐに文化財指定で保存にどう役に立つかということだけですが、小谷さんがおっしゃったのはもっと些細なというか、そのへんにあるものを発見していくということで、それはこの場所でしっかり議論するべきではないかと思うのです。でないとなんとなく広がらないというか、硬直するのではないかなという気がしています。これが2点目です。これは特に小谷さんの話と、実は最初の佐川さんのお話が深く関わってくるかなと思っています。

3点目に私が言いたかったことは、楽しむとかしつけとかのこと。懸田先生もしつけとかお行儀、礼儀作法みたいなことをおっしゃいましたよね。私はこの『子ども歳時記 12 か月』という本を出した後に、千葉大にいたときに15ヵ月ほど、毎月一度、千葉県青少年協会が主催するちば親子歳時塾というのをやっていました。25組の小学校の低学年の子どもとそのお父さんお母さんが集まって、体験的に歳時を勉強する。小学校の低学年とその弟妹の未就学児な

んかも来たりすると、もう收拾がつかないわけです。そこで文化財の意義とかというとお話にならないわけですね。そういう話をすると、いきなりウルトラマンをカバンから出して並べる子とか、大の字になって寝る子とか、どっか行っちゃう子とか、もう大変なことになっちゃう。でも、そうしたときにやはり学者なので、「お月見というのはね」というふうに、そういう話をしちゃうわけですね、歴史とかうんちくとか。いくら猫なで声で言っても誰も聞いていない。

では、そうしたときにどうするかというと、まず食べ物。これ佐川先生の話にもあったと思うんですけど、食べるもの、おいしいですね。体験してみること、そういうことの楽しさっていうのがすごく大きいかなと思うんです。

今日お配りになった佐川さんの資料で、すごくインパクトがあったのは、この冒頭の写真で、後ろのほうのこの大口を開けて笑っている連中を見ると、めちゃくちゃ楽しいということが、ものすごく伝わってきますよね。スイカを食べて、あんころ餅を食べて、何かめちゃくちゃ楽しそうで。こういうのが民俗文化が伝承されている最大のエンジンだってことを、民俗文化財とか言っちゃうと分かんなくしちゃうんではないかなと思いました。思いましたというのは、私がその親子催事塾というワークショップをやっていて、うんちくとかの話をすると、ある種のお母さんは熱心にメモをとっているんですけど、子どもたちはどっか行っちゃう。だけど、では実際にゲームやってみよう、食べてみよう、体験してみよう、遊んでみようとかというふうにすると、すごく楽しいから、やる。佐川先生のお話というのは、まさにそのことを、実際の現場ですでに起こっている蓄積としてお話しになったんだと思うんです。

ただ佐川さんのお話は、それが今大変に難しい状況になっているというところで、ある意味止まっていて、学芸員としてはどういうふうに伝承者になれるかということが問われている。そこで、例えば学校をも含めたネットワークがどんなふうに貢献できるか。あくまでも後方支援であると思うのですが、そこにどれだけ踏み込めるかというようにところにカギがあるのかなと思うんです。そうしたときに、楽しいとか、おいしいとか、面白いとか、そうすると、僕がその塾をやっていたときにも、「お母さん、去年この時期にこういうことをやっていてすごく面白かったから、今年もうちでやろうよ」というふうになったら、楽しいからおうちの中で行事が行われる。楽しいからみんなでやってみようみたいなことになる。

今日も、懸田先生が親と子のコミュニケーションのツールになるよねとおっしゃっていましたが、しつけになったり、お行儀になったりもします。僕もその塾で、私に教えられる覚えはないかもしれませんが、お辞儀の仕方とかお行儀とかという話もよくしていたんですね。で、そういうように民俗っていうのが、親と子のコミュニケーション、あるいは子ども同士とのコミュニケーション、あるいは世代の違う子どもたちのコミュニケーションになる。今、親子というと、実際の親と子どもが運命共同体みたいに絶対に離れないんですね。そうしたときに、ほかの子どもと一緒に親が何かやるとか、ほかの子どもがほかの親と一緒に何かやるという経験って、都市部、たとえば千葉だとあまりなかったりする。でもそれが、民俗行事の中にはわりとあったりもすると思うんです。そういうコミュニケーションのツールになる。それが正直に言うと、文化財ではなくても七夕ではなくてもいいかもしれません。ウルトラマンでもいいのかもしれない。だけど、とりあえず私たちの地域社会には、こういう財産というのが昔からあるのだから、それを活用して、親と子のコミュニケーションみたいなことにもう少しつなげていくことができないかというのが、千葉県青少年協会、文化財を保存するミッションのないところでつくった事業だったんですね。

多分そういうふうなところに向けて、民俗というのを考えて、民俗文化財と私たちが呼んでいるものをとらえ直す必要があるのかなと思います。もっと喜びとか楽しみとか、お行儀とかしつけとか。多分そうしたときに、松本さんがなさっておられるような仕事が役に立つでしょうし、おそらく小谷さんがなさっているのは、そういうことを文化財という枠組みの中でこっそり、こっそりやっているのかなというふうに思ったわけです。

私の論点としては、以上の3つぐらい。こういうことから、学校教育に貢献するという言葉の、ある種の硬直した感じ、睨み合いみたいな状況をちょっと打破していく何かにならないかなということで、話題提供ということにします。ごめんなさい、いつもの通り長くなりまして。許してください。

コーディネーター 橋本先生は、実は私の大学院のマスター時代の後輩だったのですが、マスターの間に追いつかれて、ドクターコースでは先輩になったので、ちょっと止められない状況でございました。

それでは、今のお二人のコメンテーターのご意見といたしますか、コメントを踏まえて、発表者の方々から何か一言ずつぐらいいただけますでしょうか。ご発表なさったので、そう長い時間ということではないのですが、簡単にお願いいたします。では発表順で。

佐川 佐川でございます。1つ、事例発表の中で伝え切れなかった部分を今お二方のコメントをいただきながら、それも含めてお話ししたいと思います。最後にちょっと触れたのですが、伝承者としての学芸員の役割が求められているのではないかと最近感じていると申しました。橋本先生のお話の中にも出ましたけれども、どういうことなのかということを少しお話ししなければいけないと思います。

例えば学校に授業で呼ばれてまいります。3年生、4年生の地域学習や歴史授業などで呼ばれて行くのですが、その中で例えば今日は昔話をしてください、あるいは今日は米づくりの話をしてください、あるいは今日は魚の漁の話をしてくださいというようなことを求められます。その求めに応じて、いろいろとお話をしたり、いろいろな写真をお見せしたりということで説明をするのですが、常々思っていることは、当然博物館にありますし、知識としてはお年寄りの方にいろいろと話を聞いている一応の蓄積があるので、お話はできるわけです。ただ基本的には伝え聞きである。要するに聞き取りした話を子どもたちに伝えているというスタンスになっていきます。

ところが子どもたちの質問というのは、例えば米づくりのどこが大変なんですかとか、あるいはこの道具をどうやって使って、どういうところがどのように工夫されているんですかとか、かなり具体的な話になってきます。そうしたときに、確かに知識として説明はできるのですが、やはり実感が伴わない、説得力がないというところが、実はずっと気になっておりました。

そして、いろいろ考えた末、ああ何だ、自分でやっちゃえばいいんだと思ったんです。米づくりも自分でやればいいんだ。漁も自分でやればいいんだ。そうすればいいんだろうということで、6年前から地曳網というのを始めました。3年前からは米づくりを始めました。それも機械のない時代の作業を初めからやりました。3年目になって初めて機械化に取り組みました。そうすると、機械化された時の喜びというのはものすごい喜びでした。機械化以前の田んぼの作り方と、機械化にしたからの田んぼの作り方というのも違うんですね。そういう話ができるようになってきました。

また、行事を取材に行って、二十数年も同じところにいますので、同じ行事を二十数年見ているわけですね。例えば大磯に白岩神社の流鏑馬という、歩いて矢を射るお祭りがあるのですが、これは執行者というのは社人といいまして、決められた家なんですね。その家の方や親戚縁者などが亡くなったりすると「ヒがかかる」といって行事には出られない。そうすると、急遽、代理人を出すのですが、代理人はやったことがないわけですから全く手順が分からないんですね。ところが、同じ行事を20年も見ていると、違うよ、次はこれをするんだよなどと言いたくなってしまう。しかし、たまにそのような状況になったときに、例えば地元の人、あるいは役員の人から「これはどうしたらいいんだ」というようなアドバイスを求められることもあります。そういうことが随分度重なってきました。しかし、一方では博物館学芸員としての立場がありますので、地域や伝承との関わり方に常々悩んでいました。

このように、地域から伝承者としての役割を求められる場合もあるわけです。もちろん、執行者の中には、あくまでも他所者であり、傍観者であるべきだという気持ちを持っている人もあると思いますが、時と場合によって対応できるようなスタンスであっていいと思うんです。私は北村さんが役場に入りながら実際に行事の継承に携わっておられるというのを、非常にうらやましく思っていて聞いておりました。ただ、そこで私の場合は1つだけ気をつけなければいけないということ、要するに心構えというものがあります。こういうことを言っているのかどうか分かりませんが、かつて民俗行事の調査に行ったとき、ある話者がとくとくとその行事の由来や意味をお話しされるわけです。あ、そういう伝承があるんだなと思って聞いていると、実はかつてとても有名な民俗芸能の研究者が調査に来られていて、その時にお話をされたことが、その行事の伝承として伝わってしまっている。これはちょっと本末転倒だなと思いました。ですから実際に私たちが伝承者として役割を負ってもいいけれども、余計なところに入り込まない、余計なことを言わない、余計なことまではやってはいけないという信条をもってやっています。

もう1つ、橋本先生のお話で中間的なネットワークの必要性についておっしゃいました。私は今、伝承者として参加する立場と、それからそこで踏み止まった傍観者と言いますか、あくまでも博物館の職員としての立場という2つの立場を意識して、それを地元の求めに応じながら使い分けようと思っています。ただそれは非常に難しく、どうしたらいいのか分かっていない。要するに橋本先生が言われた、話が途中でとまっているというのは実はそのことなのだと思います。先生の指摘された中間的なネットワークというものを見つけていかないと、これから先は身動きが取れないのかなと、そんな感じがしました。

コーディネーター それでは北村さん、お願いいたします。

北村 ちょっと宣伝をさせていただきたいのですが、3年ほど前に、地芝居をテーマにした劇映画を地元の監督が作りました。タイトルが『Beauty うつくしいもの』という劇映画を作りました。モデルは大鹿歌舞伎のような地芝居の伝承に携わっている主人公の半生を描いたものなのですが、片岡孝太郎丈と片岡愛之助丈が主役になっておるものなのですが、昨年、東京国際映画祭に出したのですが、これで賞をとれるかと思ったのですが、ちょっと外れてしましまして、今年の初めにモスクワ映画祭に招待されて持っていったのですが、そこでもちょっと賞はとれなくて、今、静かに地域のほうで小さな上映会を開いております。おそらく地芝居をテーマにした劇映画というのは初めての試みだと思いますので、見てみたい

という方は連絡いただければご相談に乗りますので、よろしくお願ひしたいと思います。

また、早稲田の学生で卒論を書きに来ていた女性がNHKの脚本のコンクールに応募したところが、それが見事最優秀になりまして、ご褒美として昨年ドラマ化されまして、なんとゴールデンの時間帯に45分間の番組になりまして、それが『おしゃしゃのシャン!』という、やはり大鹿歌舞伎を取材したドラマだったのですが、またそういう裏話をつづった大鹿歌舞伎の本、『大鹿歌舞伎の里』と仮題をつけておりますけれども、その本を今制作中であります。それを見ると、映画の裏話とか、あるいはそのドラマの裏話とか、その本を見れば大鹿歌舞伎のたいていのことが分かるというような内容にするべく、今努力をしております。

先ほど言い漏らしましたが、子ども歌舞伎ということをやった1つのヒントになったのは、もう亡くなられてしまったのですが、実はお父さんが大鹿村出身の方で、松川八洲雄さんという記録映画の巨匠の監督さんがおりまして、その松川監督がつくった映画に、長浜の曳山子ども歌舞伎を扱った映画がございます。その映画の中に、ナレーターの方に言わせているんですけど、長浜の町衆の知恵というのは、子どもを主人公にしたというのが最高の成功であったというような内容のことを、その映画の中で訴えておりました。今日はちょうどその長浜市の小池さんという方も見えておりまして、その小池さんも実は長浜の義太夫の三味線をやっておられるということで、先ほどお話をさせていただいたんですけど、明年の全国芝居サミットは長浜市が当番の年になりますので、また皆さんお出かけいただければと思います。以上でございます。

コーディネーター はい、ありがとうございます。それでは松本さん、お願いします。

松本 盛岡大学の橋本先生のお話にも私も大変意を強くしたわけですが、先ほど伝統文化こども教室の分野別のそれぞれの年次別の表をお配りしまして、一番多いのはお花であり、次はお茶とか、それから囲碁・将棋、そういう誰でも知っているような分野が大変多かったのですが、実はここ最近、そういうもの以外にいわゆるお手玉であるとか、極端な例で言いますと筑波山のガマの油売りとか、それから山形のほうから先ほどご説明ありましたが、そば打ち体験とか、そういうものもこども教室の中の事業種として挙がってきております。

それで、以前に文化庁長官をなさってもう亡くなりましたけれど、河合隼雄先生が、私どもが主催しておりましたふるさと文化再興事業のフォーラムの中で講演をさせていただいたのですが、そのときに、伝統文化とはここに出席する皆さんそれぞれがお持ちである、それが伝統文化だというふうにおっしゃいました。それから、私どもの理事をしていただいております歴博の名誉教授の小島美子先生が、よく子どもたちがごはんを食べるときに「いただきます」とこう言いますが、その「いただきます」という心そのものが伝統文化の1つであるというようなこともよく言われます。先ほど橋本先生がご指摘の通り、やはり日本人の心の魂に触れるようなもの、それそのものが伝統文化だというふうに私どもは思っておりまして、もし来年こども教室が続くとすれば、そういう観点からもどんどん計画して申請していただければと思います。

これに関連しますが、先ほど私の説明に対して、ここにご出席の方々も大変危機感を抱いていただいて、質問も4問ばかりいただきました。文部科学省のホームページを開いていただきますと、アドレスが掲示されておりますので、再度、良きにつけ悪きにつけ、賛否も含めて意見を投稿していただければと思います。よろしくお願ひします。

コーディネーター はい、ありがとうございます。それでは金先生お願いします。

金 私は2つほど、コメンテーターの先生方のお話を聞きながら思ったことがあるのですが、1つはやはりネットワークづくりということで、自分の発表の冒頭にも言ったのですが、学校が地域とちょっと分断されているのではないかなと。これはうちの学校だけでなく、いろんな学校もそのように見えるわけです。本当に思うのは、学校の喜びが地域の喜びになっているかというようなこと。あるいは地域の喜びが学校の喜びになっているかというのが、最近薄くなっているのではないかなというのを感じます。

というのは、やはりつながりと言いましょか、地域と学校をつながり、地域と子どものつながりというのがちょっと薄くなっている。もしかすると孤立化しているのではないかなというのを感じます。できればそういうネットワークというか、それを進められるのは公民館であったりするのではないかなと思っていますので、例えば町内会とか公民館とか、そういったものとのつながり、ネットワークを強くしたいなと思っています。

それを考えて、うちの学校では、学校の行事を地域の行事にしようということで、いろんな取り組みをしております。例えば発表の中にも書きましたが、運動会。学校単独でやっていた運動会を地域の運動会と一緒にするということ。あるいは新そば祭り。そば祭りをやるのですが、それを学校行事だけではなくて、地域の方々を呼んで、地域の行事にするんだというような動きで今取り組んでいるところです。

もう1つは、橋本先生のほうから、日常ありきたりの文化を大切にすることが、今大事なのではないかと話があって、私も大賛成なんですけど、今、民俗芸能というよりも、地域の文化というか、もっと言うと、家族、家の文化が危ないのではないかなと思います。年中行事、昔はよくやられていた七夕なんてのは、今やられている家はどのくらいあるだろうか。例えば雛祭りにしても、そういった民俗芸能と言うともう大きいものにとらえがちなんですけれども、そういう一人ひとりの各家庭の文化というか、それすらも危ういんじゃないかなと思っていますので、橋本先生のお話、それから私の後に発表されました小谷先生の餅と団子のそういう行事というのは、本当に大事にしていかなければいけないのではないかなというのを感じました。年中行事を、今は学校でやらなきゃ子どもが理解できないという時代まで来ていますので、そういうありきたりの文化を大事にしていかなければいけないなと思ったわけです。

学校 VS 民俗文化という話もありましたが、これは学校にも地域の団体にもおそらく問題があるのではなくて、もしかすると、私は行政のほうで、昔は学校教育課、社会教育課、今は生涯学習課になっていますでしょうか、やはり縦割り行政で行革が進んで、うちの地域では一緒にの部屋にはいるんですけども、学校教育課が生涯学習課で何をやっているか分からない。生涯学習課が学校教育課で今何をやっているかが分からないんですね、同じ部屋にしながら。私はそういうのを取り払って、子どものためにどっちがやってもいいのではないかとっています。行政側もそういう枠は考えていませんよと言っているんですが、公民館側が学校側に気をつかっているような気がしてならないんです。学校という聖域を犯してはいけないというか、今でさえ忙しいんだから、プラスアルファの土・日の行事とか、学校から帰ってからの行事というのは頼めないというような気持ちが伝わってくるんですが、そういったことを言っている場合ではないよと、私は公民館の人には言っています。すみません、付け足しで3つほどになってしまいました。以上です。

コーディネーター ありがとうございます。今の公民館の人が学校に気を使っているという話は、私ちょっとドキッとしまして、文化庁にいるときに文部科学省に気を使っていた構図と同じなのだなというふうに聞いておりました。では最後に小谷さん、一言お願いします。

小谷 何を話そうかと考えていたのですけれども、最後の金先生のまんまになってしまいますが、私もこの事業をやっている小学校が実はもう1か所、宮城県教育庁生涯学習課というところから何とか事業という金をもらっていたらしくて、そうしたら県の博物館から、こういう事業で文化庁の金を使ってやりますということが教育事務所経由で上がったらしくて、先方に事業の説明をして戻ってきたら、その10分後ぐらいに宮城県教育庁生涯学習課の何とかですという電話がかかってきて、うちの事業とバッティングしませんよねっていう脅しがかかったんです。それで、いいじゃんとかっちは思っていたんですけれども、どうもそれは、いま本庁に上がってみると、文化財保護課と生涯学習課は違うというのを大変実感しておるので、こういう組織上の縦割りを何とかせにゃいかなというふうに思っております。

それは半分枕というか、両先生のコメントをいただいた中で一番感銘を受けたのが、まさに橋本先生のネットワークづくり。ネットワークづくりはまさに今言った何とか課何とか課の話、公民館等々と密接に絡んでくると思うのですけれども、あまたいろんな組織があつて、かつ県の組織もあれば市町村の組織もある。そのへんがお互いによく分からない。その中でどうネットワークをつくっていくのかというのが、やはりこの事業をやっていて真剣に考えていくべきであろうなと思ったのが1つであります。もう1つは、まさに気を使うというのが、途中からものすごく負担にもなったんです。というのはやはり学校とやっていくときに、こっちがこうしてほしい、こういうふうにやるといいよなと思うのと、当然学校の先生が小学校4年生の教育としてこうやりたいというところがあるわけです。このへんが初めの年はお互いに遠慮して、都合2年間、遠藤先生という先生と一緒にやったのですけれども、初めの年はお互いにかかなり気を使いながら、向こうは向こうで何かやはり博物館にせつかく事業をやってもらうんだからというようなのがあったらしくて、2年間やって、ようやく何かお互いに自分たちはこの部分はメリットになる、ここの部分はちょっとうちとしてはよくない、ここの部分はいまいちだけでも付き合いますとかというのが率直に言えるようになってきて、これが結構いろんな事業をやっていく上では意味がありました。それは多分、公民館などとネットワークをつくる、地域の社会でも同じだと思います。私が図式に示したようなあれも一応ネットワークにしてありますけれども、そういう図式の問題とは別に、お互いの組織の性格をうまくつかんでいくというのはとても重要なのかなというのをしみじみ思いました。

それから、やはりそこにつながるのは、伊野先生からあつた、子どもを使うという発想以外のこと、これは橋本先生の民俗 VS 学校という話もつながるんだと思うんですけれども、そのへんの解決法の1つが、お互いにこれはメリットになるし、こういう活動は博物館としてはしてほしい、学校としてはこうしたいという、そのフランクなやり取りというのができるようになると、次のステップに行けるのかなというのをしみじみと感じました。多分、博物館も教育施設と言ってしまうえばそうですけれども、学校教育施設ではないわけなので、橋本先生がおっしゃった通りで、求めているものが違う。民俗の芸能団体、保存会等々とも当然違うという意味で言えば、やはりそれをお互いに尊重し、お互いが譲るのではなくて、両方ともがよかったねと言えるような関係をつくっていくというのは、やはり次のステップとしては求められるかな。

いずれその前に、まず体験してもらい、お試しをしてもらおうというのはもっと必要かなと思っていますので、まずはやってみる。やってみてから、次にお互いの利益を主張し合える関係をつくるというのが、私が何かここ2、3年間事業をやってみての感想で、かつこのお話につながるかなというふうに思いました。以上です。

コーディネーター はい、ありがとうございました。今年もフロアからたくさん質問をいただいております。非常に個別具体的な質問から、すごく大枠に関わるような、それだけで1日議論できるような質問までいただいておりますけれども、できる限り取り上げながら、その中でまた議論が発展できるかなと思います。

まず、比較的個別具体的な質問から行きたいと思います。発表順で、まず佐川さんへのご質問。埼玉県教育局の生涯学習文化財課の内田さんからですが、「西小磯東では、女の子を参加させるべきだ」という声はないのでしょうか。学芸員として行事の意味を伝えることが必要とのことでしたが、男子のみが行事を担ってきたことについてはどのようにお話をされているのですか」というご質問です。

佐川 はい。西小磯東地区では、執行者が主体的に従来のままで行こうというような話し合いを一応持っています。同じ西小磯でありながら西小磯西では女の子が参加しているということも情報としては当然入ってきます。今、伝統行事と言われているものでは、女の子の存在はものすごく大きいんですね。多分どこの市町村でも経験があると思うのですが、例えばお祭りの囃子などは、男子よりも女の子のほうが非常に熱心で、覚えもいいのでしょうか、とにかく女の子がいないと成り立たないということを耳にします。西小磯でも、ほかに子どもたちが関わっているお囃子ですとか、そういうものはむしろ女の子のほうが多いのが現状です。しかし、基本的に西小磯東の七夕というのは、まず執行者自らが従来の方向で行こうということで、それに我々としてもその意向を尊重して支援をしているということです。例えば、広報などで行事の告知をする場合などには、そのあたりの理由はつけます。かつては子ども連という男の子だけの行事であった。逆に女の子は別の役割があって、例えば盆釜とか盆踊りは女の子が役を果たしていたように、はっきりとした役割分担があつたんだよということを明文化して理解を得ています。そういうところぐらいの支援しかできていないのですけれど。

コーディネーター はい、ありがとうございます。今のご回答でよろしいでしょうか。それでは次に北村さんへの、これも個別の質問を先に。京都市の福持さんからのご質問ですが、「昭和50年発足の中学校のクラブを卒業した人たちの、後継者としてのその後について教えていただきたいと思います」というご質問です。その後というのはちょっと漠然としているかもしれませんが、先ほど、一部村に戻って現在の保存会の担い手であるというようなお話はあったと思うのですけれども。

北村 昭和50年からと言いますと、大体延べ人数で歌舞伎クラブに関わった生徒たちというのは200人以上になるわけです。なので、その彼らが200人とは言わなくとも、その3分の1でもいいので、村に帰ってきて歌舞伎に携わるようなことがあれば、大鹿歌舞伎の未来は非常に左うちわで万々歳なんですけれど、なかなか現実是这样いわけにはいかなくて、村にはそれほど職場がないということもあつたり、いろんな事情がありまして、中学を卒業して高校

を出て、進学あるいは就職をすると、もう村には帰ってこないという、ずっとそういう状態が続いております。その中でも奇跡的に、今5、6人のメンバーが帰ってきておりまして、今、次世代の歌舞伎を担う役者として舞台に立っているわけなんですけれど、非常に歩留まりは悪いというのが正直なところでございます。

コーディネーター 今、歩留まりが悪いとおっしゃいましたけれども、中学校のクラブで200人で5、6人が帰ったら、かなり私は歩留まりがかなりいいほうではないかなと。種を蒔く事業としてそれだけのリターンがあったということは相当ご謙遜だというふうに私は思いました。すいません。コメンテーターではなくて、コーディネーターが勝手な意見を申しました。

それともう1つ、先ほどの埼玉県の内田さんから、ちょっとこれは北村さんに厳しいというか、答えにくいご質問かもしれませんが、ちょっと長いので全体を少しまとめますと、大鹿村は大鹿歌舞伎に一点集中しているのではないかと。つまり、地域のほかの無形民俗に対する力を大鹿歌舞伎に集中してしまっていて、ほかの民俗がその犠牲に、というのはちょっと言葉がきついですけれど、ほかの民俗に対する手当てというのか、ほかの民俗はどういう状況なのだという事のご質問です。

北村 確かに鋭いご質問で、そういう指摘はごもっともでございまして、大鹿歌舞伎以外の民俗芸能というのは実はいくつもありまして、獅子舞等、この飯田下伊那地域以外にない珍しい獅子舞が残っていたりします。確かに大鹿歌舞伎一点集中というのは正直なところでございます。ではほかの芸能はどうするかということなんですけれど、今後の課題ということにしたいと思っておりますのでよろしくお願いいたします。

コーディネーター これも議論を始めてしまうと尽きないところだと思いますので、現状の正直なところをご回答いただいたのだと思います。

それから、次は国民協会の松本さんへのご質問というか、こども教室に関するコメントも含めて、いくつかいただいております。質問的なところで答えやすいところを先にお伺いしようと思いますが、やはり京都市の福持さんから、これもかなり京都の伝承の状況を詳しく述べられていて、そこに触れるとちょっと長くなるので、質問をまとめさせていただきます。「例えば京都のある六斎念仏の保存会では小学校のクラブ活動を指導していますが、その小学生たちは中学校に上がって半分開らいの人が保存会の一員として活動を担っています。子どもの関わり方を見つめ直すと、大人がどのような立場でいるのか、大人と子どもの役割の違いを考えさせられます。そこで、伝統文化こども教室の報告をされた松本さんに質問ですが、こども教室の事業では一過性の体験を地域の伝統文化の即戦力の養成、あるいは1、2世代先への伝承とは採択時の選考等でどのようにウエイト配分をされているのかをお伺いしたいと思います」。ちょっと難しいですけれども、実際にその地域の伝統文化の即戦力になるような事業、それから1世代、2世代先への伝承というのに、採択時にそういうのを選考の基準として考慮の対象になっているのか、というようなご質問の趣旨だと私は理解しましたが、福持さんそれでよろしいですか。お願いいたします。

松本 ただ今のご質問に対してですが、ご承知かと思いますが、5,300件ばかりの申請に対して、学識経験者からなる選考委員会を設けておりまして、そこで大所高所からいろんな角度か

ら選考していただくわけですが、今のご質問にあるような、長期的な視点かあるいは短期的な視点か、あるいは即戦力としてなのかという視点は、はっきり言って設けられておりません。とにかく子どもたちに、日本の伝統文化の一端を子どものうちに体験習得してもらうことは、将来大人になっても、子どものときにああいうことをやったな、習ったなということは、何かの折りに思い出されるであろうと、種を蒔こうというふうな感じですね。文化庁の政策の基本的な考え方、哲学がそういうことでございますので、選考委員会においてはそこまで仕分けして選考はしておりません。それが現実でございます。よろしいですか。

コーディネーター この伝統文化こども教室は私も半分当事者みたいなところがありまして、幸いにして選考委員のハードワークはやらなくて済んでいるんですけど、協議会等でやはり今のようなご質問、特に研究協議会で集まった芸能関係の保存会を主体にしたところでは、どうしてもやはり即戦力につながってほしいという気持ちがあるのは事実です。ただそのとき、今松本さんがおっしゃったように、常にそう短絡的に考えないで長い目で種を蒔く事業であると考えてくださいと言いつけてきたのですが、ここに及んで長い事業の先が断ち切られてしまうというところで、この事業の存続云々ということで、いくつかやはりご質問をいただいております。

1人のご希望で匿名ということなので、あえてお名前を申し上げませんが、これも非常に長い質問なんですけれども、1つは事業仕分けで下された評価というのをもしご存じであれば、新聞レベルでは国がやる必要はないということぐらいしか我々に情報は伝わっていないので、もう少し、評価に関して松本さんが今の段階で話せることがあれば教えていただきたいというのが1つ。

それから、今回集まってくださっているこの中の人と、それからそうではない一般の人との間にはすごく温度差があるだろうと。こういう状況の中で、定性的評価や効果があるという情緒的な意見だけでは、なかなか現政権での賛同は得られないかもしれない。ただ、実際に数値的評価、短期的評価というのはなかなか為しにくいので、これはご質問というより、解決の糸口が何かないかなと、誰かそういうアイデアがあれば教えていただきたいと。これは私も教えていただきたい部分なんですけれども、その事業仕分けについての中身というのは、今現段階で少し公表できる部分があるんでしょうか。

松本 はい、それは先ほどの私どもの説明に尽きるのですが、あそこでの結果というのは、国の事業としては行わないという結論が下された。ということは、国の事業ではないということになりますと、地方公共団体がやっていただくか、あるいは民間の団体がやっていただくしかないわけなのです。地方公共団体はそういうことができる財政的な体力があるかということで、それは昨今のこういう経済情勢ではございませんですね。ましてや民間でということになりますと、今年間20億ぐらいの予算をかけてやっていますので、それも難しいだろう。ということは、即、来年度は廃止と、こういうことに向かうことになりかねないですね。それで、あれはあくまでも行政刷新会議のワーキンググループの仕分け作業の結果でありまして、あれを受けて、今度、文部科学省あるいは文化庁が財務省と来年度の予算の編成に向けての折衝が始まって、それで最終的に12月20日ごろに政府予算案が決まる、そこが勝負だと、こういうことになっておりまして。文部科学省としては、こういう時代に対して、こども教室だけではありません、ほかにもいっぱい青少年教育施設の宿泊施設とかいろいろありましたから、そう

いうことについて世間一般の国民の声を聞きたいということで、今メールアドレスを公開して一般の声を集めているんです。昨日の朝日新聞でしたか、1,500 通ぐらいもうすでにメールで回答が寄せられているようでございますので、そういう一般国民の声を聴いて、なおかつその上に、今度は政治判断が下されると、こういうことでございますので、それ以上のことは私は存じませんが、多分、そういう方向で今進んでいると言って間違いはないというように思います。それでよろしいでしょうか。

コーディネーター この問題は非常に私も悩ましいところで、解決の糸口というのを、ほかの先生方で何かちょっとでもヒントになるようなことで、今ないでしょうか。ないでしょうかと言っても厳しいでしょうね。

1 つは、ああいった全体の無駄削減という俎上に、これは財務省ベースだと思うのですが、この事業が挙げたこと自体が厳しいかなと思うんですね。それはずっと文化庁と財務省のやり取りがここ数年続いていて、削減・廃止という方向に文化庁がずっと抵抗していたという背景があります。ただ、おそらくかかる 20 億というお金と、それから長期的な効果を考えたら、こんな費用対効果の大きい事業はないだろうと思うのですが、それを私は経済学者ではないので証明できないのが非常にもどかしいと思います。あ、またコーディネーターが勝手に意見を申してしまいました。すみません。

それからこども教室に関しては、ほかにも、国がこういう幅広く指定・無指定を問わずに広く支援を行ってきた伝統文化こども教室は、やはり国が行うべき事業だと考えますがいかがでしょうかというご意見を、先ほどの埼玉県の内田さんからもいただいております。これをご質問というより、そうではないんだという意見の方がもしいらっしゃれば、ここで議論してもいいのですが、これに関してはもう少し我々も、先ほど言いましたように、意見をやはり積極的に出さないと、ただ困った困ったでは困るので、意見の集約というのを少しでも無力ながらやっていきたいというふうに思います。

質問事項に少し戻ります。これは、熊谷市教育委員会の山下さんからのご質問で、佐川さん、北村さん、小谷さん、お三方、お三方だけではないのかもしれませんが、全体に関してですが、無形民俗文化財および伝統芸能の保護や普及、研究、調査と子どもの関わりを考える際に、文化財行政だけでは対応できない側面が出てくると思われるが、他の部局、部や課との協調関係をどのように築いていくのか。先ほど、生涯学習と学校教育云々というそういうことがありましたけれど、そういう協調関係を、特にこれはお三方になっていますけれど、先ほどの金先生なんかもこれに絡んでくると思います。むしろ北村さんは協調関係はもう出来ちゃっているということなのかもしれませんけれど。では、佐川さんから簡単にどうでしょうか。

佐川 基本的に学校教育とも、もちろん関わりはありますが、我々行政の中では、観光との関わりというのは非常に大きなものになってきます。やはり文化財と観光は表裏の関係があります。ただ、その行事によって観光として成り立つかとか、耐えられるかという部分もあります。例えばこの七夕の場合は、行事としては子ども中心ですが非常に地味で、要するに観光として耐えられるような行事ではありません。ですから、そのへんを例えば観光とタイアップしても、どこまでどう PR していったらいいのか判断が難しいところです。私の立場としては、要するに当事者にとってそういう行事を外にアピールすることで、価値が認められ、自分たちがやりやすく、そしてやりがいを感じるという効果だけでもいいのかなという感じは

するんですけど。ただ、観光が入ってきますとやはり人を集めるという趣旨が出てきますので、そのへんをどう考えていくのか。観光と文化財はいつもいろいろな問題をはらんでいますので、そのあたりの難しさはあります。むしろ、我々のところでは学校との関わりはうまくいっていないわけではないので、例えば中学校で正月の左義長の行事に中学校 1 年生が総合学習の中で全員手伝いに行くというようなこともやっていますし、そういう手伝いも我々はしています。むしろ役所の中で言えば、観光との関わりをどういうふうにもううまく持っていくかというところに課題があるんだろうと思っています。

コーディネーター はい。ありがとうございます。北村さんのところは特に問題がないでよろしいんでしょうかね。よろしいですか。先ほどもご発表の質疑の中でそういうコメントがあったと思いますので。それでは金先生も一言、これに関しては。

金 先ほどの松本先生のところでちょっと感じたことがあるのですが、国としてということで、私は行政主導で何かやっているというのは行政が抜けたときに何も残らなくなってしまう。その危機感があるので、国が全面的にバックアップする形でもいいんですが、今こういった時期に、やはり地域というか学校がもう 1 回考え直さなければいけない時期なのではないかなと。行政で何もやらないからというのであれば、おそらく根強いものにはならないだろうなと思いますので、そういったときに、昔はよく学校の校長というのはその地域の有識者であって、識見者であって、ちょっと口はばった言い方ですが、一目を置かれる人だったのではないかなと思うのです。自分で言うのも何ですが、今なかなかそういう見方をされないものですから。ですからこういったときに、例えば地域の伝統文化というか民俗芸能が危ういときに、学校の校長自らとか、もうちょっと働きかけが必要なのではないかなと。その行政主導もいいですけども、地域に根ざした学校であるならば、あらねばならないと思うんですが、学校の存在意義というか、学校の使命という 1 つに、地域を元気にするというか、そういう狙いがあると思うので、やはりその長となっている校長、あるいは校長がそのネットワークをつくれる範囲で何か下からの動きも必要なのではないかなというのを感じました。

コーディネーター はい。小谷さんいかがですか。その協調関係ということで。

小谷 私はさっき協調関係がないよという話をしましたので。基本的には必要であると。ではどうしようかという話なんですけれど、私は博物館採用の人間なので、この 10 年間ずっと博物館にいて、そういう存在があるというのをこの事業を通して、だからここ 2、3 年で初めて気がついた。学校とおつきあいをし、それから公民館とおつきあいをし、生涯学習課から脅されて初めてそれを分かったという状況の中で、今県庁のほうにいるという立場であるわけです。なので、それが大きい問題だなということで、どのへんが今、そのスイッチなんだろうかというのは真面目に考えているところです。これはもう純粹に行政の技術的な話なのかなとはちょっと思っていて、なかなかどう答えるかというのは難しいのですが。いろんなセクションがあって、文化財の視点から入っていくしかないというか、現行ではそういう立場なんですけれども、それに限らず、どう横をつくっていくのかというのは、現行では基本的に個人的なつながりしかない中で、かつ新しい事業をつくるなんていうのも無理な経済情勢、経済という役所の予算の状況の中で考えれば、ちょっとどう手筈をつくろうかというのは、私の仕事と

して真面目に今考えているところですよという答えにならない答えで許していただければと思います。

コーディネーター はい、時間も迫ってまいりましたので、あとこれは金先生への直接的な質問がいくつか来ています。簡単にというか、具体的なほうから2つ先に読み上げます。野田市の大熊さんからのご質問で、「公民館主事が民俗芸能のご担当とのことですが、実際主事の方はどのようなことをされていたのでしょうか」というのが1番目。それからもう1つは、仙台市の伊藤さんからのご質問で、「芸能指導者はどのように時間的に確保したのでしょうか。お勤めの方もいるのでしょうか。そして、謝礼等はどうかされましたか」というご質問です。まず、この2点について。

金 詳しいところまでは分かりません。おそらく、いろんな保存会があるんですが、そちらの保存会との連携なんではないでしょうか、よく分かりません。

橋本 すみません、知っていることがあるのですけれど。

金 橋本先生はうちの学校に何回か来ていますので。

橋本 私はちょっとびっくりしてしまって、ほかのところだったら何か違うでしょうというふうな感じのことを、この地域の公民館の人はしているような気がします。例えば、夏にやっている鳥海獅子まつりとかの企画運営は公民館主事がやっているんですよね。それってどうなんですかね、一般的ですかね。多分、鳥海あたりには番楽がたくさんあって、地域社会の中に本当にたくさんあるものですから、さっきのスライドにも出ていましたけれど、松田訓先生という元鳥海町教育長たちがつくり上げてきた鳥海独特のシステムなのかなと思うんですね。第2回民俗芸能研究協議会のときに、確か本海獅子舞伝承者懇話会事務局の高橋建さんがお話しなさっていたのではないかなと思うのですけれど、番楽の振興をしていくための地域的なネットワークの拠点として、公民館を無理矢理位置づけちゃうようなことをしていて、それはかなり鳥海モデルみたいな感じなのかなと。だからおそらく、今日金先生が公民館の役割とおっしゃっているときに、一般論としては分かりますけれど、今みたいな質問が当然出てくると思うんです。公民館ってそんなことするのか、という感じですが。例えば、獅子舞倶楽部とかをつかっていったりとか、民俗音楽学者に頼んで作曲をしてもらったりとか、そういうことの窓口をやっているのも全部公民館の主事ですね。だからその方は民俗芸能に関して専門的な知識も持たざるを得ないという感じだと私は理解しています。

金 それから、指導者への謝礼のあり方とかありましたが。謝礼はですね、学校の一般予算の中に年間謝金を払える額が若干あるんですね。その中でお願いしていますので、ほとんどボランティアという形です。それから、働いている人もいるでしょうにということですが、幸いに3つのクラブがあるんですが、2つのクラブはもうご退職されて体の自由がきく方ですので、個人的にお願いすればよかったのですが、もう1人の場合は市役所に勤務でした。そのときには、私は、市役所の福祉保健課で働いている人なので、福祉保健課の課長さんに会いに行って頭を下げて、地域を守るために月1ないし2回ですが、何とかお願いすると菓子箱を持ってお

願いに上がりました。そのお菓子が効いたわけではないと思うんですが、まず分かりましたと言ってもらえるまで足を運んだということもあって、その課の課長さんが認めてくれたので来やすいと言ってもらっております。ということです。

コーディネーター ありがとうございます。次も金先生なんですが、これは具体的というよりどういうふうにお考えですかというご質問なんですが。実践女子大学の中村先生から、学校教育の子ども何々、子ども獅子舞とかですね、その指導と講などの伝承団体との関係をどのようにお考えですか、というご質問です。

金 確かに「子ども」というのがついている関係で、どこかの保存会と直結しているわけではないんですね。ただ、私は本物のというか、郷土芸能を子どもたちに見せたい、どうしても関心を持たせたいと思っていますので、例えば新そば祭りとか学校行事があるときに、それともう1つ、祖父母交流会というのもつくったのですが、祖父母、おじいちゃんやおばあちゃんを呼んで交流する。その中に、おじいちゃんおばあちゃんが喜ぶのはやはり伝統文化だということで、本物の伝統文化を呼んで、おじいちゃんおばあちゃんも喜ぶし、子どもにもその本物を見せたい。ですから、何かあるたびに、地元の人を呼ぶという1つのきっかけに、地域の伝統文化がある。私は地域と学校の接点ってそこだろうなとしか考えていないのです。ですから、もう4年もいるからということもあるかもしれませんが、私はいろんな方と面識ができて、何でも言える、お酒飲みの回数も多いのですが、そういった会を重ねて築き上げているものがあるんだろうなとは思っています。そういう接点は大事にしています。

コーディネーター はい、ありがとうございます。あと、金先生に2つなんですが、これはちょっと総合してまとめて答えてもいいのかなと思いますが、ご質問は統廃合の話が出ていました。鳥取県原島さんと和歌山県蘇理さんからのご質問ですが、統廃合ということがありましたので、それでちょっとまとめさせていただくと、1つは3年後の統廃合の後、伝統文化をまた取り入れるとして、教師にはどのような心構えが必要か。それから、統廃合の進捗中で、校区内のどの伝統文化を選択して取り入れるかが大きな問題だと思いますが、今後の展望などをお聞かせいただければということで、これはまとめてお答えいただけるかなと思いますが。

金 はい。3年後には統廃合になってなくなるんですね。ですから私は、私の前の発表の松本さんの伝統文化こども教室があればいいなとは思っていますが、そこまで待てるかどうか分かりませんが。学校がなくなっても、その地域を守るといえるのか、地域を元気にする母体が欲しいなと思っています。私の「地域の学校」構想というのはそれなんで、学校がなくなっても、地域のことを語れる、行政主導ではなく地元の人たちが集まる機会がないんですね、行政側が何とか会議、町内会をやりますから集まってくださいと言うと町内会長は集まりますが、町内会長さんはやりたくてなっているわけでもなくて、やらざるを得なくて輪番制で回っていたりということがあるものですから、それではそういうものがなくなった時点で衰退していくだろうから、行政とは別に、何回も言いますが、下のほうから、根っここのほうから沸き上がってつくっていく、そして学校がなくなっても地域を守る母体は残るといふふうに、今進めているところなんです。

コーディネーター ありがとうございます。それでは、最後是小谷さんへのご質問がまた何件か来ています。わりと具体的なほうから行きますと、群馬県立歴史博物館の神宮さんからのご質問で、単なる出前授業ではなく、調査を取り入れた活動実施は大変だと思われます。学校による反応、温度差などはいかがですかというご質問がまず1点。それから藤沢市の教育委員会の徳重さんですが、学校と連携しようとしても、授業の時間がとれない、先生方自身の興味が無いなどによりうまくいきません。何かアプローチ方法、アピール方法、先生方にとってやってみたいと思うようなものはありますでしょうか、という、まずこの2点についていかがでしょうか。

小谷 はい、同じような答えになるかなと思うんですけど、真面目な話、もうその通りです。学校の温度差もあれば、先生の温度差もあります。それでこの事業というか、博物館と何かやるというのがそもそもなんですけれども、民俗に限らずですね。基本的には先生次第のところがあります。それからあと、校長先生次第という一面も。金先生の隣で言うのもなんですけれども。もっと真面目な話で、私の異動が決まる前の段階で、多賀城の城南小に関しては、校長先生がその年異動の予定がありましたので、来年度はなしにしてくれというのはもう言われていた。つまり、翌年の校長先生を縛るような、カリキュラムをいじるような事業を残していくことは私の責任ではできないということのようだったんですね。だから非常に不安定な状況でやっているというのは間違いがないのかなと思います。

その中で私としては、この事業はもう少し長くやりたいなと思っていて、基本的に種まきなんだろうなと思ったんです。つまり、東北歴史博物館、もしくは県の博物館でもいいですし何でもいいんですけど、私に関して言えば、県の博物館ではどうもこういう学校とある程度長期スパンでやるような事業をやっているんだというウワサを、県内の小中学校、中学校も考えていたんですけど、まず小学校に広げていきたい。広げることによって、私の個人的なルートではないような学校の先生からのアプローチが生まれてくるだろうし、それでやっているとある程度事業として安定していくだろう。いずれもうこれは学校の各先生の地域文化に対する考え方もあると思いますし、興味の問題もあると思います。そこは啓発をしていくというか、こういうのも必要なんですということを言っていく必要はまた別にあるとして、実際に事業ができるかどうかというのはその問題があるかなというふうに思っていますし、地道な活動が必要かなというふうに思っています。ひとまずの回答はそこでよろしいでしょうか。

コーディネーター はい、ありがとうございます。もう1つ、これは福井県教育庁文化課の宮永さんですか、小学生と実施した民俗調査の成果として、当該地域で餅食が盛んとなった理由、要素と思われるような事例があったらご教示くださいと。これは調査の上がってきた成果に関する直接的なご質問だと思いますが。

小谷 理由は正直、よく分からんと言えないんですけど。宮城は、純粋な解釈の問題ですけど、近在に比べると麺食が少ないというのがあって、私は個人的に、主食になるようなものの中で一番保存性が高いのは干した餅というか、餅であるということだと思っています。だから長期の保存ではないですけども、さっと、ご飯を炊くよりも素早くできるものとして餅というのが選択されているのではないのかなというふうな解釈を持っています。それで、単に食べるのに餅だけではつまらないので、いろいろと味付けができたのではないかなというの

が今の解釈ですけれども、本当の空想のまだその先くらいにあるようなレベルですので、ちょっと聞き流してもらえればというふうに思います。

コーディネーター はい、ありがとうございます。次は、これはご質問というかご意見なんです。東村山ふるさと歴史館の久保田さんからです。少し長いのではしよりますけれども、「私も学芸員として郷土学習の受け入れや出前事業を行っておりますが、教員の熱意や授業方針によってかなりの差があります。これは郷土文化や伝統文化をどのように教えるのかという指針が確立していないからではないでしょうか。また郷土学習を社会科で行うのは3、4年生に限られていて、歴史学習をしていないので知識的にも限度がある。むしろ歴史学習をした6年生、あるいは中学生になって再び郷土学習に取り組む機会があれば効果的だと思うのですが、実際には一部の総合学習を除いてほとんど行われていない。このあたりのことでご意見がありましたら伺わせていただければ幸いです」ということなのですが、どなたかお一人かお二人、一応金先生、小谷先生へのご質問という形で来ていますけれども、ほかの方でも結構です。お一人かお二人、簡単にご意見があればお願いします。

小谷 おっしゃる通りで、3、4年生に関しては今日紹介した話も含めて、個人的にはこれぐらいのレベルでやればいいのかというのは見えてきているかなと思っていて、次は5、6年生かなというのは思っています。そういう意味で言うと、多分、いろんな学年、それは1、2年生から含めてできるようなカリキュラム化、温度差があるから指針を確立する必要があるというのはその通りかなと思っています。先ほどの質問のときに、そうか、それを答えなければと思っていたのですが、先生によってある温度差を解決するという意味でも、ある程度のマニュアル、カリキュラムを決めて、ある程度こういうパッケージで何時間授業をあけてもらえるというものができます、というのをつくっていくという一方の必要があって、そこからその先生の熱意によってプラスアルファができるというような、両面で授業をつくっていく必要があるというのが、究極の形としてイメージしておりました。その流れの中ではおっしゃられた通りで、私の中でも特にこの調査系の授業の最終完成形はやはり中学生にやらせたいというのがあって、中学の先生にそういう話を耳もとでちょっと囁いているというのが現状です。

ただし1点、これはすごく気になっているんですけど、今話で若干出ていましたけれど、授業の時間数が減ってきて、総合的な学習の時間やこの手の授業の時間数が減ってきているというような流れの中では、今後また、僕の中では3、4年生はだいたいこんな感じかなといったのもまだかなり変えなければいけない。その中で何ができるのかということもまだちょっと考える必要があるかなと思っています。

金 今の質問は、教科カリキュラムから見ると、そうなると思うのですね。3、4年生の社会科郷土学習の中に昔からのものの学習があります。6年生になると歴史学習があるのですが、私は教科学習のカリキュラムで考えているのではなくて、学校経営というか、何とかな、教科外としてとらえたい。どうしても教科学習でいくと、そういった視点になってしまいます。そしてこれを学んだ後に、という順序性が出てきますが、私の発想はまるっきりそういう順序はなく、発表のときにも言いましたが、理屈や理論や知的なものではなくて、体験学習なんです、今の子どもたちに欠けているのは。いろんな体験が足りないのではないかなと。一番思うのは自然体験なんです、その次にそういう文化的なものを体験すること。ですから私は1

年生でも2年生でもやりたい、クラブ活動でやらせたいところがあるというのはそういうところなのです。コメンテーターの先生もおっしゃいましたが、そういう体験する喜び、それは民俗芸能でなくてもいいんですが、近くに民俗芸能があるのに、それを体験させないことはないだろうという発想なので、ほかの体験がもし良いとすれば、その体験もありかなとは思いますが、私はまず教科学習からの視点ではなくて、いわゆる昔、学校教育でコアカリキュラムというのが流行った時期があるのですが、1つの中心となるものがあって、それが地域の文化であっていいのではないかなと。それがふるさと教育につながるし、いろんな教科学習の地域素材という切り込みもある。つまり学校の軸を地域としたい。ですから先ほどの学校行事を地域の行事にしようというような発想にまでなってしまうのですが。ちょっと大胆すぎるかもしれませんが、そういう学校経営のコア、中心部に地域の文化を置きたいという発想なんです。

それから1つ、地域の学校というのを何回か言っていますが、実は学校の外に地域の学校推進委員会という組織を私がつくったんです。先ほど、校長が変わると、あるいは先生が変わると、学校で温度差があるというのがありましたけれども、私が変わったときに、私の今いる直根小学校がガラッと変わってしまわれるのが怖いなという、地域の方から声がありました。だけれども私の中にも、ある学校の校長先生の気持ちがあつて、次の校長に自分のやってきたことを強制はできない。お願いというか、夢を託すことまではできるかもしれませんが、あまり線路を敷いてはならないという思いがあります。その中で地域の学校の推進委員会、20人いるんですが、その方々で学校経営・運営にすべて関わるのではなくて、地域の学校のこの部分を何とか取り入れてほしいという、学校と地域の関係づくりというか、そういうことを「地域の学校」推進委員会という会で、教育委員会より上のものというか、そういう言い方はあれですが、その地域の学校の推進委員会の方と学校との連携というか、それを今考えています。ちょっと地域の学校のことをしゃべるとまた長くなるので、後日時間をつくっていただければと思います。すみません。

コーディネーター ありがとうございます。コーディネーターの役目はタイムキーパーなんです、もうほとんど終わりの時間になってしまいました。せっかくコメンテーターの先生にお二人来ていただいて、最初に冒頭にちょっとおしゃべりいただいただけなので、まことに申し訳ないですが、ほんの一言だけ最後にコメントをいただけますでしょうか。伊野先生。

伊野 ありがとうございます。いくつか感じたこと、考えたことがあります。1つはやはり学校についてです。冒頭で述べたように、いろんな方がここにいて欲しいということを感じました。そして、もう一度お互いに学校のことを考える必要があるなと…。特に、学校で教えている子どもたちは誰ですかということですね。地域の、そこに住んでいる子どもが学校に行っているんだってことをもう一度よく考えなくちゃいけないわけです。地域の子どもを教育しているんですよって…。今の学校は何か自分の子を自分の子として育てていないみたいな、ほかの地域の子どもを育てても全く変わらないようなことをやっているの、やはり自分の子は自分で育てるということをお互いにもっと強烈に認識する必要があるなと思いました。

それで2点目は、いま学校では、総合的な学習の時間が少なくなってきました。ただ、金先生の資料にありますように、一番てっぺんの法律に伝統という冠がありますし、加えて今回の学習指導要領の改定によって、各教科・領域の細部にわたって、自分たちの伝統、自分たちがどう生きてきたかということ学習するということになっています。例えば言語活動にしても、

それから私のやっている音楽についてもそうなんです。ですから各教科の中に無形の民俗を入れる部分がたくさんあります。もちろん総合もそうです。学習指導要領の解説書は1教科60円か70円ぐらいですから、全部買ってもそんな高くないです。そこに全部書いてあります。学習指導要領のそうした内容と地域の民俗との接点を探っていく必要があると思います。そうでないと、例えば今だったら音楽の教科書では最初に「さくら」が出てきますが、4月に日本全国で「さくら」を歌うこと自体がおかしいわけですね、ある意味で。咲いていないところもあるわけですから。そういうようなところから見直すことができるのではないかと思います。

最後に、先ほどカリキュラムのことを話しましたが、民俗の学習を学校のカリキュラムのサイクルにしていくということがポイントだと思います。今の金先生のお話もそうですが、例えば佐渡には小倉小学校という、何十年も鬼太鼓の学習を続けているところがあるのですが、お祭りになると必ず子どもたちが演じるわけです。子どもの鬼太鼓がお祭りの中に入っていて、伝承のシステムが学校と一体化していつてしまうので、そうすると、校長先生が変わろうと、教頭先生が変わろうと、担当の先生が変わろうと、学校のカリキュラムに組み込まれているので何十年も続くわけです。そういう意味では、いかにしてカリキュラムのサイクルにするかということがポイントだと思います。以上です。ありがとうございました。

コーディネーター ありがとうございます。では橋本先生、一言。

橋本 実は、今回このコメンテーターのお話をいただいたときに、俵木さんからこういうメールをもらっているんです。勝手に読んでしまいます。「子どもを無形の民俗事象に惹きつけるにはどのような工夫をすべきかといったことをお話いただけると有難いと思っています」とあります。また別のメールでは、「地域の伝承者の実践に、(学校に限らず)、子供たちをどう関わらせることが可能か、あるいは地域ごとの生活や文化に子供たちをどう導くことができるか、という方に重点を置いてもらえたらと思っています」とあります。希望はかなえられないものですが、これに対して、おそらく伊野先生が今日2番目におっしゃったこと、ネットワークとか連携のつくり方が大事だということですね。おそらく今回、その話に終始せざるを得ない程度には、やはり学校ってものすごく大きな比重を占めているということだと思うのです。学校に限らずと言っても、限らずということを論じることがなかなか難しいということだと思います。ですから、ネットワークとか連携のつくり方とか、システムをどう考えればいいのかということにならざるを得なかったのかなと思います。

そういうことが確認できただけでもとても意義があると思うのですが、一方で、最後に伊野先生がおっしゃった5番目に、無形の民俗の性格に合わせた伝承について、学びの学習をどうするのかというお話がありました。私としては、楽しいからやるとか面白いからやるとかというようなことを、俵木さんが言ったことにも沿ったつもりで、お話を少しだけはしてみました。ここで言うておきたいのは、例えば「どこどこ(地名)の何々(文化財名)」というような大層なものに限って議論し続けると、そういうものが伝えられている地域の子は民俗文化に誘われていくでしょう。だけど、こういう議論って結局、そういうすごいものが伝えられている地域の子どもにしか集中していないんじゃないかなと思います。これが要するに、文化財という枠組みがつくり出す視野狭窄の部分かなと思います。この場はそれでいいんでしょうけれど。

だけど、文化財指定とか特にこれといってすごいものがあるような地域ばかりではないわけ

で、そういう地域に住んでいる子どもたちを、それでは引き付けられない。そうすると、ごく一部のたまたまそういうものに出会ってしまった子どもたちに対してどういうふうに関心を持ってもらうかという議論だけしているのではちょっと狭いだろうというのが、私が言いたいことなのですね。そうしたときに、小谷さんがやっておられるような、もっとささやかなところからどういうふうに組み上げていけるか、佐川さんが紹介された写真にあるようなイメージの中から、何か大きなヒントというのが得られないかなとまだ思っています。それが学校に限らず子どもたちをどう導いていくことになるのか。もちろん導く必要があるかどうか分からないですし、導かなくてもいいじゃんという議論もいくらでもあると思うんですが、引き続き検討していく必要があるのかなと私は思いました。以上です。

コーディネーター はい、ありがとうございます。時間のほうがもうすでに予定時刻を過ぎております。例年ですと、ここでコーディネーターが、報告書にするのを意識して何かまとめたことを言うんですが、今年は幸いなことに司会者宛ての質問というのが1通別にまいっております、それに対する思いをうちの俵木に述べていただいて、まとめに替えたいと思います。私はここで降壇いたします。

司会 実は最後に質問を1ついただいております、ものづくり大学の土居さんからですが、「実に多様な事例が報告されたが、全体を包む見取り図なりストーリーを示してもらえないか。このままでは、全国各地で奮闘している方々がおられる、私も頑張ろうでまとめてしまいそうな自分が怖いです」というふうなことです。それについてお答えすると、まず1つは、皆さん各地で頑張っておられますので、私たちも、私も含めて、みんなで頑張りたいということで別に構わないと思うのです。実はさつき橋本さんが私のメールをちょっと読まれて、多分その中にも少しそんなことを書いてありますけれども、もともとはこの会は学校教育と民俗文化財をもう1回考えようというつもりで企画しました。伊野先生が先ほど、学校の人がここになかなかおられないと言われましたが、最初何人かアプローチをしたんですが、やはり平日の昼間にここに先生や学校関係者に直接来てもらうことが難しいということがありまして、だったらもう少し広げて、子どもという観点にしようと考えました。

ただそのときに私が意識したのは、ちょっと前まで民俗芸能や民俗音楽を学校教育に取り入れようという試みがすごく盛んだったときに、少し違和感を持っていたところがあるんですね。それは結局、学校の中に民俗芸能とか民俗音楽とかを取り込むという視点に終始しているように私には思われたんです。でもそうではなくて、学校から出て、その地域の民俗文化というものに生徒がどんどん参加していけるような体制というのができないのかな、というふうに考えたわけです。そうでないと、どなたかが触れていましたけれども、結局、学校教育のネタとして民俗が使われておしまいというふうになってしまわないか、という違和感があったわけです。そうした考えが企画のもとにあったのですが、図らずも今回は、その意を汲んでくれた挙げ句、その先にまで行ってくれたような気がします。

その1つは、地域とかその中にあるさまざまな制度やさまざまな立場の人との連携ということですね。例えば北村さんとか金先生のお話を聞いていてお呼びしたのは、そういった視点があったからです。つまり、ただ学校だけではなくて、学校と、例えば行政とか、その地域の人たち、伝承者の人たち、あるいは博物館などとの間の連携のつくり方という点で非常に面白い例だろうと思ったわけです。学校も、そうしたいろいろな立場の1つとして位置づけるべきで

はないかと。

それでも私の中には、橋本先生がはっきりとおっしゃいましたけれど、やはり学校 VS 民俗文化というような図式がずっと残っていたわけですね。そういう考え方はまずいということが今回のこの討議の中で非常にはっきりしました。伊野先生も、結局こういったところに学校とか保護者の方々も含めて来てもらって、みんなで考えなければいけないのだとおっしゃいました。つまり、確かにこれまでは、学校教育の中に民俗芸能とか民俗文化というのをどう取り入れるかという学校教育側からの発信というのが多くて、民俗文化の側からこの問題について発信する場がほとんどなかったように思っていました。そういう意味で、今回この場を設けたのですけれども、やはりその対立図式で考えているだけでは十分ではなくて、お互いの考えを寄せ合わなければいけない。私自身は、ここでずっと話がされていたのを、まるで自分自身の考え方を怒られているような気がして聞いておりましたが、成果としてはそういったところまで議論が進んでくれたというのは、私にとっても、またそれからこの会を開いた意義という点でも大変ありがたいことでした。ということでよろしいでしょうか。以上です。

そういったわけで、司会に戻らせていただきます。少し時間がオーバーしましたが、皆さん長いことどうもありがとうございました。報告者の方々、それからコメンテーターの先生方に、もう一度感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。それではこれにて第4回の無形民俗文化財研究協議会は終わりにしたいと思います。

参 考 資 料

大磯の七夕行事の継承の取り組み

- | | |
|-------------|----------------|
| 1. はじめに | 5. 継承への取り組みと課題 |
| 2. 伝承地域の概要 | ・子ども連—保存会—子ども会 |
| 3. ムラと祭りの構造 | 6. まとめ |
| 4. 七夕行事の実際 | |
| ・西小磯東地区 | |
| ・西小磯西地区 | |



七夕の宿（昭和30年頃）

■ 神奈川県中郡大磯町の概要 (10/1 現在)

面積／17.23 平方キロメートル

人口／32,859 人

世帯数／12,459 世帯

学校数／幼稚園 6 園 (町立 4、私立 2)

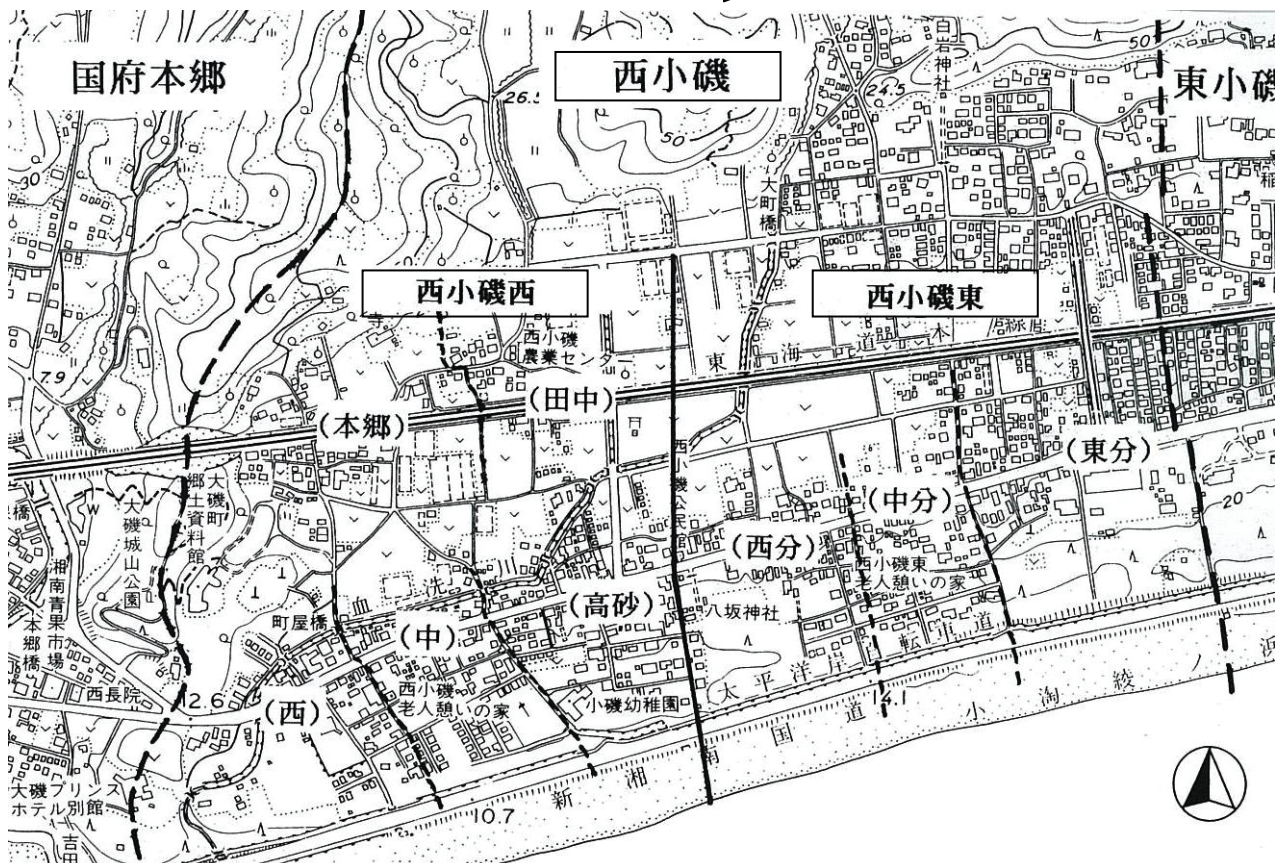
小学校 3 校 (町立 2、私立 1)

中学校 3 校 (町立 2、私立 1)

自治会数／24 地区

子ども会数／21 団体

(子ども会の無い自治会 7 地区)



大磯町西小磯地区 概念図

■ 西小磯地区の概要

- ・『新編相模国風土記稿』／「往古は大磯宿、及加宿東小磯共に一区たり、後大小二区に分れ、後又小磯の地、東西二区に分割せし」
- ・近世村／西小磯村 (明治 22 年に合併により大磯町へ編入)
- ・現在／大磯町
 - 西小磯東(自治会)—— 東分、(中分)、西分
 - 西小磯西(自治会)—— 高砂、中、西、田中、本郷

■昭和 30 年頃の七夕行事



竹飾り



竹飾り



竹飾りを担ぐ



竹飾りで祓う



七夕踊り



子ども神輿



竹神輿を作る



竹神輿を担ぐ



竹神輿を担ぐ



竹神輿・子ども神輿を担ぐ



竹神輿を担ぐ（流す）



宿（ヤド）での食事

■ 西小磯東の七夕行事（平成 20 年 8 月 6 日～7 日）



竹飾りを持って宿に集まる



竹飾りを担ぐ



竹飾りで祓う



竹神輿を担ぐ



竹神輿で祓う



竹神輿を担ぐ（流す）

■ 西小磯西の七夕行事（平成 20 年 8 月 2 日～3 日）



竹飾りで祓う



竹飾りを担ぐ



七夕踊り



竹神輿を作る



竹神輿を担ぐ



竹神輿を流す

■子ども会育成会による行事予定表(西小磯西/平成20年)

平成20年度七夕祭り予定表

西小磯西子ども育成会

| 日付 | 時間 | 行事 | 内容 | 備考 |
|-------------|--|--------------------|--|---|
| 8月1日 (金) | 13:00 馬頭観音 | 竹取り | 本部男性、地区役員 各自(のこぎり、なた用意)、はしご、殺虫剤 | <4・5・6年生> 長袖シャツ、長ズボン 運動靴、軍手、虫除け |
| | 13:00~15:00 憩いの家 | 憩いの家 掃除 | 役員(本部女性) | |
| | 15:00~ 農業センター | 竹配布 踊り・太鼓練習 | 竹を注文した子どもは農業センターに取り にくる。 | 全員受け取りにくる |
| | 各家庭 | 飾り付け | 全て紙の飾り付けとする。 | |
| 8月2日 (土) | 8:00 憩いの家 | 役員集合 | 縄を水に漬ける。 | |
| | 8:30 憩いの家 | 会員集合 竹飾り持参 | 願い事を書いたたんざくを2枚以上持って きて憩いの家の前にある竹に付ける。 | 持ち物 首かけタオル、手拭、 水筒 |
| | 8:45~9:30 憩いの家 | 道祖神廻り (コース地図参照) | 竹飾りを持って各地区の道祖神を祓い清め る。(落ちた飾りはポリ袋へ) | |
| | 9:30~9:45 憩いの家 | 休憩 | スイカ、バナナ、麦茶を準備してあります。 | 服装 軽装、帽子 運動靴(歩き回るので ビーチサンダルは履 かない) |
| | 9:45~11:45 憩いの家 | 七夕踊り (コース地図参照) | 各班に別れて、家々を踊り、祝って廻る。 頑張った子供にごほうびあり!! | |
| | 11:45~12:15 資料館 | 竹神輿搬出 | 役員(本部男性) 資料館から古い竹神輿を搬出する。 | 注意 持ち物には名前を 書いておく。お金は 持たない。 |
| | 12:00~13:00 憩いの家 | 昼食 | 全員、子供会で準備したお弁当で昼食。 *お弁当を注文した付添いの人は代金(500 円)と引換え。 ジュースのおみやげとごほうび | |
| | 3年生以下は一旦家に帰りゆっくり休憩 | | | お願い 多くの父兄の方の付 き添いをお願いしま す。 |
| | 13:00~16:00 憩いの家 | 竹神輿作り | 4・5・6年生+指導員 | |
| | 16:30~17:00 憩いの家 | 全員集合 | おやつを食べる。 サンドイッチ・ゼリー | |
| | 17:00~19:00 (高学年) 17:00~19:00 (低学年) 憩いの家 | 竹神輿担ぎ (コース地図参照) | 竹神輿を担いで各地区を廻る。 身代わり不動でお札を頂く。 低学年は憩いの家と八坂神社、高学年は農 業センターと八坂神社で給水タイムあり。 八坂神社でお参り。(賽銭は子供会で準備) 弁当のお土産。 | |
| 8月3日 (日) | 7:00 憩いの家 | 会員集合 | 小磯幼稚園下海岸まで竹神輿を担ぐ。 | ビーチサンダルを履 いてきてよい。 |
| | 7:00~8:00 幼稚園下海岸 | 竹神輿流し | 竹神輿を海に流す。 一旗流す、一旗をお焚き上げ(灯油準備) | |
| | 8:00~8:30 海岸 | 朝食配布 | 海岸で「おにぎり」の配布後、解散。 | |
| | 9:00~ | 後片付け | 役員 資料館展示用の竹神輿を資料館へ搬入す る。憩いの家後片付け | |

【竹飾りの作り方】●「たんざく」はすべて紙で作ってください。

●笹竹につける時、ビニール・糸・針金は使わないこと。

●紙で「こより」を糊で「たんざく」に糊付けし、笹竹に結びつける。

●資料館展示用の竹神輿に全員のたんざくを付けるので自分の竹飾り用とは別にたんざくを
2枚以上用意してください

【お願い】

●低学年生にはご父兄の付き添いをお願い致します。

●笹竹につける「たんざく」と「こより」は、各家庭で早めにつけておきましょう。

●事故の無いように、ご父兄の皆様方も子どもの誘導にご協力下さい。

■子ども会および会員数の推移

| 自治会名 | 子ども会名 | 回覧板 数 | 会 員 数 | | | | 備 考 |
|------|-------------------------|----------|--------|--------|--------|--------|--------------|
| | | | H 18 年 | H 19 年 | H 20 年 | H 21 年 | |
| 高 麗 | 高麗 | 5 | 66 | 66 | 62 | 63 | |
| 東 町 | 東町 | 8 | 78 | 82 | 40 | 53 | |
| 長者町 | 長者町 | 8 | 48 | 73 | 98 | 81 | |
| 山王町 | 山王町ハ ^ッ ワフル | 4 | 46 | 40 | 36 | 31 | |
| | 山王町サ ^ッ ・ファイト | 4 | 63 | 53 | 54 | 55 | |
| 神明町 | — | — | — | — | — | — | |
| 北本町 | — | — | — | — | — | — | |
| 南本町 | — | — | — | — | — | — | |
| 北下町 | 北下町 | 3 | 39 | 48 | 56 | 60 | |
| 南下町 | 南下町 | 1 | 20 | 32 | 34 | 9 | H 22. 3 解散予定 |
| 茶屋町 | — | — | — | — | — | — | |
| 裡 道 | — | — | — | — | — | — | |
| 台 町 | 台町 | 20 | 218 | 291 | 387 | 379 | |
| 西小磯東 | 西小磯東 | 8 | 86 | 66 | 80 | 75 | |
| 西小磯西 | 西小磯西 | 5 | 33 | 34 | 54 | 46 | |
| 中 丸 | 中丸 | 14 | 124 | 125 | 128 | 114 | |
| 馬 場 | 馬場 | 18 | 80 | 69 | 78 | 83 | |
| 国府新宿 | 新宿東 | 7 | 52 | 50 | 52 | 51 | |
| | 新宿中 | 1 | 28 | 40 | 40 | 43 | |
| | 新宿西 | 11 | 59 | 60 | 57 | 55 | |
| | こゆるぎハイツ | 1 | 12 | 13 | 12 | 9 | |
| 月 京 | 月京 | 5 | 48 | 46 | 50 | 49 | |
| 生 沢 | 生沢 | 1 | 79 | 70 | 74 | 68 | |
| 寺 坂 | 寺坂 | 1 | 30 | 43 | 59 | 53 | |
| 虫 窪 | 虫窪 | — | 11 | 18 | 31 | — | H 21. 3 解散 |
| 黒 岩 | 黒岩 | 1 | 13 | 16 | 29 | 30 | |
| 西久保 | 西久保 | — | 12 | 19 | 21 | — | H 21. 3 解散 |
| 石神台 | 石神台 | 8 | 48 | 52 | 52 | 59 | |
| 合 計 | | 134 | 1, 293 | 1, 406 | 1, 584 | 1, 466 | |

「大鹿歌舞伎の継承の取り組み」

大鹿村教育委員会
社会教育係長 北村尚幸

1、大鹿歌舞伎の歴史

- ・地芝居を支えた奉納歌舞伎と若連

2、継承への取り組み

- ①・中学歌舞伎クラブの発足

- ②・春秋の定期公演

- ③・財団法人の立上げ



- ④・第1回全国地芝居サミット in 大鹿の開催

- ⑤・三遠南信ふるさと歌舞伎交流大会の開催

- ⑥・地芝居伝習塾の開催（文化庁：総合支援事業）

- ⑦・地芝居伝習塾、村芝居復活事業（文化庁：民俗文化財伝承・活用事業）

3、小学生への継承の取り組み

①歌舞伎教室発表会の開催（文化庁：民俗文化財伝承・活用事業）

②中学歌舞伎 OB と小学生

③保存会・行政・学校との連携

例1 ワークショップ

大鹿小学校ふるさと学習企画→大鹿村教育委員会依頼→大鹿歌舞伎保存会協力



例2

大鹿歌舞伎保存会：歌舞伎教室企画→大鹿村教育委員会：依頼→大鹿小学校協力



大鹿歌舞伎編年表

| 時代 | 年 代 | 歌 舞 伎 史 | |
|--------|------------|--------------------------------|--|
| 安土桃山時代 | 慶長頃 1600 | 念仏踊り・風流踊り流行する 出雲の阿国 | 京都を中心に白拍子、遊女の舞踏団が流行る。 歌舞伎踊りの一座を率いて大流行する。踊りが中心の滑稽、好色の所作、派手な衣装の女かぶきは、客の求めに応じる遊女の性格を帯び民衆に強い刺激をあたえ、治安風俗を乱すことはなはだしかった。 (采女かぶき、佐渡島かぶき、村山左近かぶき等が有名) |
| | 慶長13 1608 | 家康 駿府から女かぶきを追放する | |
| | 寛永6 1629 | 家光 女歌舞伎一切を禁止する | 若衆かぶき(少年)が女歌舞伎に代わって流行した。内容は女歌舞伎と同様で、男色の対象となり風俗を乱すことはなはだしかった。 |
| 江戸時代 | 承応元年 1654 | 若衆かぶき禁止となる | この禁令により歌舞伎上演には厳しい条件がつけられた。 (1、前髪を剃って野郎頭にする。 2、歌舞を主とせず物真似狂言づくしを演ずること。) これはかえって歌舞伎の演劇的發展を促す契機となった。(女形の発生、戯曲の進歩) |
| | 貞享元年 1684 | 竹本義太夫「竹本座」を旗揚げする(人形浄瑠璃) | 近松門左衛門を得て時代物や世話物の傑作を多く世に出した。 |
| | 元禄頃 1688 | 市川団十郎、坂田藤十郎等の名優が輩出する。(歌舞伎の発達時) | 初代市川団十郎は作者もかねて荒事をうみ、坂田藤十郎は上方で和事の演出を残した。(中村七三郎、芳沢あやめ他) |
| | 享保年間 1716 | 人形浄瑠璃の全盛期をむかえる | 竹本、豊竹両座の競争により人形浄瑠璃の一大飛躍をとげ「忠臣蔵」「菅原」「千本桜」等の名作が相次いで上演され享保から宝暦へかけての 30 年は人形浄瑠璃の最盛期で歌舞伎を圧倒し、人形浄瑠璃の歌舞伎化が盛んに行われた。 |
| | 宝暦以降 | 歌舞伎の完成期を迎える | |
| | 明和4 1767 | 鹿塩狂言さわぎ | 大河原名主前島家の作方日記に狂言の記述。当時、鹿塩村の人々による芝居が行われていた。 |
| | (寛政の改革) | | |
| | 寛政3 1791 | 飯田在の俳優招く | 松下家文書に上記俳優2名を招き芝居を演じたとの記録あり。 |
| | 寛政10 1798 | 箕輪・上古田で狂言上演 | 伊那谷の人形芝居の中心地の1つ上古田で初午の際、村の若者が示し合わせて狂言を演ずる。(祭礼操の由来記より)各地で地芝居が盛んとなる。 |
| | 寛政11 1799 | 文満舞台建立 人寄禁止令 | 大河原村文満・松平神社舞台4月15日建立 同年7月、芝居・人形などによる興業など全ての人寄が禁止された。 |
| | 文化 10 1813 | 鹿塩中峯の地芝居上演 | 鹿塩村中峯の祭礼に地芝居が挙行され、忠臣蔵が上演された。(祭礼花受納覚帳より) |
| | 文政元年 1818 | 大磧神社舞台建立 | 建立年代は定かではないが、幕などの収納箱の年号より推定。 |

| 時代 | 年 代 | | 歌 舞 伎 史 | |
|------|----------|------|------------------------|---|
| 江戸時代 | 天保 11 | 1840 | 鹿塩中峯の地芝居上演（天保の改革） | 天保 11 年祭礼花受覚帳より。外題不明 |
| | 天保 12 | 1841 | 農民による歌舞伎禁止 鹿塩村地芝居上演 | 天保の改革により、農民による遊芸、歌舞伎、浄瑠璃の類等の人集めも禁制となった。 天保 12 年年祭礼花受覚帳より。鹿塩村内 3 箇所で行った上演の記録。これ以降嘉永3年まで上演の記録なし。 |
| | 天保 13 | 1842 | 上蔵耕地引幕を制作 | 上蔵耕地 26 名と年号の墨書き。野々宮舞台の建立が推定される。 |
| | 天保 15 | 1844 | 下青木舞台建立 | 9月下青木薬師堂境内に前宮と称し、間口八間・奥行三間の舞台を建立した。下青木堂垣外44軒による普請（御堂島家文書） |
| 幕末 | 嘉永2 | 1849 | 沢戸浅ノ助の語り本 | この年号の記入された語り本「神霊矢口渡」「忠臣蔵七段目」沢戸浅ノ助（太夫・芸名 豊竹駒千代）が所持していた。 |
| | 嘉永4 | 1851 | 市場神社舞台建立 | 昭和 47 年改修工事 |
| | 文久 3 | 1865 | 産土大神両社御祭禮祝儀寿納帳 | 御神楽と称し妹背山など四幕を上演したことが祝儀寿納帳から伺える。 |
| | 慶応元年 | 1865 | 弁天祭芝居で詫書 | 下青木弁天祭に大河原村中の若者が伊左衛門宅で、「一ノ谷」「安達ヶ原」を上演。村役人より咎めを受け、発起人・振付師らが詫書 3 通を提出した。 |
| 明治 | 明治 6 | 1873 | 歌舞伎禁止の県令達 | 筑摩県参事より村社の舞台で歌舞伎など行うことまかりならぬという令達が出る。（舞台は説教所と称し学校として使用された。） |
| | 明治 11 | 1878 | 芝居興行願が出願される | 3月10日大河原 平島喜一、3月14日鹿塩 小島嘉之弥 飯田の一座を招き興行する旨長野県令宛に出願する。 木戸銭 1 銭6厘 |
| | 明治 20 | 1887 | 葦原神社舞台建立 | 昭和 51 年改修工事 |
| | 明治 22 | 1889 | 野々宮神社舞台建立 | 昭和 61 年改修工事 |
| | 明治32 頃 | 1899 | 娘義太夫流行する | 寄席演芸の娘義太夫が流行り、飯田にも寄席があり度々大鹿にも買われて農家の座敷などで興行した。 |
| | 明治 37・38 | 1904 | 戦勝祝賀歌舞伎 | 日露戦争の戦勝祝賀公演として鹿塩で忠臣蔵の通しを村民により上演。 |
| | 明治41 | 1908 | 芝居興行願が出願される | 8月30日大河原 浅野巽、飯田警察署長宛に2日間の興行願を出す。木戸銭 5 銭 上演当日は警官が臨席して監視した。大正頃まで市川牡丹、松本緑・沢村紅葉などの一座が村に入り興行した。 |
| | 明治45 | 1912 | 葦原神社氏子かつら購入 | 氏子有志の寄付により26円60銭でかつらを購入した。 |
| 大正 | 大正4 | 1914 | 大正天皇御即位大典祝賀歌舞伎を開催 | 大河原は大磧神社、鹿塩は葦原・市場神社各舞台で開催される。 |
| | 大正 15 | 1926 | 葦原神社氏子かつら購入 | 女形かつらなどを76円65銭で購入した。 |

| 時代 | 年 代 | 歌 舞 伎 史 | |
|----|-------|---------|-------------------------|
| 昭和 | 昭和3 | 1928 | 昭和天皇御即位大典祝賀歌舞伎を開催 |
| | 昭和 22 | 1947 | 憲法発布記念祝賀歌舞伎 |
| | 昭和 29 | 1954 | 郷土芸能調査が行われる |
| | 昭和 31 | 1956 | 保存会が発足される |
| | 昭和 35 | 1960 | 伊那谷郷土歌舞伎競演会に参加 |
| | 昭和 39 | 1964 | 桶谷部落お別れ歌舞伎 |
| | 昭和 45 | 1970 | 小島禧恵師匠没 |
| | 昭和 46 | 1971 | 小島頼人師匠没 |
| | 昭和 48 | 1973 | 飯田文化会館で上演 |
| | 昭和 49 | 1974 | 大鹿村無形文化財に指定 |
| | 昭和 50 | 1975 | 13代片岡仁左衛門来村 歌舞伎クラブ発足 |
| | 昭和 52 | 1977 | 長野県無形文化財に指定される |
| | 昭和 54 | 1979 | 13代片岡仁左衛門来村 |
| | 昭和 56 | 1981 | 長野県芸術祭民俗芸能大会参加 |
| | 昭和 57 | 1982 | 東京ヤクルトホール公演 |
| | 昭和 58 | 1983 | 長野県教育委員会表彰 定期公演始まる |
| | 昭和 59 | 1984 | オーストリア公演 |
| | 昭和 60 | 1985 | 文部大臣表彰 |

| 時代 | 年 代 | 歌 舞 伎 史 | |
|----|--------------------|--|--|
| 昭和 | 昭和 60 年～ 平成 5 年 | 田島町祇園祭屋台歌舞伎 | 福島県田島町の祇園祭(重要文化財)に応援のため出演する。 |
| | 昭和 61 1986 | 保存会を法人化する 古屋敷頼隆師匠没 | 大鹿歌舞伎保存会の組織強化を図るため公益法人(財団法人)を設立。 義太夫弾語り・小島師匠とともに歌舞伎の普及発展にの発展につとめられた。 |
| 平成 | 平成 2 1990 | 国際花と緑の博覧会参加 全国地芝居サミット開催 | 大阪・国際花と緑の博覧会場の、国際陳列館にて公演する。(8月) 第1回全国地芝居サミット大鹿・記念講演とシンポジウムを開催。(10月) |
| | 平成 3 1991 | 伝統文化ポーラ特賞受賞 | 伝統文化振興に貢献した功により、第11回伝統文化ポーラ特賞を受賞。 |
| | 平成 4 1992 | ドイツ公演 福島県いわき市公演 第3回地芝居サミット | 国際交流ドイツ公演を実施。ボン市他6都市にて公演する。(5月) イギリス、デボン州ハートランド村の中学生が来村し大鹿歌舞伎を中心とした国際交流に尽くす。(8月) 8月 8月 東京都調布市において第3回地芝居サミットに参加出演。 |
| | 平成 5 1993 | 長野県民文化会館公演 信州博覧会出演 全国芸能サミットに出演 | 5月 長野県民文化会館開館10周年記念事業に出演。 9月 松本市にて開催された信州博覧会に出演。 11月 岡山県勝田郡奈義町において開催された全国芸能サミットに出演。 |
| | 平成 6 1994 | 山本有三記念郷土文化賞を受賞する 駒ヶ根文化センター公演 | 3月 石川文化事業財団による山本有三記念郷土文化賞受賞。 7月 駒ヶ根市制40周年記念事業に出演。 |
| | 平成 8 1996 | 全国地芝居サミット出演 三遠南信ふるさと歌舞伎 国の無形民俗文化財に 選択される (11月28日) | 9月 東部町において第7回全国地芝居サミット参加出演。 三遠南信ふるさと歌舞伎交流大鹿大会を開催出演。(国芸術文化振興基金事業11月) 文化庁より記録等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に地芝居では初めて大鹿歌舞伎が選択される。 |
| | 平成 12 2000 | 国立文楽劇場出演 | 大阪国立文楽劇場自主公演「ふるさとの地芝居」出演 |
| | 平成 15 2003 | 第20回地域づくり表彰国土交通大臣賞受賞 全国地歌舞伎交流大会 | 地域づくり全国交流会議鹿沼大会において地域づくり表彰国土交通大臣賞を受賞する。 出雲阿国歌舞伎発祥 400 年記念事業として島根県民文化祭「全国地歌舞伎交流大会」出演。 |
| | 平成 16 2004 | 全国ふるさと歌舞伎フェスティバル 第11回信毎賞受賞 | NHKホールにて文化庁主催の「全国ふるさと歌舞伎フェスティバル」に出演。全国より8団体の地芝居が参加する。 信濃毎日新聞社より第11回信毎賞を受賞する。 |
| | 平成 20 2008 | 財団法人を解散 | 財団法人を解散し、大鹿歌舞伎保存会は任意の団体として再出発する。 |

カリキュラム

| 開催日 | 実施内容 | 参加人数 | 場所 |
|-------|----------------------------------|------|---------------|
| 6月8日 | 開講式 横笛の種類・笛の持ち方・音の出し方 | 14 | 花巻市文化会館 |
| 6月15日 | 基本練習 花巻囃子（行進囃子）入門編の練習 | 16 | 〃 |
| 6月22日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 6月29日 | 〃 | 19 | 〃 |
| 7月13日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 7月20日 | 花巻囃子入門編の練習 花巻囃子裏囃子の練習 | 13 | 〃 |
| 7月27日 | 〃 | 12 | 〃 |
| 8月1日 | 花巻囃子奉納 | 20 | 鳥谷ヶ崎神社 |
| 8月17日 | 花巻囃子入門編（初級クラス） 花巻囃子上級編（中級クラス） | 13 | 生涯学園都市会館 |
| 8月23日 | 〃 | 9 | 〃 |
| 8月30日 | 〃 | 8 | 〃 |
| 9月7日 | 三味線・大太鼓と野外合同練習 | 14 | 花巻市上町ピジターセンター |
| 9月12日 | 山車連合パレードに参加 | 14 | 上町お祭り広場 |
| 9月13日 | 花巻ばやし踊りパレードに参加 | 20 | 〃 |
| 9月14日 | 山車連合パレードに参加 | 20 | 〃 |
| 9月28日 | 終了式 合同演奏 グループ発表 指導員模範演奏 | 14 | 鳥谷ヶ崎神社 |



全員での練習 楽譜を見ながらみんなで真剣に演奏しています



個別指導 なかなか音の出ない子どもには確実に音が出るまで教えます



グループ練習 上達に応じてグループ別に分かれて練習します



野外での合同練習 本番が近づくと三味線・大太鼓の子ども達と商店街で合同練習をして、祭り気分を盛り上げます

指導者の感想

は、息の出し方や指づかいに苦戦したり、たびたび息が続かなくなる時がありました。練習を積み重ねていくたびに、できなかった一番高い音が吹けるようになり、息も続くようになりました。より美しい音色がだせるようこれからもがんばって、花巻まつりを楽しみながら伝統を学んでいきたいです。
(小学六年)

保護者の感想

れることを願っています。

・お世話になっております。このたびは、丁寧なご指導頂きありがとうございました。花巻まつりで若葉町に参加していました。皆様に大変はめて頂き、本人もとても喜んでいました。また来年も練習に参加してもっと上手になりたいと言っております。その際は、またぜひ宜しくお願いいたします。



お祭りパレードで演奏 いよいよ本番、花巻ばやし踊りパレードで演奏

DATA

代表者名／新淵 勇篤
団体所在地／岩手県花巻市太田

岩手県

花巻市

花巻囃子こども横笛教室

「花巻市郷土芸能保存協議会」

趣旨

「方十里 稗貫のみかも 稲熟れて み祭三日 そらは
れわたる」と宮沢賢治も詠んだ「花巻まつり」は、四百年
以上前から続く花巻を代表する祭りです。花巻まつり囃子
は、「花巻まつり」の風流山車の運行の際に、小太鼓を小
学生の女子、三味線を中学生女子、笛と大太鼓を地域の大人
が担当し演奏しています。

平成十年ごろから、小学校の総合的な学習の中で、「花
巻まつり」について調べる活動が始まり、和楽器に興味を
もった子ども達が、自分達でお囃子を演奏しようという取
り組みが進められるようになりました。このような活動を
経て、市内に横笛に興味をもつ子ども達が増えてきました。

お囃子の中でも横笛は、演奏の核となる楽器です。と
ころが、横笛奏者は、他市からの参加者だったり、横笛奏
者が少ないために録音した横笛の旋律をスピーカーから流
したり、残念な現状でした。小学生のこどもにとって横笛
は、音を出すことも難しい楽器ですが、興味を示すこども
に対応したい、将来的に各地区の横笛奏者を増やしていき
たいという思いから、「花巻囃子こども横笛教室」を開設し、
練習を始めました。

花巻に伝わる歴史的なまつりの保存に、後継者を育成
することにより貢献したいという思いで取り組みを進めて
います。

内容

京都祇園囃子の流れを汲むといわれる花巻まつり囃子
には、表囃子（行進囃子）と裏囃子（停車囃子）の二種類
があります。この花巻まつり囃子の演奏を目標に、練習を
始めました。

初めは横笛の種類や笛の長さによる調の違いなどに
ついて理解を促し、それから、演奏の時の横笛の構え方、一
つひとつの音の出し方を練習しました。初めは、初級編と
して基本の旋律を練習し、徐々に装飾音符を付けていきま
す。

八月初旬には祭囃子の奉納ということで、表囃子と裏囃
子を鳥谷ヶ崎神社で演奏しました。まつりの間近には商店
街の一角で演奏し、まつりの気分を盛り上げるのに一役を
担っています。そして九月のまつり当日の演奏を迎えます。

運営

小学校高学年及び中学生を対象に市内の各小学校から
参加者を募りました。「花巻まつり」に関わる地域だけ
なく、市内の各校区から二十七人の小学生や中学生が集ま
りました。

毎週日曜日、九時三十分から十一時三十分まで花巻市
文化会館や市内の施設を借用して練習を行いました。指導
には、「花巻まつり」や郷土芸能等の演奏に携わってきた
奏者があたりました。

成果・課題

「花巻囃子こども横笛教室」で練習した子ども達の中に
は、「花巻まつり」の踊りパレードの演奏や、各地区の山
車に参加して、大人と一緒に横笛でお囃子の演奏に参加し
ているこどももいます。女子が多い中で、男子の中にもお
囃子のメンバーとして山車に参加することも出てしまし
た。こども達の中には中学校に上がってから継続して横
笛教室の練習に毎年参加して、先輩として後輩に指導する
こどもも出てくるようになってきました。

このように、こども横笛教室で横笛の奏者を育成して
いくことは、これからの「花巻まつり」の担い手となる後
継者の育成に貢献することになると信じています。

今後も各地区との連携を大切にしながら活動を続けて
いきたいと思っています。

こども達の感想

・花巻ばやしには難しいところがあるので、音だしから始
まり表（行進囃子）と裏（停車囃子）を一生懸命集中し
て練習しました。最初は難しくて指がついていけないの
でゆっくりしか吹けませんでしたが、だんだんみんなに
合わせて早くできるようにになりました。私はこの横笛教
室で習ってもう四年になります。このころは初めての子
に教えたりしています。（中学三年）

・私が横笛教室に参加した理由は、初めて花巻まつりを見
た時に優雅な花巻ばやしの音色を私も吹けるようにな
りたいと思ったからです。練習をはじめたばかりのころ



カリキュラム

| 開催日 | 実施内容 | 参加人数 | 場所 |
|--------|---------------------|------|---------------|
| 5月24日 | 神楽の由来 演目の内容説明 配役の決定 | 11 | 向峠小学校多目的ホール |
| 6月21日 | 楽士の基本練習 | 12 | 〃 |
| 7月 5日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 7月12日 | 舞い方の基本練習（大蛇） | 13 | 〃 |
| 8月 2日 | 〃 | 12 | 〃 |
| 8月23日 | 全体練習（大蛇） | 13 | 〃 |
| 8月29日 | 基本練習（猿） | 13 | 〃 |
| 9月 6日 | 全体練習（猿） | 13 | 〃 |
| 9月13日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 9月20日 | 全体練習（大蛇） | 13 | 〃 |
| 9月27日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 10月 4日 | 全体練習（猿） | 13 | 〃 |
| 10月18日 | 〃 | 13 | 向峠剣道神社神楽殿 |
| 10月23日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 10月26日 | 秋まつり神楽奉納（猿） | 13 | 〃 |
| 11月15日 | 全体練習（猿） | 13 | 向峠小学校体育館 |
| 11月30日 | 老人ホーム慰問（猿） | 13 | 特別養護老人ホーム「錦苑」 |
| 12月20日 | 全体練習（猿） | 13 | 向峠小学校体育館 |
| 1月24日 | 〃 | 13 | 〃 |
| 2月14日 | 〃 | 13 | 〃 |



楽士の基本練習



「大蛇」の練習



「大蛇」衣装をつけて仕上げの練習



秋まつり神楽奉納「猿」を地域の方々の前で披露

DATA

代表者名／安村 勝利
団体所在地／山口県岩国市錦町

・初めて笛をやって人前で発表するときは、緊張しました。けれどうまく吹けたので、とてもうれしかったです。最初の練習ではあまりうまく吹けず、苦労するときもありました。でも、やっていくうちに少しずつうまくなっていくので、上達していくのが楽しかったです。

（小学二年・女子）

・丁寧な指導でわかりやすく教えてもらい、こどもは神楽の練習を楽しみにしていました。中学生から小学生までが仲良く練習していたのが印象的でした。

・家庭では見られないような真剣な姿勢で取り組み、この一年の練習の成果はすばらしいものでした。このすばらしい経験を今後の生活の糧としてもらいたいと思います。

保護者の感想

・地域のこども達が真剣に練習に取り組み、神楽の修得に努めていました。まつりなどで地域の方々がこども神楽を楽しみにしており、披露することで地域が活性化されたような気がします。このこども達が数年後、向峠神楽を継承し、地域の一員となってくれることを願っています。

指導者の感想



特別養護老人ホーム「錦苑」で「猿」を披露

山口県

岩国市

むかたお
向峠こども神楽教室

〔向峠神楽保存会〕



趣 旨

岩国市指定無形民俗文化財に指定されている向峠神楽は、天保の大飢饉の後、河川のない向峠地区に五キロメートル上流の金山谷地区から水路を引き、その完成を祝って秋祭りに地区の若者が神楽を奉納したのが起源とされています。その後、石見神楽を取り入れ、地区の若者に傳承されて現在に至っています。

先人が残してくれたこの神楽をこども達に傳承することで、向峠神楽の魅力を伝え、十分理解することで、郷土の文化を認識し、ふるさとを愛する心、ふるさとの文化を誇りに思える心を育んでほしい。そうしたことから「向峠こども神楽教室」を実施しました。

また、この教室の中から一人でも多くのこども達が将来向峠神楽を繼承してくれること、ふるさとに帰ってきてくれることに期待を寄せています。

内 容

平成十七年度から「伝統文化こども教室」に採択され「向峠こども神楽教室」を開催しています。当初は向峠神楽の演目のうち「大蛇」だけを修得していましたが、平成十九年度から二つ目の演目「猿」を修得するために練習を重ね、今年度初めて秋祭りで奉納しました。

「大蛇」は須佐之男命が大蛇を退治する八岐大蛇の物語で、中学生が大蛇になり、中学生を中心にして舞い、大太

運 営

鼓、小太鼓、調子鉦、笛からなる楽士は小学生を中心に行います。「猿」は、源頼政がいたずらをする猿を退治する物語で、小学生が主に舞い、中学生は楽士になります。神楽がやりたくて集まっているので、意欲的に練習に取り組んでいましたが、「猿」を修得することで小学生が舞い手になる機会が増え、中学生中心の神楽から小学生が中心になる機会が増えたことで、小学校低学年の練習意欲が向上して、いきいきと練習に参加するようになりました。

今年度は、向峠子ども会の小学生から中学生まで十三人が参加し、指導は向峠神楽保存会の安村会長を中心にしたメンバー（内部講師）で指導を行いました。

練習場所は、主に休校中の向峠小学校の多目的スペースや、体育館を使用させていただき、秋まつりの前は向峠剣霊神社の神楽殿でも練習を行いました。

成果・課題

年度当初は配役が代わったりして動きがぎこちなかったのですが、練習を重ねるうちにそれぞれの役柄の動きができるようになり、「猿」と「大蛇」の二つの演目を修得、披露することができました。

秋まつりや特別養護老人ホームへの慰問、「向峠こども教室」終了後の三月にも地域の文化発表会でこども神楽を

披露しました。

多くの発表機会に恵まれたことで、こども達は自信を持って大勢の前で発表することができるようになりました。

今後の課題として、数年間はこども神楽ができる人数が確保できると思われませんが、少子高齢化、過疎化の影響で、神楽を傳承するこども達が減少することが問題となってくると思われます。

こども達の感想

・僕は「大蛇」の須佐之男命を舞っています。須佐之男命は神で大蛇を退治する役です。僕がお祭りで須佐之男命をしたときは、火花が熱かったり緊張して大変でした。練習のときはセリフや舞を覚えるのに苦労しました。大蛇を退治するときは、せまってくる大蛇をおし返したりするのですが、こつちがおされたりしてやられそうと、よく言われてました。けれど神楽は楽しいです。

(中学一年・男子)

・僕はさるをがんばったと思います。とくにきんちょうしたのは、始めてさるをやったときです。人が多く、ぼくが最初にでるからきんちょうしました。気をつけたことは、セリフをかまわずに言うことと、動くことなどです。やった感想は、いしうがとてもかっこよかったし、いい神楽ができてとてもよかったです。(小学五年・男子) ・かぐらは楽しいので一番好きです。りゆうはみんなやるとおもしろくて楽しめるかんじになります。「上手だね」といわれると、うれしくてうれしくてたまらないほどうです。わたしは楽しいかぐらが好きになりました。

伝統文化こども教室 申請・採択件数(分野別)

資料4-2

(単位:件)

資料3(松本)

| 分野 | 15年度 | | 16年度 | | 17年度 | | 18年度 | | 19年度 | | 20年度 | | 21年度 | |
|----------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|-------|
| | 申請件数 | 採択件数 | 申請件数 | 採択件数 | 申請件数 | 採択件数 | 申請件数 | 採択件数 | 申請件数 | 採択件数 | 申請件数 | 採択件数 | 申請件数 | 採択件数 |
| 神楽 | 59 | 58 | 98 | 96 | 74 | 68 | 88 | 87 | 99 | 96 | 115 | 111 | 124 | 124 |
| 獅子舞 | 34 | 34 | 68 | 65 | 62 | 60 | 68 | 68 | 88 | 81 | 98 | 94 | 118 | 118 |
| お囃子 | 76 | 75 | 78 | 73 | 107 | 103 | 129 | 128 | 173 | 171 | 200 | 198 | 261 | 260 |
| その他の民俗芸能 | | | | | | | 93 | 91 | 121 | 119 | 168 | 164 | 194 | 192 |
| 民謡・民謡 | 121 | 117 | 183 | 176 | 92 | 90 | 64 | 64 | 75 | 75 | 83 | 82 | 93 | 93 |
| 祭り行事 | | | 55 | 55 | 50 | 49 | 51 | 50 | 39 | 39 | 84 | 82 | 106 | 105 |
| 地芝居・人形芝居 | 47 | 47 | 59 | 57 | 56 | 54 | 41 | 41 | 51 | 50 | 52 | 52 | 57 | 57 |
| 能楽 | 22 | 21 | 36 | 33 | 59 | 56 | 81 | 78 | 92 | 91 | 106 | 97 | 106 | 104 |
| 伝統工芸 | 24 | 22 | 26 | 25 | 34 | 32 | 51 | 49 | 46 | 46 | 54 | 54 | 69 | 69 |
| 邦舞 | 64 | 62 | 131 | 131 | 160 | 151 | 193 | 187 | 238 | 235 | 244 | 233 | 270 | 268 |
| 和太鼓 | 86 | 85 | 122 | 120 | 151 | 147 | 185 | 182 | 246 | 245 | 272 | 266 | 321 | 317 |
| 邦楽 | 97 | 95 | 184 | 173 | 184 | 178 | 218 | 210 | 248 | 245 | 261 | 250 | 298 | 294 |
| 詩吟 | 8 | 7 | 17 | 17 | 22 | 22 | 23 | 22 | 22 | 22 | 22 | 21 | 28 | 27 |
| 短歌・俳句 | | | 4 | 4 | 6 | 6 | 9 | 9 | 8 | 8 | 9 | 9 | | |
| 百人一首・カルタ | 1 | 1 | 7 | 6 | 10 | 9 | 25 | 24 | 35 | 35 | 77 | 74 | 93 | 90 |
| 囲碁 | 50 | 49 | 55 | 54 | 61 | 56 | 67 | 65 | 88 | 88 | 113 | 110 | 128 | 124 |
| 将棋 | 43 | 42 | 51 | 47 | 69 | 67 | 64 | 62 | 91 | 88 | 91 | 90 | 93 | 92 |
| 茶道 | 117 | 105 | 247 | 173 | 223 | 204 | 290 | 285 | 362 | 354 | 428 | 412 | 461 | 447 |
| 華道 | 607 | 437 | 769 | 357 | 655 | 614 | 729 | 706 | 890 | 883 | 940 | 916 | 1,041 | 1,024 |
| 武道 | 39 | 35 | 42 | 40 | 61 | 59 | 95 | 94 | 127 | 126 | 181 | 178 | 237 | 235 |
| 書道 | 4 | 4 | 6 | 6 | 12 | 11 | 22 | 22 | 48 | 48 | 72 | 71 | 82 | 82 |
| きもの着装・礼法 | 153 | 46 | 58 | 58 | 152 | 152 | 167 | 167 | 190 | 190 | 259 | 255 | 271 | 266 |
| 大正琴 | | | 5 | 4 | 10 | 10 | 6 | 6 | 7 | 7 | 14 | 14 | 7 | 7 |
| 風流 | | | | | 37 | 36 | 3 | 3 | 4 | 4 | 1 | 1 | | |
| その他 | 36 | 35 | 48 | 35 | 39 | 36 | 88 | 81 | 123 | 114 | 124 | 114 | 142 | 136 |
| 複合型 | 176 | 174 | 285 | 215 | 340 | 325 | 599 | 584 | 715 | 711 | 762 | 746 | 728 | 701 |
| 合計 | 1,864 | 1,551 | 2,634 | 2,020 | 2,726 | 2,595 | 3,449 | 3,365 | 4,226 | 4,171 | 4,830 | 4,694 | 5,328 | 5,232 |

直根小学校における民俗芸能への取り組み

秋田県由利本荘市立直根小学校 金 利 紀

1. はじめに

今なぜ学校で、「民俗芸能の継承・保存」なのか。

- ・ 地域の実態から……①地域に活力が見られない。
②地域に楽しみがない。
③どの民俗（郷土）芸能を見ても後継者問題に悩み、危機的状況にある。
- ・ 学校の実態から……①先生方が、広域から通勤している。
②先生方が地域（人・自然・文化）を知らない。（2～3年で異動。）
③「学力向上」一辺倒で、多忙感の中、ゆとりがない。
- ・ 児童の実態から……①児童が地域（郷土）の文化に触れる機会はほとんどない。
②児童が地域の行事に参加することも少ない。
③登下校スルールバスなので、児童が地域の人を知らない。
- ・ 行政改革から ……①縦割り行政が変わらない。
②民俗芸能の担当である公民館主事が真っ先に人員削減されている。
- ・ 教育の動向から……教育基本法の改訂から、伝統・文化を重視することになった。
 - ①2006年12月22日 教育基本法の全面改訂（第2条の第5項）
一伝統と文化を尊重し、それらを育んできた我が国と郷土を愛するとともに、他国を尊重し、国際社会の平和と発展に寄与する態度を養うこと。
 - ②2008年 1月17日 中央教育審議会答申「学習指導要領の改訂について」
「教育内容に関する主な改善事項」（3）一「伝統や文化に関する教育の充実」
 - ③2009年 2月 3日 塩谷立 文部科学大臣「心を育むための5つの提案」
「3. 先人の生き方や本物の文化・芸術から学ぶ。」

学校と地域を元気にするために！

2. 本校の実践

（1）学校経営（別紙資料）

- ・ 地域を愛し、地域から愛される学校づくり
- ・ 「おらほの学校」→「オンリーワンの学校」→「直根ワールド」→「絆（きずな）」
- ・ 「地域の学校」推進委員会設立 ……「学校の応援団」。地域ボランティアの積極的活用。

（2）クラブ活動における民俗芸能の取り組み（別紙資料）

- ・ 3つのクラブ活動、直根の郷土芸能（地域の伝統文化）を取り入れた。
→①子ども獅子舞 ②前ノ沢太鼓 ③子ども猿倉人形芝居
- ・ 地域の指導者をお願いして、体験活動を中心に学習している。
- ・ 4年生以上の活動であったものを、今年度から3年生以上とした。
- ・ クラブ（郷土芸能）発表会……毎年2月に実施。クラブの成果を地域住民に披露する。

（３）「新そば」まつりにおける民俗芸能の取り組み（別紙資料）

- ・学習発表会と収穫感謝祭を合わせた学校行事。
- ・学習発表の部→「新そば」のそば打ち→百宅（もも）そばをいただく→郷土芸能鑑賞
- ・去年は前ノ沢太鼓。今年は下直根の番楽（獅子振り・鳥舞・三番叟）

（４）都市等体験事業（別紙資料）

- ・秋田県が推進している事業。農山漁村交流プロジェクトに似ているが、県単独事業である。
- ・３年生以上の児童が、東京で「日本の伝統文化」をテーマに体験学習をする。
- ・地域の伝統文化の学び→日本の伝統文化（落語・相撲・浅草寺）の学び

（５）その他の実践

- ・地域との合同運動会（７/５）…地域住民全員が集う唯一の場。
- ・全校親子鳥海登山（７/２０）…親子全員参加。１年生も全員登頂。
- ・都会との交流（９/２０～２２、１/６～８）…今年度東京都葛飾区立西小菅小学校と交流。

３．学校教育の役割

（１）成果（学校教育でできること）

- ・児童が地域に関心を持つようになった。
- ・地域行事にかり出されるようになった。
- ・地域の大人を知るとともに、声を掛けられるようになった。
- ・自信を持つとともに、地域を自慢できるようになった。

（２）課題

- ・市町村合併によって、どんどん地域性（特殊性）が無くなっていく心配がある。
- ・市町村合併によって、どんどん地域内のまとまりが薄れていく恐れがある。
- ・学校で「地域の伝統文化（郷土芸能）」を重視しようとしても、地域の保存会または地域の活力が残っていないと進められない。「地域がまだ元気うちに……」である。
- ・学校教育、社会教育の縦割り行政の区別なく、連携・融合を図らなくてはならない。

４．おわりに

学校では、「継承・保存」まではねられない。あくまでも、「地域の伝統文化（郷土芸能）に触れる」ことがねらいであり、そこで児童が興味・関心を抱いてくれることを期待している。

そして何年か経ち、地域の伝統文化に関わろうとする人が育ってくれることを願って止まない。

今、学校を中心に「民俗芸能の継承・保存」を！

今年度のクラブ活動

直根小学校

1. 目 標

- ・「地域の伝統文化を学び、大切に守ろうとする」子どもを育てる。
- ・同好の児童が協力して共通の興味・関心を追求する活動を通し、児童の個性の伸長を図るとともに学校生活をより楽しく豊かなものにしていこうとする態度を育てる。

2. 実施時間

金曜日6校時（65分間 1.5単位時間扱い）

3. 編 成

- （1）3～6年生の児童全員参加の希望選択により編成する。
- （2）外部講師を依頼し、地域の伝統芸能や文化と関連づけたクラブを設定する。
- （3）年間を通して1つのクラブに所属する。

4. 指導上の留意点

- （1）実施計画は、外部講師、担当者、クラブ員の話し合いによって決定し、興味・関心に基づいて自発的・自治的に運営できるようにする。
- （2）子どもの創意工夫を最大限に生かし、また、地域の伝統芸能や文化と触れ合う活動を取り入れながら、興味・関心を望ましい方向に伸ばせるよう支援する。
- （3）クラブ全体としての向上が見られるよう、計画的・組織的な運営を図る。
- （4）2月には1年間のクラブ活動の成果を発表する場を設ける。

5. クラブの構成

| クラブ | 担当者 | 3年 | 4年 | 5年 | 6年 | 合計 | 地域の指導者 | 場 所 |
|---------------|-----|----|----|----|----|----|---|---------------|
| 子ども獅子舞 | 柳田 | 3 | 2 | 2 | 3 | 10 | 高橋 建さん 柴田 恭一さん 佐藤 哲正さん 公民館講師 豊島さおりさん | ホール 音楽室 |
| 前ノ沢太鼓 | 田口 | 3 | 2 | 2 | 2 | 9 | 前ノ沢太鼓保存会 佐藤 重典さん 柴田 隼人さん | 直根神社 |
| 子ども 猿倉人形芝居 | 高階 | 0 | 1 | 2 | 3 | 6 | 松田 訓さん | 生活科ルーム ホール |
| 合 計 | | 6 | 5 | 6 | 8 | 25 | | |

本海番楽

1. 番楽とは

民衆古来の山岳信仰に仏教が結びつき中世に全国の山中で厳しい修行が盛んに行われ栄えた修験道の修行者であり伝達者であった山伏は、一般民衆に病気の治療や占いなどの相談役としての役割も果たしたほか芸能や進んだ知識を伝えるなど様々な影響を与えた。このうち芸能については地域に独自のものを発達させることになった。山伏が中心に行った神事や呪法が宗教性を離れて変化したもののように故事や歴史をストーリー仕立てで演劇的に舞う一種の神楽が発達した。おおよそ350～400年前頃のものである。娯楽として楽しんだり、伝承する者の集まり（講）ごとに競い合うこともあったようだ。東北地方あたりでは番楽（呼び方は秋田では番楽、岩手では山伏神楽、下北では能舞などと異なる）と呼ばれる。

2. 鳥海町の番楽

鳥海山の北麓にある鳥海町には13の集落で伝わる番楽と獅子舞を合わせて本海番楽と呼んでいる。京都の当山派三宝院の本海上人が伝えたと言われ370年の伝統があり48番の演目から成るとされる。演目は、その内容から式舞、神之舞、武士舞、女舞、道化舞の番楽と獅子舞に分けられる。現在はすべてが演じられているわけではなく、約30番が伝承されているようだ。

全体の印象としては優雅でゆっくりしたテンポ、演技を見せるという感じが伝わってくる。

昔は番楽を伝える集落ごとに作った「講」には世帯の長男だけを入れて伝承してきたが近年は受け継げる人が減って苦勞しているそうで、最少で9名、最大で31名程度となっている。それでも各集落すべてで200人以上になるそうで大したものである（1993年の調査）。

町でも保存伝承に力を入れていて盆の時期には町のすべての番楽、獅子舞を集めた競演会（「鳥海獅子まつり」）が昭和49年から開催されており、2001年で第28回目を迎えた。広い広場にある屋外のステージを利用して照明などの設備や夜店などの便宜も整え町民や町外からの見学者が盆の夜を楽しむ。

3. 番楽の伝承

町ではいわゆる「ふるさと創生事業」の一つとして平成元年に新たな獅子舞の創作を行い子供や女性も参加できる獅子舞をつくったそうで小中学生も活躍しているとのこと。将来も本来の番楽の伝承への応援になることを期待しての活動ということだ。地域の伝統行事の現代における積極的な位置づけ、理解だと言え、これらの取り組みが実を結ぶことを願いたい。



祓い獅子（下百宅）



藤五郎（八木山）

直根小「子ども獅子舞」クラブ

○指導者 高橋 建 先生より

今年度の獅子舞クラブは、3年生以上10名で始めました。最初に、太鼓の練習をします。「りんご」「ほったい」の二曲を習得してから、獅子舞の舞と囃子に分かれて練習。獅子頭を精一杯操る姿は、明日の民俗芸能への大きなステップにつながるでしょう。

子ども達がふるさとに伝わる芸能を自ら演じ体感し理解を深めることは、またとない良い機会ではないでしょうか。



指導者のお話を聞く



舞を見ながら演奏



二人一組



息を合わせて舞う

○子ども獅子舞クラブの感想

- ・4月から子どもししまいを始めて、だいぶたいこがたたけるようになりました。でも、本番ではがくふを暗記しないとイケないので、たいへんです。これからもがんばります。（3年 村上もえ）
- ・最初むずかしいと思ったけど、練習していくうちに間違えないようになったし、獅子舞の人や高橋さんの言っていることに合わせられるようになりました。そして、太鼓では、覚えていくうちにだんだん大きく、ゆっくりたたけるようになりました。2月に発表会をやる時にむけて、もっともっと獅子舞の人と合わせられるようにしたいです。（4年佐藤 梨羅）
- ・ししがしらは重くて、持ちにくかったです。動きを早く覚えたいです。今一番わたしががんばっていることは、太鼓に合わせて獅子舞を動かすことです。（5年村上 めぐみ）
- ・今まで5回ほど練習してきて、だんだんできてきたなと思います。がんばって、2月のクラブ発表会までには完成させたいです。（6年佐藤 駿）

前ノ沢太鼓

鳥海前ノ沢太鼓保存会のHPより

1. 鳥海前ノ沢太鼓の発祥

今から、およそ四百年前の天正年間に、領地知行状を豊臣秀吉から与えられた氏族、根井右兵衛正重（正重寺開基）は、かねてより深い関わりがあった信州の地より「諏訪神社」の分霊を勧請して現在の秋田県由利本荘市鳥海町の前ノ沢地区に「直根神社」を建立した。

この例大祭のおりに奉納された「長持ち」の道中太鼓として始まったのが「前ノ沢太鼓」の源流であるとされ、別名「根井太鼓」とも言う。

2. 鳥海前ノ沢太鼓の歴史

現在この例大祭は、毎年5月5日に行われ、前ノ沢町内の若衆、婦人会、子供会など老若男女を問わず総力をあげて、盛大に行われる。若衆が「長持ち」を担ぎ、軽快な道中太鼓は、子供会の男子が担当する。道中の要所では、婦人会の伝統ある「手踊り」が披露され、さらに彩りを添える。それは、わずか20戸の小さな集落とは思えない程のスケールである。しかし、ここにも過疎化の波が進行しており、あとに続く若者が少なくなっている。

平成二年、国のコミュニティー助成事業の実施団体として、町の指定を受けたことを契機に秋田県無形文化財である鳥海町の伝統芸能「本海番楽」の継承と、古今に響く「伝統太鼓」の継承そして、「創作太鼓」への取り組みに努めている。まさに和太鼓ブーム真っ盛りの頃で、素人団体にもかかわらず、各種イベント等への出演依頼が年間30を超えた時代だった。

3. 前ノ沢太鼓の特色

和太鼓とは思えぬハイテクニク、ビート感溢れる曲の選定、ステージに映える煌びやかな衣装など各団体が、我先にと導入した。もちろん、「前ノ沢太鼓」もいち早くその波に乗ったが、衣装だけは、「諏訪神社の紋」を背負っている事から、黒系の裃纏で通している。

レパートリーは、オリジナル8曲を含む16曲で、これまでの主な活動として チャリティー公演の開催、秋田県太鼓フェスティバル、東北太鼓フェスティバルへの出場、2001年ワールドゲームズ「秋田大会」開会式アトラクションへの参加などがあります。

活動の拠点は、大半が「鳥海町」ですが、由利本荘市の誕生と共に、各種イベントへの参加もさせていただいている。



直根小「前ノ沢太鼓」クラブ

鳥海前ノ沢太鼓保存会のHPより

○指導者 前ノ沢太鼓保存会のコメント

今年で3年目を迎える直根小学校「前ノ沢太鼓クラブ」の情報をお知らせします。

全児童数が36人と伺っていますので、年平均6人という事になります。昨年は、結構ハイレベルな「cheerful wind」という曲に挑戦してもらい、発表会では堂々の演奏を披露してくれました。これが私達保存会の最新曲「東の風（あゆのかぜ）」の原曲となったものです。

今年は「全児童で演奏したい」との要望があり、新たに「enjoy the beat」という曲を作ってみました。この曲はその名の通り、みんなで和太鼓のビートを楽しもうというもので、伝統の「前ノ沢太鼓」も入っています。

先日一緒に練習に参加させてもらいました。まだ練習回数も重ねていないみたいでしたが、そこそこの完成度にビックリしました。



太鼓の準備も自分たちで



真剣に指導者のお話を聞く



楽譜を見る目



全体で合わせると心が一つになる

○前ノ沢太鼓クラブの感想

- ・たいこをたたいてみて、体に振動が伝わってきて、すごいと思いました。2月にみんなのまえて発表するので、気合いを入れて成功させたいです。（3年 村上 かおる）
- ・みんなと音を合わせたり、楽譜や声出しが大変です。しばた先生の言うことを聞いて、上手にたたけるようになります。（4年 小松 瑞姫）
- ・太鼓の「ドコ」や「ドン」などの音をうまくたたけるように、もっとたくさん練習していきたいです。（6年 村上 慎弥）

猿倉人形芝居

1. 芸能の由来

猿倉人形芝居は、明治時代に秋田県鳥海町出身の池田与八（吉田若丸）が、江戸時代から続く文楽（ぶんらく）などの人形芸を基礎に、独自の工夫を加えて創案した人形芝居です。かつては秋田人形、与八の出身地から百宅人形、活動写真（映画）に対して活動人形とも呼ばれました。現在の名称は与八の弟子で活発な活動を行った真坂藤吉（吉田勝若）の出身地猿倉に由来します。

明治から昭和初期には全国各地で興行し、満州や樺太までも巡業しました。神社やお寺の祭典、農村では民家の座敷とどこでも行えるため、大衆娯楽として大変な人気を博しました。

藤吉には大勢の弟子がいて、現在秋田県内で三座が継承しています。

・・・鈴木栄太郎一座（羽後町）、吉田千代勝一座（合川町）、木内勇吉一座（本荘市）

東北各地では、盆・正月・鎮守社の祭典などの野外興行のほかにも、山間の村々の大きな民家の座敷で老若男女の娯楽として喜ばれ、庶民の芸能としても深く定着していった。

芝居の名称は、はじめ与八人形とよばれていたが、座がふえるにしたがって太夫の出身地名をとって、百宅人形・秋田人形・猿倉人形・野中人形・秋田文楽・猿倉文楽、時には活動人形・劇動人形などともよばれていた。現在の猿倉人形芝居の名は二代藤吉の出身地の名を受けついだものである。

2. 芸能の特色



与八が考案したこの人形芝居は、裾突込み指人形ハサミ式といわれ、人形の衣装の裾から腕を入れ、親指と小指にそれぞれ人形の手をはめ、人差指と中指で人形カシラのノド木をはさみます。人形師は幕の陰に隠れ、一体の人形を片手で使い、両手で同時に二体の人形を操り、何人もの声色を使い分けます。

この操法により、可能になった素早い人形カシラの交換は、手妻操法と呼ばれ、「鬼神のお松」の七変化や次々と現れる山賊との大立回りなどに見ることができます。

文楽のゆったりとした写実的な動きと義太夫節の優美さとは異なり、東北生まれらしく、民謡の調子と秋田弁による野性味にあふれ、人形操法の特徴を活かした素早く激しいそして曲芸的なやりとりが特徴です。舞台展開も次々と場面が変わり、庶民的でユーモラスな会話（喜劇）と講談調の重厚な場面（悲劇）が交互に展開され、巧みなアドリブを交え、見るものを飽きさせない展開になっています。



手妻操法



演目「鑑鉄和尚」

直根小「子ども猿倉人形芝居」クラブ

指導者 松田 訓先生より

学校と地域を結びつける秘訣は、その地域の郷土芸能を学ぶことだと思う。子ども達に、ふるさと特有の良さに関心を持たせることは、その子どもにとって生涯の宝となると思う。

特に、猿倉人形芝居は、発祥の地（直根小学校区）として地域の関心も高く、住民の支援も期待できると思う。



創始者 池田与八さんの墓前で



池田与八さんの墓をなでる



猿倉人形の実物を初めて見る



自分たちの手作り人形



手作り人形の顔



手作り人形で、自由に操ってみる

○子ども猿倉人形芝居クラブの感想

- ・ 顔を作ったり、カブトを作ったりしました。実際に顔や手をつけて操るのはむずかしかったです。やっていると手が痛くて、大変でした。たくさん練習してうまくなりたいです。（5年 村上 滉）
- ・ 今、三番叟のカブトを作ったり、人形を操る練習をしたりしています。人形を操るのは意外と難しく、動かすのに苦労しています。たくさん練習してがんばりたいです。（6年 小松 理紗）

★平成21年度 “新そば” まつり★

1. ねらい

- 本校の大きな特色である「そば」を題材に、学校・地域あげでの行事を行う。
- 学年で取り組んだ学習やそばに関する学習（総合）の成果を地域の方に見ていただく。
- “新そば”の収穫を祝い、みんなで味わう。
- 全校縦割り活動をはじめ、お年寄りや地域の方々との交流を深める。
- 積極的に計画や運営に参加し、自分たちでお祭りを創り上げようとする。

2. 期 日 平成21年11月15日（日）

3. 日 程（概要）

| 時 間 | 内 容 | 会 場 | 備 考 |
|--------------------------|--|--------------|----------------------------------|
| 8:45 9:00～ 9:20 (20分) | 体育館集合 ○開会式 ・はじめの言葉 ＊そばキャラの表彰 ・歓迎のあいさつ ・全校音楽発表「明日の記憶」（合奏） 「フラワー」（合唱） | 体 育 館 | |
| 9:25～ 9:45 (20分) | ○各学年の発表 2・3年 | 多目的H 家庭科室 | 出入りを含 めて20分 |
| 9:45～10:05 (20分) | 1 年 | | |
| 10:05～10:25 (20分) | 4・5年 | | 発表が終わ り次第、そ ば打ちの準 備をする。 |
| 10:25～10:45 (20分) | 6 年 | | 番楽も準備 |
| 10:45～11:00 (15分) | 休 憩・準 備 | | |
| 11:00～12:15 (75分) | “新そば”を打とう | 多目的H 家庭科室 | |
| 12:15～ 1:00 (45分) | “新そば”を味わおう（150食） ・百宅そば代表の方からのお話 | 体 育 館 | 片づけ、歯 磨きも含む |
| 1:00～ 1:30 (30分) | ○下直根番楽 ・獅子振り ・鳥舞 ・三番叟（6年 佐藤 駿くん） | | |
| 1:30～ 1:45 (15分) | ○閉会式 ・佐藤勝吉さんのお話 ・校長先生のお話 ・みんなで歌おう「ふるさと」 ・おわりのあいさつ（6年） | | お客さんが 退場してか ら片付け。 |

2:00～ 2:40 後片付け 4年・・・体育館 5, 6年・・・家庭科室
1, 2, 3年・・・多目的ホール、なかよしルーム

2:40～ 2:50 帰りの会
3:00 下校

都市等体験事業実施計画（案）

1. テーマ **和文化・ふるさと・西小菅**
～和文化に触れよう！ふるさと会を応援しよう！西小菅と交流しよう！～
2. 主催 直根小学校
3. 共催 直根小学校PTA・公民館・地域の学校推進委員会
4. 日時 平成22年1月6日（水）～8日（金）
5. 行き先 東京
6. 日程（集合時間～6時20分、集合場所～直根小学校）

1月6日（水）

| 6:30 | 9:00 | 14:00 | 16:00 | 17:30 | 19:00 | 20:00 | 21:00 |
|------|---------------------------|--|---------------------------------|-------|-------|------------------------------|-------|
| 直根小発 | 新庄発9:12 新幹線つばさ 車中昼食 | 交流1 出会いの会 交流会 駄菓子屋買物体験 | 交流2・和文化1 落語入門 古今亭鞆 | 夕食 | 移動 | まとめ 体験の記録 自由・就寝 | |
| 新庄到着 | 12:50上野着 | 西小菅小学校 | | | | パールホテル両国 | |

1月7日（木）

| 8:00 | 10:00 | 12:00 | 13:00 | 18:00 | 19:00 | 20:00 | 21:00 |
|-------------------------------------|-----------------------------|------------------------|------------------------|-------|---|---------------------------------|-------|
| 和文化2・ふるさと1 秋田嶋豪風 相撲部屋贈 | 和文化3 江戸東京 博物館贈 | 和文化 和食 そば | 都市体験 お台場・都庁・東京タワー見学 | 夕食 | ふるさと2 ふるさと直根会と 交流会 プレゼン紹介 | まとめ 体験の記録 自由 就寝 | |
| 尾車部屋 | 両国 | | 貸切バス | | パールホテル両国 | | |

1月8日（金）

| 8:30 | 10:30 | 11:30 | 16:00 | 18:30 |
|---------------------------------------|-----------|----------------------------|------------|-------|
| ふるさと3 本荘出身タレント 加藤夏希さんと交流 | 移動 買い物 | 上野発12:14 新幹線つばさ 車中昼食 | 新庄駅発 バス | |
| パールホテル両国 | | 15:41新庄着 | 直根小着 | |

7. 参加料 無料（秋田県「都市等体験事業」より補助されます。）
※ただし、昼食代三食分3,000円は前もって集金します。
8. 対象学年 3年生以上の希望者
9. 予定人数 児童25名（3年生以上）
10. 引率 「地域の学校」推進委員会6名（学校…校長・教頭、地域の学校…高橋健・真坂善人・眞坂悦子、公民館…豊島寛）
学校教職員3名（三浦秀巳・柳田高宏・木村かよ子）大学生ボランティア数名（都内移動のお手伝い）

餅・団子を通した様々な「発見」

～東北歴史博物館が小学生と行った民俗調査から～

小谷竜介（宮城県教育庁文化財保護課）

1. 前史
2. 2008年度の事業概要
3. 餅と団子
4. 民俗調査
5. 体験事業と交流会
6. 「発見」

1. 前史

東北歴史博物館では、2006年度より、文化庁芸術拠点形成事業（現美術館・博物館活動基盤整備事業）の請負により、小学生に係わる事業を展開してきた。本報告は2008年度事業について紹介するものであるが、まず前史として、以前2カ年の概略を記す。

〔2006年度「熊野信仰と東北」展関連事業〕

熊野信仰ゆかりの芸能を伝える小学校交流会

年度途中に企画実施

村田町村田第4小学校と石巻市寄磯小学校の交流

→交流会が想像以上に参加した小学校に高評価

〔2007年度事業「博物館を核とした学校・地域連携事業」〕

前年度を受けて、交流会を核にした通年の事業として企画

多賀城市立城南小学校 博物館に隣接する小学校

南三陸町立戸倉小学校 博物館・東北学院大学で共同調査を実施していた波伝谷集落を学区とする小学校

白石市立深谷小学校 地域バランスより選定

交流会の他、各小学校が持ち寄った体験活動などを実施、城南小学校とは、交流会を目指した通年の体験事業も併せて展開した。また、担任教諭による座談会を実施、交流会を核に据えた今後の事業展開の方向性について議論をし、一つの結論として、地域の文化資源の紹介役としての博物館の役割について一定の方向性を見いだした。

〔2008年度に向けて〕

以上のような活動を経て、2008年度は、①成果の見える体験活動を行う。②食をテーマとする。③博物館側のメリットとして、調査データの蓄積を行う活動を加える。という3点から企

画を立てた。

この3年間の事業は、モデル事業として、博物館での小学生との「連携」を模索する事業として、特に城南小学校の遠藤先生の協力のもと、試行錯誤しながら実施したものである。

2. 2008年度の事業

【概要】 資料1 参照

参加小学校：多賀城市立城南小学校

白石市立深谷小学校

調査テーマ：餅食・粉食

事業内容：①小学生による聞き書き調査

②小学生による稲作・畑作体験

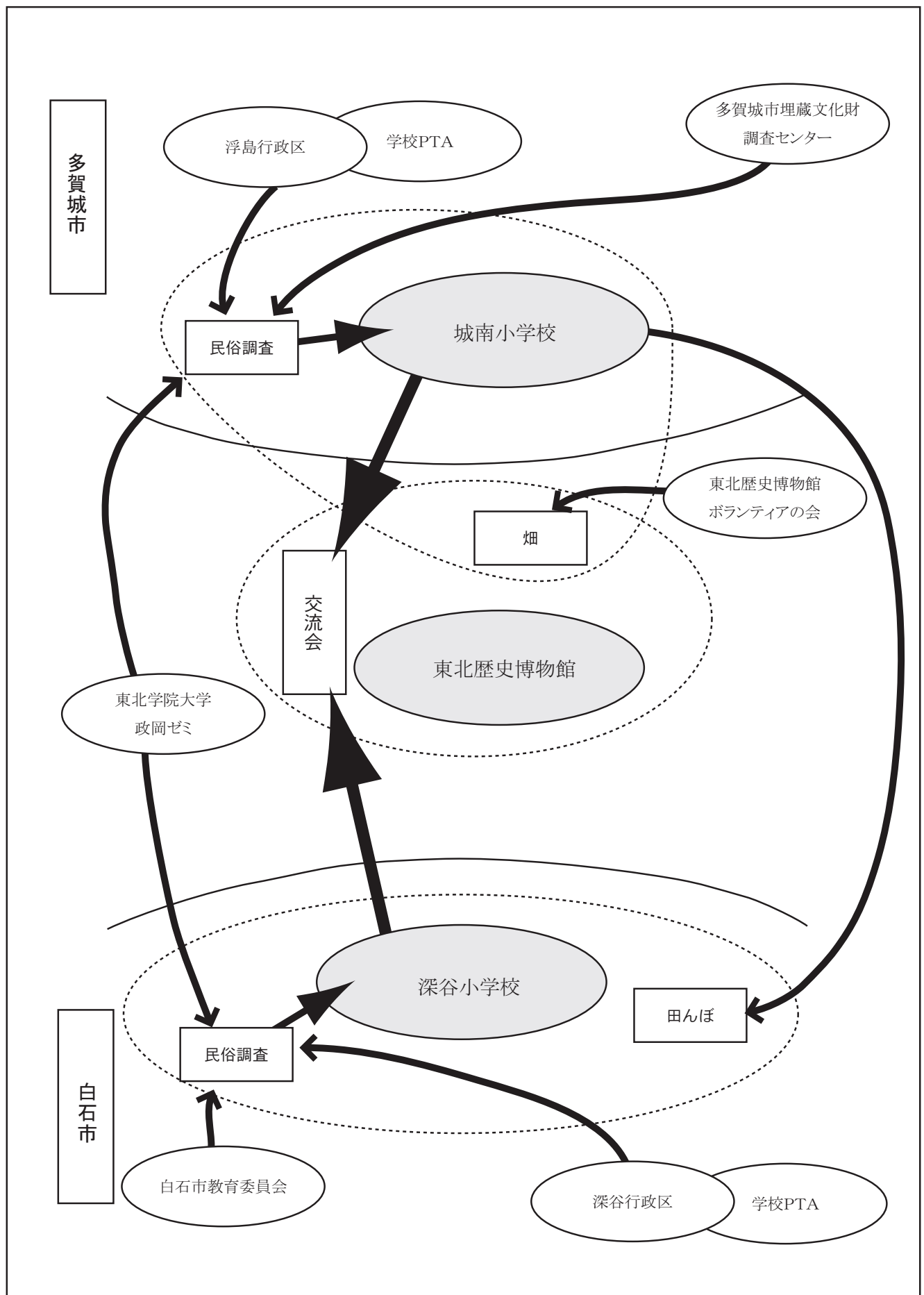
③大学生による民俗調査

④地域への民俗資料還元策としての現地報告会の開催

⑤小学校交流会における体験事業への応用

表1 事業日程

| 実施時期 | 計画事項 | | | 摘 要 |
|--------|--------------------|---------------------|----------|------------------------|
| | ①城南小学校 及び多賀城市 | ②深谷小学校 及び白石市 | ③全体 | |
| 6月24日 | 調査レクチャー | | | 会場：多賀城市 |
| 6月24日 | 小麦刈り取り・脱小 豆播種体験 | | | 会場：多賀城市 |
| 6月27日 | 調査レクチャー2 | | | 会場：多賀城市 |
| 7月3日 | 第1回調査 | | | 会場：城南小学校 |
| 7月30日 | | | 第1回協力者会議 | 会場：多賀城市 |
| 8月から9月 | 聞き書き調査 | | | 5日間 調査地：市川地区 |
| 8月から9月 | | 聞き書き調査（大学 院生による） | | 5日間 調査地：深谷地区 |
| 8月30日 | | 第1回調査 | | 会場：深谷公民館 |
| 9月25日 | 第2回調査 | | | 会場：城南小学校 |
| 10月24日 | | | 第2回協力者会議 | 会場：白石市深谷公民館 |
| 11月7日 | 小豆脱穀 | 小豆脱穀 | | 会場：多賀城市 深谷小学校の児童も参加 |
| 12月17日 | 地元報告会 | | | 会場：浮島公会堂 （一般公開） |
| 1月14日 | | 地元報告会 | | 会場：深谷公民館 |
| 1月26日 | 交流会 | | | 会場：東北歴史博物館 |
| 2月6日 | 第3回協力者会議 | 会場：多賀城市 | | |



〔要点〕

- ・ 博物館側にも直接のメリットのある活動を目指す
→ 民俗調査の実施による 1 次データの収集、体験プログラムの開発
- ・ 大学生が参加した
→ 調査体験の補助として、話者と小学生の媒介をする
- ・ 小学生に答えのない「調査」を経験させる
→ 調査体験で何が出てくるのかわからない
- ・ 一過性ではない体験を行う
→ 小学生間の複数回の交流

3. 餅と団子

〔宮城県における餅・団子〕

宮城県を調査していると、現在も餅をつく機会の多さに気が付く。また、多様な餅の食べ方があることが知られており、一関市や栗原市などでは観光資源としても注目されている。こうした餅食のあり方は、全体としては県北部（旧仙台藩領の北部）が中心であるという論調である。しかしながら、印象としてはもう少し広がりがあるようにも思っていた。

一方、宮城県は全体に民俗に関する総合調査が少なく、知られている著名な事例についての調査のみが、項目としてピックアップされ進められている傾向が強い。そこで、今回県中央部の多賀城市、県南部の白石市との事業を行うに辺り、両地域ともあまり民俗調査が行われていない事もあり、餅、団子を切り口に事例収集を行う事とした。

〔餅食の特徴－調査成果から〕

- ・ 雑煮を食べる機会

正月やいくつか報告のある盆以外にも、ツユモチとして日常的に食べられるものであった。このほかにも、湯餅など、日常の間食として食べる餅食の多様性を見いだした。

- ・ クデモチという語彙

喰いたいときに食べる餅、として、主として来客があるときなどにつかれる餅。この際余った餅がその後日常的に食べられる餅となる。

- ・ 日常食べるがゆえの多様性

栗原市の報告では 40 種、今回の調査でも、白石市深谷地区で 18 種、市川地区で 27 種の触法が採集されており、宮城県、旧仙台藩領の一つの食に関する特徴といってもよい状況にある事が確認された。

4. 民俗調査

主として城南小学校 4 年生が行い、7 月と 9 月の 2 回調査を実施した。

深谷小学校は 3 年生ということもあり、今回は学生の調査時に同行して話を聞くスタイルで実施した。

〔事前準備〕

- ・ 話者の選定 → 地元協力者会議委員に推薦をいただく。
- ・ 調査項目の作成 → 資料 2 参照

こんなしつもんをしてみよう!

テーマ1 お正月に食べるお餅を調べよう

質問1 三が日のお餅はどうやって食べたかな?

三が日とは、1月1日から3日までの3日間のことで、お正月のおいけいをする日です。この三日間の食べるものは決まっていることがよくあります。1月1日の朝にはお雑煮を食べるが、お餅はどんな餅にしていたのでしょうか?

質問2 年末に作るお餅は四角いのか丸いのか?

スーパーで売っているお餅は四角いお餅が多いですね。実は、ついたお餅を丸めただけのお餅を食べることもよくあります。市川ではお正月のお餅をという形にして食べていたのでしょうか?

質問3 1月15日にもお餅をついたかな?

1月15日は小正月(こしょうがつ)といって、1月1日と同じように、お餅いをする日でした。どんなお餅いをしていたのでしょうか?また、このときにお餅をついたのでしょうか?

質問4 お正月はいつまでがお正月だったのでしょうか?

最近のお正月は、三が日までということが多いのですが、昔のお正月は、1月31日まで続く場所がおくあります。市川のお正月はいつまで行事をしていたのでしょうか?また、1月にお餅をつく日は、ほかにもあったのでしょうか?

質問5 飾り物にするお餅にはどんなものがありましたか?

お正月にかがみ餅といって、2段に重ねたお餅をリボンなどにかざりますが、昔はもつとたくさんのお餅をかざりました。

市川では、おもちをどんなふうにしたのでしょうか?

また、1月15日にはメエタマといって、木の枝にお餅を付けたかざりものを作ることが多いのですが、市川ではどうだったのでしょうか?

こんなしつもんをしてみよう!

テーマ2 お正月以外にお餅や団子を食べるのはいつだろう

質問1 ひな祭りや、こどもの日は昔はなんというたのかな?そのときは餅をついたかな?

5月5日のこどもの日や、3月3日のひなまつりを「せつ」といいます。こうした日にはお餅をついて食べることもよくありますが、市川ではどういうおまつりをして、お餅を食べたのでしょうか?

質問2 お餅をついてお供えする日はいつかな?

お正月以外にもお餅を食べる日がありました。本によれば、多賀城市では春のおひがみ(春分の日)、五月のせつ(こどもの日)、ムケのついたち(6月1日)、虫送り(6月10日)二十日えびす(10月20日)、おだいしさま(11月24日)、湘じめ(11月15日)、水こぼしのついたち(12月1日)などがありました。どんな行事の日にもお餅を食べたのかな?聞けるだけ聞いてみましょう。

質問3 人からお餅をもらうことってありましたか?

お餅は大変なごちそうでした。そのため近くの人に何かあると、お餅をつけてプレゼントすることがありました。市川ではこういう時があったのでしょうか?また、こうしてももらったお餅はどうやって食べたのでしょうか?

質問4 だんごを作るのはどんな時でしたか?

だんごを作るのはどんな時だったのでしょうか?本によれば、多賀城では、ねはんえ(おしやかさまのたんじょう日)(2月15日)、だなばた(8月7日)、おまん(8月)、などに作ったとあります。市川ではどうだったのでしょうか?

質問5 だんごはどうやってつくりましたか?

だんごのちもになる粉はなにでしょうか?米の粉か、もち米の粉か、それとも小麦粉でしょうか?

質問6 お月見のときにはどんなだんごを食べたかな?

だんごをそなえる行事といえはお月見がありますね。市川のお月見はどんなふうにしたのでしょうか?

多賀城市教育委員会と共同で作成し、小学校側とも打ち合わせて作り上げた。

〔実調査〕

- ・ 児童 8 人に話者 1 人、大学生 2 名を配置
- ・ 児童は調査項目を元に質問の順番などをあらかじめ割り振っておく
- ・ 話者には質問項目を事前に渡しておく。
- ・ 調査時は、話の流れで、大学生が質問の順番を入れ替えたり、関連の質問を話者にして、話を膨らませるようにする。

→ 当初は、予定調和の中で順に話を聞いていく感じであったが、大学生が話を膨らませると、理解した子どもたちから、関連質問が出るようになる。



聞き書き中の様子(城南小学校)



車座になって聞き書きをする様子(深谷小学校)

〔成果の整理〕

小学生の成果は、新聞制作という形で行った。これは小学校側からの提案である。整理に辺り、児童はメモをとったノートを参考に、質問内容、わかった事、感想の 3 パートからなる新聞に仕上げた。この際、大学生に同席してもらい、自分のメモをもとに、「もっと話がなかった」「こっちの話とくつつくのでは」といったアドバイスを行い、当日の多様な話を結び付けるようにした。この間に入った大学生が、今回の事業に置いては大きな意味を持った。

すなわち、曾祖父の年代に当たる話者との間に入り、言葉をつなぐ、比較すれば自分たちの側に近い大学生がリードし、またアドバイスする事により、上の年代から話を聞くということにワークショップ入り、結果として、話の内容を理解することが円滑になった。

〔現地報告会〕

調査の成果は、それぞれ現地報告会を行った。

市川地区の報告会では、小学生が調査成果をもとに劇形式で発表した。併せて学生が研究上の成果も発表した。

深谷地区では、事業参加が 3 年生という事もあり、発表は行わず、学生の発表後に感想を発表する形とした。

現地報告会では、話者を招待し、彼らにも感想を述べていただくことにより、児童にとっても、自分たちの活動を意義づける点で一定の意味をもつものであった。



城南小学校児童による発表



東北学院大学大学院生による発表

5. 体験活動と交流会

〔農作業体験〕

調査とともに、城南小学校と実施

テンバコを使った稲作体験と、畑での小豆栽培を体験

→調査データを実感する上で重要、かつ成果がわかりやすいという点でも重要となる。

〔交流会〕

2校の児童が発表および体験を通して交流する場

通常の研究発表等は、それぞれ発表し終了というスタイルになるため、同じ時間、空間を過ごすという点で、児童にとっては刺激が大きい会となる。



小学校交流会の様子、体験の様子

6. 「発見」

子どもたちが民俗調査をすること

＝ 想像以上に多くの人に様々な「発見」を与える場であった

個別の事例（地域の文化）を子どもたちが「発見」するだけではなく、想像以上に広がりのある事業となった。

【子どもたちの発見】

- ・ 多年代の人との交流 → 世間の広がりを実感
- ・ 白石市との交流 → 地理的な空間把握

【地域にとっての発見】

- ・ 何気ないと思っていた事、外部から来て不思議に思っていた事＝民俗について、子どもを媒介とする事により改めて気づく。

【大学生の発見】

- ・ 学問としての民俗学を地域に還元する、ということを実感
- ・ なんとなく行っていたフィールドワークを見直すきっかけに

【教員の発見】

- ・ 必ずしも特別な技術（知られている特徴的なもの）を通しての地域との交流事業である必要はない → 餅といったものでも十分地域の題材となる。

こうした「発見」は、段取りをした調査「体験」や、単独の体験事業だけでは得る事はできず、複数回の調査や、長期間の体験、イベントの開催といった通年で繰り返し行った事業全体の成果であり、また、こうした事業に多くの人が関わり、更には職員や大学生が事業の過程で得た調査データそのものをおもしろがり、それを伝えながら実施した結果であったと考える。

子どものためだけではなく、子どもを媒介とする事で、多様な伝承のきっかけを作る事ができるのではないかな。

【参考文献】

- 『宮城の餅食文化―博学連携事業報告書』岩館・柏井・岡山・小谷編、東北歴史博物館（2009）
- 『博学連携事業化報告書』東北歴史博物館（2008）
- 『郷土食の現在』第24回東北地方民俗学合同研究会資料集、東北民俗の会（2005）

【参考HP】

- ・ 『宮城の餅食文化』ダウンロード先
http://www.thm.pref.miyagi.jp/archives/book_pdf/minzoku/miyagi_mochishoku.pdf
- ・ 芸術拠点形成事業採択事業一覧
平成19年度（リンク先に事業報告書あり）
http://www.bunka.go.jp/bijutsukan_hakubutsukan/shien/19_saitaku_ichiran.html
平成20年度
http://www.bunka.go.jp/bijutsukan_hakubutsukan/shien/20_saitaku_ichiran.html

アンケート結果

第4回無形民俗文化財研究協議会 アンケート集計結果

| | | | |
|-------|-----|------------|-------|
| 参加者総数 | 107 | アンケート有効回答数 | 84 |
| | | アンケート有効回答率 | 78.5% |

参加者内訳

| | |
|--------------|----|
| ①一般参加者 | 98 |
| ②事例報告者 | 5 |
| ③コメンテーター | 2 |
| ④司会・コーディネーター | 2 |

参加者所属

| | |
|---------|----|
| ①行政関係者 | 72 |
| ②保存会関係者 | 4 |
| ③研究者 | 24 |
| ④その他 | 7 |

アンケート結果

(1)-3 所属（複数回答あり）

| | |
|---------|----|
| ①行政関係者 | 62 |
| ②保存会関係者 | 2 |
| ③研究者 | 14 |
| ④その他 | 7 |
| ⑤無回答 | 0 |

(2) この協議会に参加して

| | |
|--------------|----|
| ①非常に有意義だった | 55 |
| ②有意義だった | 29 |
| ③参加する必要はなかった | 0 |
| ④無回答 | 0 |

(3) この研究協議会に出席して有意義だったと考える理由

(非常に有意義だったと回答したもの)

- 今の時期は、資料館に小学 3、4 年生の見学が増えるが、話をするたびに子供たちの産業やふだんのくらしとの隔絶に唖然とする。当地は田舎なのに稲束を見せても「麦！」と答える有様である。民俗芸能などもきっかけにはなろうが、地域の行事や、食文化など、身近なものから触れさせるのは有効であろうとヒントになった。
- 文化財行政の当事者として、いろいろ考えさせられました。
- 事例のそれぞれが異なる立場、フィールド、事業のため、自分達が主体となったときの運営に生かせる内容ばかりであった。もう少し、現場（伝承者・保護者・学校の先生など）の意見（感想、ニーズなど）がわかると良かった。
- 各地のとりくみ、ケースを知ることができたので今後の研究の参考になる。ただやはりこういう問題は、最終的にはヒトなのかと思う。
- 事例発表はさまざまな立場や状況の方からたいへん示唆に富む実践を披露していただいた。文化庁が行う研修にあるような上意下達的な感じがなく、それぞれの立場を考慮しながら発言があり、たいへんすばらしかった。
- 考えさせられることが多く、刺激になりました。
- 様々な立場の方から、広く民俗文化財の後継者育成の話を知ることができて興味深かった。学校にしても博物館にしても、熱意ある担当がいれば教育に組み込まれるが、(今回の発表

者は皆そうですが) 熱心な人がいない地域は無形民俗文化財が消えてゆくのだと思うと、担当者同士が話し合い、情報を交換しあうこのような機会は非常に有意義だと思う。

- 子供をめぐる伝承の様々な問題を多面的に理解できました。伝承を維持させるために子供に伝えてゆくという問題と、子供の教育に民俗伝承はどのように活かせるのかという問題は、今後も各々整理して考えてゆきたい課題です。
- 無形民俗文化財の継承にむけて、努力している地域と行政中学校の、活動を知ることができました。とくに子供まで対象とする必要性を考えさせられました。
- 多くの問題点が見い出せた。
- 無形民俗文化財の継承に関する様々な問題性は自明のものであるが、それらに対応するために多岐にわたる試みが行われていることは大変重要であると思われる。この試みを参考にし、それぞれの現場に活かせる可能性が垣間見られた。また、このような体験を通じて多くの子どもが参画する道を準備することも、文化財保護行政の大きな仕事であると再認識した。
- 現在も懸案として根本的な解決策が見つからない「後継者不足」の問題を考えるうえで大変参考になった。行政だけでなく財団や学校のナマの声を聞けたことは、今後の業務を行う際、非常に役立つ。
- いろいろな事例を聞けることは、このような機会しかない。実態を知る事はヒントになるので、2日間くらいかけて全国の事例を聞けたら、もっと案が思いつくかもしれない、と思います。
- 当市では、公民館の行政センター化により、10年以上前から社会教育主事の配置が行なわれていない状態にあり、また文化財行政も合併後、広域な範囲をみることになり、地域の伝統芸能等になかなか手がつくせない状態にあるため、博物館と地域のつながりという新たなアプローチを知り大変有益でありました。
- 無形民俗文化財の共通の問題が抽出することができた。民俗とは人と人のつながりであり、地域のなかでそれがどれほど大切かということが再認識することができた。行政の役割というものが理解できた。地域の当たり前が当たり前でなくなっている事実を受け止め再び当たり前に戻すことが必要ということを確認することができた。
- 金先生の事例発表は大変に参考になった。
- 各団体の現状がよく分る。
- 私の市内でも、小学校6校、中学校1校で、民俗芸能の保存会が指導するクラブ・部活動などが行われていますので、各事例発表共、大変興味深く拝聴致しました。保存会の方は、学校での指導は地元の芸能を知ってもらいたいと同時に後継者育成を強く期待している中で、時間を割いて行っているわけだから、地域を活用した学校支援などに利用されがちな郷土芸能ですが、文化財保護の行政の側からすれば、切実な保存会のためにも、これらの学校での活動が、後継者の保存、育成に結びついてもらいたいと心から願っております。ひとつひとつの事例発表の時間を多くとって、もう少し掘り下げたお話を伺えるとさらに良かったと思います。
- 博物館として、行えるとりくみなどが参考になった。特に小谷先生のお話は、博学連携をする中で、「昔の暮らし」や「戦争」といったキーワードばかり求められているので、このような視点を取り入れることも可能という事がわかりよかった。

- 当区には国指定・都指定の神楽、国指定の祭拍子・囃子の他、大山講中関係の無形民俗文化財があります。伝承の形態や後継者の育成方法も様々ですが、急速に進む都市化の中で、やはり古くから住む人々を中心に行なわれている現状です。新しい住民も含めて、より広くこれら無形文化財を地域にとって大切なもの（意義あるもの）として根付かせていくことが課題であります。特に子どもへの普及、子どもを次世代の後継者として育成していくことが重要となっています。今回の協議会の事例報告の中から行政としてのかかわりについて、例えば子どもの参加を進めるために親の世代に文化財としての意義を浸透させる努力など一たいへん参考となりました。
- 公務で役立ちそうな情報や事業を知ることができたので。
- 取り入れてみたいと思う事例が多くありました。どの報告も、単なる実践でなく、きちんとした指針や目的があることを強く感じました。
- 発表・討議ともに充実した内容で勉強になった。
- 全国での様々な取り組み事例を聞くことができて、非常に参考になりました。
- ①現場で無形文化財を守り継承することに苦心されている方々の思いと実践をほり下げて聞ける数少ない場であるから。
②最後の総合討議の質がとても高かった。コーディネートが素晴らしいのに加えて、やはり各先生方の質、体験や思いの強さの目安です。時間が短い、あっという間の一日でした。ありがとうございました。
- 日常の業務の中で忘れがちになる、事業の「意味」を考え直すよい機会となった。また、博物館活動を行う上で、「手段」の面でも参考となるが多かった。具体例の報告が多かったことが、大変良かった。
- 各事例報告から学べた。生活に根ざした伝統・民俗文化の保存・継承を考えさせられた。
- 民俗芸能継承における継承者の確保に関して、ヒントを得ることができた。
- 自分の子供が現在小学生で、地域の民俗芸能（東京都清瀬市下宿囃子）を授業に取り入れた授業参観があったので、他の地域ではどうしていらっしゃるのか興味を持ちました。うちの地域は、芸能の伝承という点ではまだまだ関わり方が浅いと思いました（受け身という感じです）。
- 実践的な事例をとりまとめ、情報交流・交換には非常に有意義。
- 他県の現状を聞くことができてよかったです。見えない部分が多くあることに気づきました。ありがとうございました。
- 民俗文化財の課題として、いろいろと考える必要があると感じた。
- 後継者育成と学校とうまく連携して成果のあった事例発表ということで、参考になりました。
- どこの地域でも悩みは同じ。活動の説明にアイデアをもらった。
- 事例発表という形ですので、様子が把握し易い。総合討議は質問への回答形式ですので、短時間（限られた時間）の中では理解をし易い。
- 元々子供が直接関わった無形の民俗と本来大人の行事や芸能であった事柄が、現在かなり混同されている。民俗芸能に触れる機会としての子ども民俗芸能をとらえながら、後継者として育成して行くことが考えられた。直根のとりくみの理念が良かった。

- 無形民俗文化財の伝承者として少子化が問題となり、危機感をもたれているのと同様、一般的伝統芸能（日舞、邦楽）でも子どもの入門者は減少しているので、これから子どもたちへの普及活動に対して再考するよい機会となったと思います。
- 小学校、博物館、公民館といった異なる分野の話が聞けたため、講座を企画する上で参考になりました。
- 同じように少子化等による後継者不足に悩む自治体の取り組みを知ることができた。
- 単なる理論ではなく、実践を通しての話なので具体的で、感銘を受けた。すぐにでも郷里に帰って役立つ情報が多く、有難い限りです。
- 無形民俗文化財の抱える、現代的な問題点にダイレクトに関係してくるテーマで、さまざまな立場の方からの発表があり、いろいろなことを考えることができた。子どものことを考えるのは、やはり文化にとって基本的なことなのかと改めて感じる事ができた。
- 勤務する町では、無形民俗文化財の継承が難しくなりつつあり、具体的に考えなければならぬため、その方策を考える上で大変参考になった。継承の問題は究極は地域社会の存亡であるのかもしれない。
- 様々な立場からの発表をうかがうことができ、考える点が多かった。
- 研究者、行政担当者、博物館、教員など、さまざまな立場の方々の事例をお聞きすることができて、非常に有意義でした。協議会を通して、さまざまな意見交換や交流ができればと思います。
- 博物館として、研究や展示以外の方法で民俗芸能と関われる事例をご教授頂きました。今、うちの博物館ならどういうことができるのかわくわくしながら頭に思い描いております。
- 出席者が危機意識を持ち熱心な討議であった。
- 報告者に限らず、全国各地から集った方々と交流でき、学会とは異なる次元でしかも濃い対話の場となったので。
- 現在、当市でも民俗芸能を含め無形民俗文化財の保存・継承は大きな課題となっている。保存団体それぞれが努力して、現状を維持しているが、子どもたちや若い世代に順調に継承が進んでいるというまでにはなっていないところが多い。学校との連携・協力によって、子どもたちへ伝承していく取り組みも校長先生の考え方でうまくいったりいかなかったりということもあるようである。無形の民俗の伝承と子どもの関わりということで、いろいろな面からの伝承の取り組みの先進事例が聞けてたいへんよかった。地域の状況が様々にちがうなかで、報告された事例の成果のようなことが、どこでも同じようなことを行えばそうなるということではないだろうが、無形の民俗の伝承を進めていく上でのヒントとなるものではないかと思う。金先生のお話、たいへんよかったです。
- とくに伝統文化こども教室の問題はタイムリーだった。毎回のことですが、質疑応答の交通整理が見事で、多くの意見交換がスムーズにできて、意義が高まります。今回は橋本先生のコメントも良かったです。最後のまとめも良かったです。
- 毎回、現実的なテーマで開催されるので、参加をするように努めています。様々な取り組みや、実際にそれをやられている現場の方々の意見を聞くことができ、自分の仕事や普段調査をさせていただいている保存会の方々と話す際などに、直接参考にさせていただけるような事例も豊富で、大変有意義な会だと思っています。都道府県、市町村の文化財担当の

方々が、もっと多く参加してほしいと願っています。

- 発表事例のバランスがよかった。発表の内容が充実していた。発表者の質問へのお答えも経験にもとづいた具体的なもので、わかりやすかった。
- 子どもを通した様々な取り組みを拝聴し、大変有意義だった。また改めて「伝統」とか「地域」について考えさせられる契機となった。
- 具体的な事例を聞くことができて、有意義。
- 地域・博物館・学校という三者連携の取り組みの好事例が聞けて、非常に参考になった。実践できればと思います。

(有意義だったと回答したもの)

- 無形民俗文化財の担当になってまだ一年も経たないので、全国の取り組みを聞けてとてもよかったです。伝承者不足の問題は、印西市でもおきていることなので、本日聞いたことを参考にしたいと思います。
- 全国各地の情報などが理解できて良かった。
- 地域の伝統文化を継承していくには、子供達の積極的な参加が必要であると常々思っています。行政としてその支援の方法などを知りたくて参加しましたが、具体的取組例の説明でいくつか参考になるものがありました。最後の俵木さんのまとめは非常に分りやすかった。
- 文化財行政に携って7ヶ月半。いろいろな活動状況を学習することができたから。
- 現在の職に就き、2年目となり、今回はじめて参加させていただきました。本県においても民俗文化財の保護団体の後継者問題や、本年度まで実施の「祭り・行事」調査等で昔からの「祭り・行事」が行われなくなっている状況は深刻であると感じました。そのようななかで、地域や学校の継承のとりくみをきくことができないへん参考になりました。今後の文化財行政に活かせればと考えております。
- どこの地域でも無形民俗文化財の継承が大きな問題になっており、こどもを介して文化の継承しようという取組みを聞いた事。
- 学校教育と民俗芸能継承の関係は時代と共に流動していることを強く認識させられました。
- 民俗文化財のみならず文化財の継承に関して、具体的にどう展開すべきか、日常考えていることへの一助となった。
- 実際に取り組んでいる人の具体的な事例と苦労が伺えた。逆に無形であるが故に、この時代で残していくことの難しさを感じた。また一方で、多くの無形民俗文化財は農業をベースにしている面があるので、農業を行わない地域が増えることで文化だけ残せというのも片寄りがあるのかも知れない。
- 教育現場の声が聞いたこと。先生の意識に左右されるので、「学校の特色」として学校、地域で価値を確立させる必要を感じた。こども教室は、10割補助のため、補助金漬け、頼みの側面があり、ソフト支援を行わなければ金を出し続けるデメリットがある。
- 子どもが行う芸能だけの話題と思っていたが、年中行事・民俗調査等多面的な面から子供と無形民俗文化財のかかわりの可能性を考えさせられた。

- 民俗文化財の担い手となる子どもの減少という問題にどのように対応していくか、各地の具体的な取組み例を聞くことができた。
- 子どもたちや親に興味をもってもらう工夫も含め、子どもたちに伝承していきたいという大人の熱意は伝わりました。しかし、そもそもとして、なぜ伝承しなければならないのか、重要なのか、それをどのように子どもたちに、また民俗に興味のない大人にどのように説明していくのか、その辺の話も聞けたらと思いました。学者さんの間では当然の認識があるかもしれませんが、これをストレートに一般の人に伝えられたら、広く理解を得て、伝承について盛り上げていきやすいのかとも思いました。
- 現場の状況、声を聞く良い機会。
- 本市も数多くの民俗芸能が伝承されていますが、どこもその継承に苦慮しています。学校を主体に継承者育成の場としていた保存会もありますが、曲がり角に来ている部分もあるようです。どこの切り口から見ても課題は山積していますが、行政の立場から何ができるのか、スタート地点から戻って考えるきっかけになったと思います。有難うございました。
- 今後、民俗・伝統などをどのように博物館でいかしていくか、考える機会になったので。様々な機関で試行錯誤されていることを知れたので。
- 「温度差」をどう縮めていくか、が様々なところで課題となっていること。関心をどう掘り起こしていくか、に焦点をあてていきたいと感じました。
- 子供に着目する伝承が本格的に行われていることを知ったことである。
- 本年4月に現職に着任しました。行政職のため、全く未知の分野です。とりわけ無形文化財は対象も少なく、学芸員もあまり注意を払っているとは言えません。今回参加して、他市町村でも、伝承の継承が問題となっていることを知り、自区の課題を再認識しました。無形民俗文化財はとりわけ研修の機会が少なく、貴重な協議会の時間でした。
- 市町村の文化行政担当者で、転勤しない長期在職者があり、次第に外部にいた人間が、伝承者の意識を持つようになってくるという報告などに興味を持った。「伝統文化こども教室」のさまざまなしつけ効果の例を、参加者が事例報告したなかに、重要なことがあった。
- 仕事柄、民俗芸能にかかわる事例は聞く機会がこれ迄にもあったが、今回首都圏内に近い大磯にこどもたちの七夕行事があり、現在も行われており、又地元の資料館とのかかわり方など知ることが出来た。同様に、餅・団子を通した「発見」も興味深く、新しい知識を得たし、各世代の役割の置き方も参考になった。
- 時間の都合で、途中で中座しました。発表者の話は非常に有意義ではあった。
- 実践報告があり、各地域の取り組みが参考となった。また、学校現場での実践が今後の資料館運営にとっても参考になるものであった。地域差、学校差もありますが、校長先生の意欲、熱心さは大切にしていきたいものです。伝統文化こども教室は存続させましょう!!
- 一度にたくさんの事例報告を聞くことができることもためになるが、一事例 30 分は短く、もう少し掘り下げた内容で聞きたい。せめてもう 10 分増やして課題（問題点）や今後の活動、展開を含めて聞かせていただけたらと思います。
- 各地域の伝承の実態が、的確にとらえられているため。
- 事例発表から様々なことを学ぶことができた。

- 子供の行事の継承するためのご苦労がわかり、私も地元で行事が消えていくなかでどうしたらよいか、参考になった。

(4) 今後この研究協議会で取り上げてほしいテーマ

- 地域（農山漁村）の産業の継承とからめた地域文化の伝承。
- 無形の民俗文化財によるまちづくり、まちの活性化、上記における問題点、注意点。
- 学校での取り組みは、やはり小学校のことが多い。中学校の方が忙しいからと思われるが…。中学校での伝統文化の取り組み（全校的な体勢の）の実践例が聞ければと思います。
- 地芝居。
- 「伝統文化こども教室」でのお話に関連させて“民俗伝承の経済・経営”といったテーマは如何でしょうか。助成金のあり方を含めて。あるいは地域への経済効果なども含めて。
- 継承がむずかしくなっている、後継者のいなくなった無形民俗文化財の後援・後継者の発掘・育成の事例で成功・有効なものをもっと教えていただければ幸いです。
- ユネスコにおける、無形文化遺産と地方行政との関わりについて。
- 無形民俗文化財の観光化について。行財政改革が文化財行政に及ぼす影響について。
- 今回のような子どもとのかかわり、また地域の青年層とのかかわり。行政の支援。
- 伝承者の交替時期にきている保存会が結構ある。それは、勤めが忙しく後継作りをする時間と手間がとれないという、少子化・限界とは別の問題がある。その打開策。
- 市で民俗芸能連絡協議会を所管しているのですが、活動や取り組みなどで悩む事が多く、どちらか特色があったり成功しているといった事例があれば参考とさせて頂きたいです。
- 民俗文化財の継承と観光。
- 情報発信力や対幹部、財政等へのアプローチ力の成功事例があればいいなと思います。中身というよりも外枠の話なので、なかなか難しいかとは思いますが、「武器」にはなります。
- 民俗技術に関わる材料確保の問題について（取り組みの事例など）。川崎の民技会のお話などもお聞きしたい。無形民俗文化財を「保護」と「記録」すること（元滋賀県文化財課の長谷川嘉和さんのお話しをぜひ）。地域の産業・生業と無形民俗文化財との関係、特に民俗技術について。行政の産業課の方のお話しなどもお聞きしてみたい。文化財の枠組みに入らない分野をどう扱うか。
- 都市化に伴う民俗文化の保存・継承について。
- 若年層の取り込みに成功した事例について。
- 活動拡大の方策について。
- ユネスコ無形遺産と地域。
- 無形民俗文化財の展示（紹介）。
- 後継者に悩む自治体や民族の海外の事例（高齢社会の北欧や少数民族の文化保護等）。

- 学校との協力の実践報告と問題点を、この辺で整理してもよろしいかと思います。総合的学習の時間の減少、教師の多忙などで難しい時期に直面しています。
- 無形民俗文化財の変容について。古式にのっとるというのもひとつの考え方ですが、「カタ」だけが文化なのか、全体の組織というか、ムラの中での構造というか、その位置付けでの文化なのか、いろいろと理解するために迷う部分があります。マスメディアとの関係性の中での「地域」の文化というとらえ方においても、変容はありうべきか考えてみたい。できれば、もっともっとテーマを細かく区切った方が、全体としてはおもしろくなる気がします。今回はテーマが大きかったので。
- これまでの本協議会のテーマがどのような事を取り上げてきたかわからないが、今日の事例報告でもあったように、無形民俗文化財の保護・保存のための1つとして、映像記録保存の具体例とその活用を知りたい。
- 博物館と無形民俗文化財。少子高齢化と無形民俗文化財。
- 伝統文化と学校教育の関わりについては、10年に1度ぐらいで検証していく方がいいと思います。
- 今回初めて参加させて頂きましたので、なかなか思い浮かびませんが、今回のテーマがとても有益でしたので、数年経ったらまた同じテーマでちがう事例を取り上げながらやって頂けたらばと思っております。
- 各種の事業の評価の観点を検討してほしい。
- 総合討議で話題となった縦割行政関連については、東京都荒川区の文化館がきわめて巧く中間的ネットワークを立ちあげて地元に関与している。そのような事例を中軸に取りあげつつ、「民俗文化財に絡む縦割行政」問題を取りあげて欲しい。
- もう一度、同じようなテーマを取り上げてほしい。
- 指定などにならない無形の民俗文化財の再発見。どのように守り伝えていくか。逆に観光と連携した文化財について（観光に適する、適さないも含めて）。いずれにせよ、何もない地域とされている（いた）ところでの民俗伝承と発展・継承について。
- 無形民俗文化財への博物館の関わり方について。展示、調査、イベントなどの事業について。各館の取組の事例やその影響（効果？）について。展示では有形の民俗を扱うことが多い博物館ですが、様々な事例を通して、無形の民俗に対してどのように関わっていけるのか、伝承する側の人々や民俗そのもの、地域に対して、博物館ができることについて様々な方々のご意見をもっと聞いてみたいです。
- 民俗芸能大会（青年館～ブロック～県）の功罪の検証。記録選択の報告書の作成ノウハウの共有（分野を問わず）。民俗芸能研究・民俗学の功罪の検証。
- 歴史まちづくり法は、国指定の文化財（無形民俗文化財を除く）を核として、まちづくりを考えていくこととありますが、無形民俗文化財を核とした、まちづくりができないのかと考えているところです。「無形民俗文化財とまちづくり」的なテーマとしての協議会はいかがでしょうか。
- 文化的景観。
- 一度、休止してしまった無形民俗文化財の保存会が、また再開できるようになったという事

例をとりあげてもらえるとうれしいです。

- 地域資源としての民俗芸能の活用について、観光資源としての活用と、文化財としての保存の並用について。
- やはり、無形民俗文化財の継承です。
- 復活した無形民俗文化財。
- こどもとの無形民俗文化財の関わりだけでなく、無形民俗文化財の継承が大きな問題となっており、地域の中でどのような取り組みを行なって継承していつているか。(新住民と旧住民、伝承者の喪失等)
- 伝統文化こども教室に関わる事例は、再度お聞きしたい(別の角度から)。
- 無形(民俗)文化財保持者―保存会のイマーにおける文化財的意義の理解と啓発。昔から伝わったことを伝えている、に留まらず、自ら高い意識(文化財保存)を持って地域で発信していくために。団塊の世代の民俗芸能の参加。子どもの事業は、夢もあり、有意義だが、一方、伝承者となる人数も少ない。大量退職時代を迎えて、地元で地元を見つめて生きていく世代は、民俗芸能に参加できないのか。
- 民俗文化財の面白さ、その価値を、地域住民や一般の方にどうやって伝えていくか、効果的なアピールのしかたなど。
- 無形民俗のなかの有形文化財について。
- 子供を相手に教える伝承者が生きがいにしている例、歩どまりの少ないことにながっかりしている例などを今回のシリーズものとして取り上げて欲しい。
- この会では、ふさわしくないと思うが、「民俗芸能」という名称以外の、名称はできないか。「民俗」という言葉が与えるものが大きすぎて、昔の「郷土芸能」とか「地域伝承芸能」とかいう言葉がすきまをうめていると思われるので。
- 民話や方言などの伝承。(ことばの伝承とことばによるコミュニケーションの力)
- 民俗文化の保存・継承の方法、地域とのかかわりなどを。映像での保存方法、活用方法など。

(5) その他の要望

- 記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財に対して多少なりとも意識のズレがあるのではないかと思います。
- 私ども財団法人長浜曳山文化協会は、平成2年より、竹下内閣の「ふるさと創生1億円」を基金として、長浜曳山祭の「子ども歌舞伎」の義太夫、三味線弾きの人材を育成しており、現在では4〜5人が毎年曳山祭に出演しております。また、当協会は国の重要無形民俗文化財に指定されています。「長浜曳山祭の曳山行事」の保存団体として活動しております。
- 民俗専攻の専門職がない中で、民俗の実務をこなさなくてはならず、悩む事が多々あり、このような研修は、本当に貴重と感じます。長く続けて頂きたいです。
- 民俗芸能や、こども教室への評価の方法について提案です。ネットワーク作りを評価するこ

とはできないかと考えています。社会学の方ではソーシャル・キャピタル論があります。それを導入すれば、伝承活動も評価できそうな気がしています。

- ぜひ継続してください。
- 県レベルとの共催などをして、理解のない行政幹部に対して、「こりゃ、うちとこもガンバランといかん」というような気持ちを植え付けるような企てもお願いします。それも現場への大きな支援になると思うのです。
- 研究協議会のテーマとしてはそぐわないかもしれませんが…。無形民俗文化財の「意味」を現代社会にどのようにアピールするか？（サラリーマン家庭に育つ大多数の人々に、何について説明するか。実際、何が重要なのか。本当に必要なのか）を考える（相互に報告しあう）機会があるとよいと思います。例えば「仕分け人」の人々にも理解してもらえるような、どんな具体的な提示ができるのでしょうか。「この業界」内外で議論できるとよいと思います。難しいでしょうが、実際に不要論をお持ちの方や、分野外の方を説得するような企画もあってよいかも（出来レースではなく）。無形だけではなく有形民俗文化財（民俗資料）も含めて。他者に説明しようとすることは、「自ら」の存在意義を確認する最たる方法か、とは思っています。
- 来年も是非継続して下さい。
- どういう形で、報告事例を指定してられましたか？
- 民俗芸能大会と地域で行う行事との差など…。地域における民俗文化財のあり方について。あと、各保存会の人による発表なども取りあげてほしい。
- どうしても成果があがった成功例のような事例が多くなるとは思いますが、問題点や反省点があった場合もご教示いただきたいです。
- 終了時刻は厳守でお願い致します。
- 本日はありがとうございました。
- 大変役に立つ有意義な会でした。御苦勞に心からお礼申し上げます。
- さまざまな発表があつていろいろと勉強になる一方、30分少々ではものたりないな、と感じるのも正直なところ。今回の例でいえば、七夕やカブキ等をもっともっと事例として詳しく知りたかったし、子どもの民俗調査についても、細部での苦勞や工夫もうかがいたかったが、そうすると発表者数がへってしまう面もあり、難しいところだとは思いますが。例えば、事前にプレジюмеのような形で、ネット上でもいいので、それを出し、それをふまえた上で、もっと内容のいい発表をしていただけたらとも思いますが、そうすると発表者の負担が大きいかとも思いますし…。
- 今回の通知を受けるまで、東京文化財研究所に無形民俗文化財を扱うセクションがある事を知りませんでした。東文研の無形民俗文化財に関わる研究成果をもっと発信してほしいと思います。
- このような会を他地域でもできないかと思っています。関西で開催すれば、こちらの保存会の方々も参加しやすいのですが…。今年の報告書は10冊ぐらい欲しいです。よろしくお願いします。大変面白いので、県内で頑張っている保存会の方にも配りたいと思います。
- 東文研さんの施設見学の時間もあれば嬉しかったです。
- この会は、ぜひこれからも続けてください。

- やっぱり、昼食のことかな。
- 関西地区でもこのような協議会を開催していただく機会があればと思います。
- たいへん有意義な時間をすごすことができました。ありがとうございました。
- 今後もぜひ継続をお願いしたい。
- 開会の時間を早めてほしい。開会行事の時間も少なくしてほしい。できるだけ発表の時間の確保をお願いしたい。

第4回無形民俗文化財研究協議会 参加者

| | | | |
|-------|---------------------------|-------|-------------------------|
| 赤澤 明 | 堺市市長公室国際部 | 鈴木 裕子 | 八王子市教育委員会生涯学習スポーツ部文化財課 |
| 阿部 武司 | (株) アサヒプロダクツ (東北文化財映像研究所) | 鈴木 規夫 | 東京文化財研究所 |
| 新井 卓 | 坂戸市教育委員会社会教育課 | 須藤 武子 | 日本民俗舞踊研究会 |
| 飯島 満 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 | 角 美弥子 | 政策研究大学院大学 文化政策プログラム |
| 石井 聖子 | 常陸大宮市歴史民俗資料館 | 関 孝夫 | 上尾市教育委員会生涯学習課 |
| 板垣 時夫 | 白岡町教育委員会生涯学習課 | 関口 宣明 | 調布市郷土博物館 |
| 伊藤 優 | 仙台市教育委員会文化財課 | 蘇理 剛志 | 和歌山県教育委員会生涯学習局文化遺産課 |
| 伊野 義博 | 新潟大学教育学部 | 高桑いづみ | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 入江 清次 | 新潟市文化観光・スポーツ部歴史文化課 | 田中 浩 | 鶴ヶ島市教育委員会社会教育課 |
| 入江 宣子 | 日本民俗音楽学会 | 陳 玲 | 新潟県立歴史博物館 |
| 上田 浩二 | 山梨県教育委員会学術文化財課 | 出水 伯明 | 映像工房出水 |
| 鶴飼 均 | 亀岡市教育委員会社会教育課 (亀岡市文化資料館) | 土居 浩 | ものづくり大学 |
| 宇田 哲雄 | 川口市立文化財センター | 徳重 敬子 | 藤沢市教育委員会生涯学習課 |
| 内田 幸彦 | 埼玉県教育局市町村支援部 生涯学習文化財課 | 戸田 剛 | 浜松市役所生活文化部生涯学習課文化財担当 |
| 埋忠 美沙 | 早稲田大学演劇博物館グローバル COE 助手 | 中村 茂子 | 実践女子大学 |
| 榎 美香 | 千葉県立房総のむら | 中村 規 | 都市民俗研究所 |
| 大熊佐智子 | 野田市教育委員会生涯学習部社会教育課 | 中藪 規正 | ブレインズネットワーク |
| 大島 建彦 | 東洋大学名誉教授 | 中山 弘樹 | 日野市郷土資料館 |
| 大山 孝正 | 福島県文化財センター白河館学芸課 | 南條 雅樹 | 財団法人ポーラ伝統文化振興財団 |
| 岡田 栄治 | 群馬県教育委員会文化財保護課 | 錦織 稔之 | 島根県立古代出雲歴史博物館 |
| 小川 真 | 桶川市教育委員会生涯学習課 | 二本松文雄 | 南相馬市教育委員会文化財課 |
| 香川 義美 | (株) テレビ神奈川営業局 | 橋本 裕之 | 盛岡大学文学部日本文学科 |
| 懸田 弘訓 | 福島県文化財保護審議会委員 | 服部比呂美 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 柏村 修 | 神奈川県教育委員会教育局生涯学習文化財課 | 原島 知子 | 鳥取県教育委員会事務局文化財課 |
| 金子 健 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 | 半貫 芳男 | 狭山市教育委員会生涯学習部社会教育課 |
| 金田めぐみ | 富山市教育委員会生涯学習課 | 樋口 昭 | |
| 鹿山くみ子 | 太田市教育委員会文化財課 | 俵木 悟 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 刈田 均 | 横浜市歴史博物館 | 福持 昌之 | 京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課 |
| 川上由美子 | 埼玉県立歴史と民俗の博物館 | 藤澤 麻子 | 船橋市郷土資料館 |
| 川本真由美 | 横須賀市教育委員会生涯学習課 | 星野 厚子 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 丸藤 真也 | 酒田市教育委員会文化課 | 松崎 睦彦 | 東村山ふるさと歴史館 |
| 城井 智子 | (社) 全日本郷土芸能協会 | 松本 美虹 | 羽村市郷土博物館 |
| 城所 恵子 | 神奈川県民俗芸能保存協会 | 松本 保之 | (財) 伝統文化活性化国民協会 |
| 北出 猛夫 | 東京文化財研究所 | 松山 直子 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 北村 尚幸 | 大鹿村教育委員会社会教育係 | 真部 正明 | |
| 吉川 周平 | 京都市立芸術大学名誉教授 | 丸尾 依子 | 山梨県立博物館学芸課 |
| 木原 善和 | 八千代市文化伝承館 | 三井田章吾 | 朝霞市教育委員会文化財課文化財保護係 |
| 久保田裕道 | 東村山ふるさと歴史館 | 道澤 明 | 横芝光町教育委員会社会教育課生涯学習係 |
| 栗田 武志 | 茨城県教育庁文化課 | 宮田 繁幸 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 小池 充 | (財) 長浜曳山文化協会 | 宮永 一美 | 福井県教育庁文化課 文化財保護室 |
| 小谷 竜介 | 宮城県教育庁文化財保護課 | 宮部 遙 | 岐阜市教育委員会社会教育課 |
| 小西 沙和 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 | 宮前 功 | 東京都教育庁地域教育支援部管理課文化財保護係 |
| 後野 真弥 | 鎌ヶ谷市教育委員会生涯学習部文化スポーツ課 | 村上 晃子 | 墨田区教育委員会生涯学習課 |
| 小峰 園子 | 葛飾区郷土と天文の博物館 | 森 容子 | 東近江市教育委員会文化財課 |
| 小谷田政夫 | 稲城市教育委員会生涯学習課 | 山崎あさぎ | 戸田市立郷土博物館 |
| 金 利紀 | 由利本荘市直根小学校長 | 山崎 和巳 | 多摩市教育委員会教育振興課総務・文化財担当 |
| 近藤 静乃 | 東京文化財研究所芸能部 | 山下 祐樹 | 熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係 |
| 佐伯 博文 | 品川区教育委員会事務局庶務課文化財係 | 山村 恭子 | 館山市立博物館 |
| 坂田 寿子 | 山村流伝統芸能研究会 | 横尾 早紀 | 印西市教育委員会生涯学習課 |
| 佐川 和裕 | 大磯町郷土資料館 | 吉川 雅智 | 城陽市歴史民俗資料館 |
| 設楽 隆 | 多摩市教育委員会教育振興課総務・文化財担当 | 吉田 剛文 | 板橋区教育委員会生涯学習課文化財係 |
| 清水 周 | 国立市教育委員会 生涯学習課 社会教育・体育担当 | 渡辺 直哉 | 三浦市教育委員会生涯学習課 |
| 神宮 善彦 | 群馬県立歴史博物館 | 綿貫 潤 | 東京文化財研究所無形文化遺産部 |
| 新堀 章江 | 目黒区教育委員会事務局地域学習課文化財係 | | |

あとかぎ

個人的な話になるが、私が「民俗の伝承と子ども」の問題に出会ったのは、自分が大学院で民俗芸能の本格的な調査研究を志して最初に訪れたフィールドである、岡山県の備中神楽においてであった。すでに15年も前のことだが、そこでは子どもが神楽をやるのはごく普通のことだった。ただしそれは、「この地域では誰でも神楽を嗜むものだ」といったような、紋切り型の民俗理解にありがちな状況のことではない。ある種の社会制度として「子ども神楽」の実践が根付いていたのである。町の多くの学校には神楽クラブがあり、地域の色々な機会に「子ども神楽大会」が催され、なんと子どもを対象にした神楽の私塾まであったのである。そんな環境で、神楽をやりたいと思う子どもは自分から選択して、それを習うことができた。もちろんそれは地区ごとの祭りに奉納される神楽とは別のものだったが、少なくとも近年新たに太夫になる若い演者たちの大半は、そうした場所を入口にして神楽に入ってきたのだった。聞けばこの地域で、学校に神楽クラブができたのは昭和40年代の初頭であったという。その裏には、郷土の研究者であり、同時に地元の小学校長でもあり、後には町の教育長にもなった人物の存在があった。後に知ることになったのだが、これは今回報告をいただいた事例の一つ、大鹿歌舞伎の状況とよく似ている。

以来、子どもと民俗の関わりを考えると、私はいつもその状況を思い出す。翻って近年、「学校で民俗芸能を！」というのがある種のブームのように持ち上げられるのを、漠然とした不満をもって聞いていた。そこでは学校という制度にいかにも民俗を取り込むかという学校教育側からの発言が目立ち、民俗が「教材」として都合よく使われるばかりのように思われたからである。もっと民俗の側から、対等の立場で学校に声を届けられないかというのが、今回の協議会のテーマを考えた背景にあった。

残念ながら、学校関係者を多く招いて直接的にこの問題を討議するという目論見は、様々な事情で断念せざるを得なくなった。だとしたら、「学校」という枠組みを相対化する意味も含めて、もっと広い文脈で子どもと民俗の関わりを考えてみようということになった。もともと子どもの行事として伝えられた大磯の七夕行事、あるいはいかにも学校で体験させやすい民俗芸能などに対して、もっと潜在的な生活文化としての東北の餅食文化などはそうして視野に入ってきたものである。

さて、この報告書をお読みいただいた方であれば、前に述べた私の雑駁な理解が、見事に、良い意味で粉碎されたことはお分かりだろう。子どもと民俗をめぐる実践的な取り組みには、学校だけではなく、民俗と子どもを媒介する様々な立場がある。博物館や資料館、公民館といった公的な組織はもちろんのこと、子どもの保護者や地域にやってくる新住民のような、一見民俗の伝承とは縁遠い個人まで。そういう多様な立場を踏まえて、子どもが民俗に触れるためのネットワークをどのように構築するかというのが、おそらく今回の事例すべてにわたる共通の重要性の認識であった。唯一の学校での実戦例であった直根小学校の例でも、学校がなくなった後ですら、地域を母体としてその実践を繋げていこうというリベラルな発想をされている。学校か民俗かという二項対立的な捉え方は、そういう実践を展開していくためには制約にしかない。多くの学校が、学校という制度の枠組みに固く閉じこもるのではなく、地域の様々な立場の人々との関係を積極的に築いてくれば、そこから生まれる実践の可能性の幅も大いに広がるだろう。逆に地域で民俗に関わる立場からも、学校に対してもっと多くのアイデアを投げ掛けられるよう、準備をしなければならない。今回の協議会がそのお役に少しでも立ったのであれば嬉しく思う。

もう一つ浮かびあがってきたのは、現在における民俗への関わりの意義を、どのように表すことができるかという課題である。民俗文化財に関わる立場では、その民俗事象がこれから

長く伝承されることが是であり、最優先の課題であると無条件に考えがちである。もちろん、結果としてそうなるのであればこれは喜ばしいことだが、それ自体が自己目的化してしまうという危険性を意識する必要があらためて感じられた。伝承が次世代に続くか否かはあくまで結果であって、そこに参加する人が何を求めて、どんな意義を見いだしてそれに関わるのかということこそ、考えなければならない問題である。

その意味で、総合討議のなかで議論されたように、民俗の伝承に関わることの楽しさの認識、関わることで生まれたり得られたりするものということを、時代に合わせて再考し続けなければならないだろう。多くの民俗芸能や行事を意味付けてきたとされる農耕予祝や疫病除けや祖先供養などといった観念を、今の時代の子どもに押し付けても無意味である。その一方で、民俗に親しむことから得られるものは、今の時代にもあるはずである。一緒に行事をする中で得られる友達や世代の離れた地域の人との関係、そうした人とのつきあいの作法を知ること、何かを作り上げたり、ある役割を演じきることの達成感、あるいはそこでおいしいものを食べられたり、楽しいことをしたという単純な喜び、そういうものを民俗に関わることを通して、子どもたちにどれだけ感じてもらうことができるかという指摘はきわめて重要だと思われる。東北の餅食の事例のように、意外と知らない、自分の生活する地域の文化の「発見」というのも、そうした喜びや楽しみに繋がっているはずである。

これはまた、コメンテーターの橋本氏が指摘するように、こうした話題を文化財に指定された民俗芸能や行事だけを事例に考えることの危うさにも繋がる問題だろう。指定を受けた文化財としての民俗であれば、何となく伝承することの大義を自明のことに納得してしまうが、それではそういうものが地元にある子どもだけ、そういうものに触れる機会がある子どもだけしか導けない。しかし民俗とはそもそも、人の生活の中に様々なかたちで存在する身近なもののはずである。普段は気がつかないかもしれないが意外と身近にある民俗に、新たに出会う子どもたちの一人一人に対して、そこにどんな魅力があるのかを考え、感じてもらえるような仕掛けを用意する。それこそが、子どもと民俗という問題を考える私たちに課された役割なのだと言えそうである。

私たちがこれから考えなければならない課題が多く出た協議会であったが、それこそ多くの立場の人を招いて開催するこの会の醍醐味である。報告者、コメンテーター、そして参加したすべての方々にあらためて感謝する。

(文責・俵木悟)

独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所
第4回無形民俗文化財研究協議会報告書

—無形の民俗の伝承と子どもの関わり—

平成22年3月31日

編集・発行
独立行政法人国立文化財機構
東京文化財研究所無形文化遺産部
〒110-8713 東京都台東区上野公園13-43
TEL 03-3823-4925